明治二十九年九月二十四日發行

女鑑

第百拾七號

東京國光社

女鑑第百十七號

目録

葦屋處女



女鑑 第百十七號

女たるべき道

女の守るべきは貞操なり。愼むべきはその獨なり。このまことの心かたからば、目に見えぬ鬼神もあはれと思ふべく、天地をも轟かすべし。まして人をや。もしこのこゝろかたからずば、いかばかり才あまり、わざすぐれたりとも、世にうとまれ、親兄弟は更なり、夫にも遂に見かぎられて、身のおきどころもなきに至りぬべし。愼しむべきなり。たとへばこの眞心は根本なり。學問技藝は枝葉なり。この學問技藝によりて、身を修め、家をとゝのへ、世に益をなすは、花實なり。根本たしかならずんば、いかでかもよき花實をば結ばんや。

そも〱女と生れては、遂に人の妻となり、母となり、よく舅姑に事へ、夫に從ひ、よく夫を輔けて、家をとゝのへ、子女を教養して、くちをしからぬが女の貞しき道なり。いまだ年わかくて、人に嫁ぐに至らざるほどは、心うごきやすくて、物にも迷

ひやすかるべければ、殊に心をしめて、かりそめにも油斷あるべからず。女の身をあやまりて、一生の間人に齒せられざるに至るは、多くはこのほとにあるなり。今家まづしく、身賤しかりとも、心がけ一によりては、富み且貴きにもなり得べく、今富み且貴かりとも、心がけあしからば、遂に家をも身をも得保つべからず。最心すべきときなり。心を淸くし行をすまし、いさゝかも後ぐらきことあるべからず。さてよく親につかへ、兄弟に友に、女たるに欠くまじきわざを修めつゝ他念あるべからず。一たび嫁ぎては、不幸にして、家亡び、身死とも、貞節をやぶりて、夫をかふべからず。よく舅姑の心にしたがひ、夫をたすけて、人に後指さゝるゝが如きふるまひあるべからざるなり。人の世にあるほどは、順境ばかりはあるべからず、折にふれては、逆境にも立つこともあるなり。かゝる折は身砕け、骨は粉になるまでも、力を盡して身を處すべきなり。もし舅姑道なく夫々たらずとも、妻は妻の道をつくしなば、などかは、これを矯めざらん。もし夫道なしとて、更に他夫にとつぎ、それも亦心にかなはずとて、又更にかへなば、遂に際限もな

かるべし。その心固くして、動かすまじく、眞心つよくして、撓めかだからば、人誰か感せざらんや。其の心貞實にして、志をかへざるは、我が國古來の風儀なり。常にいとまあらば、すぐれたる貞婦孝女の傳をよみて、其のあとにならふべきなり。



女子の言語の使ひ方　萩野一

人智の進むに從ひて、言語の變化は、多少免れざることとなるが、去りとて女子は成るべく、女子らしき言語を使用するは、其の女子なるものゝ本性に對して、必要缺くべからざることとなり。第一女子は言語の使方に依りて、淑德をそこなふことあり。假令へば、『車を呼むでお呉れ』と云ふを、『車を命じてお呉れ』又『まことに可愛さうです』と云ふを、『實に憫然です』と云はゞ、女子の詞としては、孰れか穩和にして、孰れか靜肅なるかは、說までもなし。平たく言はゞ、女子たるものは、或る事物、又は事故に

て、漢語を使はざれど、解せざるものは、兎に角、其の外成るべく、從來我が國にて使用し來りたる詞を用ゆべしと云ふにあり。

近頃女子の詞は、一種奇態の變調を呈し、或る物事を指示し、使用する詞にして、殆んど男子と區別し難きもの數多あり。

想ふに此の女子の詞をして、斯く變調を呈せしめたるものは、重に新聞紙と小說等にあるが如し。然し是れとて今日、我が國女子教育の完全ならざる社會なれど、女子間題に就きては、誰人も妙案を持たざること故是非もなきことなり。

我が國にては、昔より女子の使用し來りたる、一種の慣用詞あることなれど、社會は進步したりとて、新聞紙や小說本に、新奇なる詞ありたりとて、特更に之れを學ぶに及ばず。女子の漢語を使用する程、聞苦しく見苦しきことはなし。

又今日女子社會に於ても、交際其の他物事の上に就き、漢語を使用せざれど、理解せざるもの一もなし。然らば女子たるもの、成るべく其の通常使用する處の詞に注意して、漢語を使用せざる樣にするは勿論、他の女子社會にても、斯かる詞を使用する人人あらば、充分に注意し置くべきなり。實にも女子の詞の不恰好なるは、芳花に雨あるが如く、明月に叢雲の翳せるが如くなれど、女子たるもの能く〳〵愼むべく、又戒

むべきことにこそ。

女子教育一班（二十五）

三輪田眞佐子

まことや、人はいつまでも學びて、全智萬能となり得んには、こよなう良きことならんも、昨日蕾の花も、今日無常の嵐に散るころ世の姿なれど、紅顔の乙女笑ふ勿れ白頭の老媼を。誠に老若はつかのまの前後に外ならず。故に今年人の老を笑ふものは、明年自の老を笑はるゝ理を知らで、少年いかでか若を恃むに足らむ。長者いかでか老を歎くに及ばむ。唯、人は智を練るべき少年の時期に學び、業を爲すべき壯年の時期に果し、遂に老を樂むべき末路の時期に安ずるを以て、人生を全うせしものところ言ふべけれ。然るに、この時期を適當に經過せずして、學事は成れど、既に老朽て、とを施すに堪へざるか、あるは、有爲の時期に達せんも、夙に學ばざるため、毫も智なきを以て、蚤々と光陰を送る如きは、兩つながら一生の遺恨ならずや。（スペンサー）曰ひけらく、如何に能く時を費すかを知るは、教育上肝要なりとぞ。げにさるものにて、かんながら限ある命を以て、限なき智を學ばむとするは、能はざることぞかし。

わきて女子丁年に達するときは、結婚なる天分を盡さゝるべからず。されど、普通教

育に於ての知育も、相當の年齢中に於て施さゞるべからず。若し智育の必要のみを知りて、他の事情を察せざるときは、桃の夭々たるころの葉蓁々たる時を過ぐし、智識胸に滿つれども、如何せん、容姿既に衰へそめしを以て、これを迎ふるものなきに至るめり。あはれ、人を怨むべきは、仰ぎて昊天に問ひね、わが國に早婚の弊あるは掩ふべからざることながら、そは女子の罪にあらず、男子の尤なり。多く男子の妻を求むるものは、二八の上僅に一つ二つを越ゆる齢のものを欲するを以て、供給需用なる經濟上の法則も、人の身の上にさへ應用し得るものにや。高等教育を受くるため二十才を過ぎしものは、止むを得ず獨身にて止むか、さなくも後妻、あるは、思はしからざる緣を結ぶ外ぞなきころ世の例なれ。蓋、かゝる風潮の源は、妻を以て偕老の友と思はずして、單に嬉樂の具と見るものから、智を言はず、唯美を採るならむ、淺ましき心にこそ。兎に角、この風潮の立つ限は、婚姻の時期と、修學をなす歲月との關係を考へて、中庸を標準となすべし。然らざれど、早婚の不幸を蒙らざるものは、獨身の境界に陷らざるを得ず。況してわが今日の事物は、多く西洋の風習を參考するなれど、西洋人は、わが國民よりも聊か長壽の別はなきか、將た血氣の衰ふることも遲きにはあらざるかを考へざるべからず。若しさあらんには、おのづから彼我の差別なかるべき。

さて、後章、女子の體育に於てものすべきことなれば、元來女子の大任は、國民の母にしあれば、女子學事のため、腦を痛め胃を損じ、あるは、肺さへ常ならずして、顔色蒼然活氣衰亡の身とならば、其の腹より生るもの、迚も三軍を叱咤する勇士となる能はず。將た堅忍不拔にして、聖賢の書を韋編三たび絕つばかり温ねて、宇宙を大觀する學者となる能はじ。その他、實業家なり、技術家なり、各その大家となるには、なほ更健强なる母より生れしものならでは、體質上資格なきものなれば、人類のため、國家のため、女學を以て女子の健康を損せざるやうつとめざるべからず。思ふに、男子は女子よりも骨格强きのみならず、運動など、總て體育の方便よきを以て、學事のためさまで攝生に影響せざらんも、女子は然らざることそ是非なけれ。さりとて、無學にて止むべきにあらざれば、健康を害せざるやう工夫して學べとなり。

亦世事をつとむる上より考ふるに、男子が專ら任ずべきわざには、故ら女子がその任に堪ふる智識を養はんも益なきことなり。例之ば航海建築、あるは法律上の智識などは、將來は知らず、今日の情態より見れば、女子に關係なきが如し。從ひて數學、圖畵など、種々の學科には、男女趣を異にすべきものならむ。これに反して、女子の特に主るべき人事も決して少からざれば、その点に就きては、男子よりも一層高尚なる

ことを學ぶ必要もあらむかし。

上に述つる如く、諸の條件を、あるは分析し、あるは總合して、女子は如何なる智識を專ら養ふべきかと議を定めずして、かゝる智もありてよからん、かゝる能もなくてはあかぬ心地ぞするなど、算へんには、濱の眞砂の數知れざるが如し。易に曰く、亢龍悔ありと、凡ろ人は身のほどを知り、よき程度に安せざるときは、始ありて終なき結果を得るに至らむ。



史談

葦屋處女

鹽井ふく子

津の國、浪速の津に、處女塚と云ふ塚ありけり。一名を求女塚とも呼ぶとかや。その塚三箇所にありて、一は、住吉川の西、御田村の東、田畔の中にあり。その塚のめぐり百五十間ばかりに及ぶ。一は、東明村にあり、塚のめぐり百間ばかり、塚の上に松

の樹二十株あり。一は味泥村の濱手、大石村の間にあり。塚のめぐり貳百間許、これも塚の上に松の樹あり。東の方を西面とし、それを茅渟男の塚と呼ぶ。土人はまた鬼塚とも呼ぶとか。西のを東面とし、それを菟原男の塚と呼び、中の塚を南面として、それを、求女塚と呼びて葦屋乙女をはうむりたるなりと云ふとか。己れ思ふに、その中の塚を處女塚と云ひて、東西の二つの塚をこそ誠は求女塚と呼ぶならめと思ひぬ。そはとまれ、かくまれ、此の塚のゆかりを聞くに、あはれにも、いとはしくも思はるゝなり。

此の塚、いと古くより立つにやあらむ。万葉集巻の九にもこの葦屋處女の墓を過る時に作れる歌とて、

いにしへの、ますらをの子の、あひ競ひ、妻どひしけむ、あしの屋の、うなゐ處女の、おきつきを、吾がたちみれど、永き世の、語りにしつゝ、後の人、忍びにせんと、玉鉾の、道の邊近く、岩かまへ、つくれる塚を、あまぐもの、退部のかぎり、此の道を、ゆく人毎に、行きよりて、射立ちなげかひ、わび人は、ねにも哭きつゝ、かたりつゝ、しのびつぎくる、處女らが、おくつきし、吾した見れどかなしも、いにし思へど、

反歌

いにしへのさゝ田をのこの妻どひし
　うなゐ少女のおきつきぞこれ

またその卷の九に蟲麿の歌とて、

墓の上にこのえなびけりきくがごと
　ちぬ男にしよるべけらしも

などありて、誠にふるくよりその名高く傳はり、今は津の國の古跡とさへなりて、此の地に杖をひくもの、中にも文人雅客の、爭ひて立ちよる處なりとか。

そも〳〵そのゆかりを尋ぬるに、古津の國、葦屋の里に住む人の娘にて、心も姿もいとうるはしき少女ありけり。その少女をいみじうあはれに思ひて、はては己が妻となさんとよばふ男、二人なんありける、ひとりは同じ國に住むうばらと云ふ男、今一人は和泉の國に住みて、ちぬと云ふ男になんありける。かくてその男ども、年の頃も、顔も、形も、人のほども、ただ同じばかりなりけり。志のまさらんにこそはあはめと思ふに、心ざしのほどもまたたゞ同じやうなり、暮るれば諸共に來あひ、物をおこすればたゞ同じやうにおこす。いづれがまさり、いづれがおとれりと云ふ、ふしもあらね

た、ひまも見えじ。處女は、ひとりに思はるゝだに、苦しからんに、まして、二人ひとしく、心かはらず、同じやうに、志を見せらるゝ苦しさ、やる方もあらざりけり。久しき内には、志のたゆむ方やあらん、そをまちてんと思へど、何れもたゆまず、くぢけず、中々に月日をふるに從ひ、これも彼も、いよいよ志厚く、深く、家のかどに立ちて、よろづに心をつくしつゞけ、これよりもかれよりも同じやうに、れこするものども、もとよりとりも入れねど、何かと心をつくし持ちて立てり。ろの母、之を見て云ふやう、かく年久しう見ぐるしく、人の情を徒らにするもいとほし、ひとりにあひなば、今一人の思ひは絶えなん、何れにか思ひ定めて、あひねと云ふを、娘うちきゝて、此處にも、いつまでも數ならぬ身故に、人々をわづらはさん事、如何にも心ぐるしけれど、何れを何れとも定めがたく、同じ情、一人にまげんもすまず、されども身の二つなきに、たゞ思ひわづらふばかりになん。たゞ親人の御心にまかせてんにも、げに道理と思ふふしをまうけさせ玉へと、うち泣くに、母親、さらば已にまかせよ、よくはからはんとて、やがて、生田の川の面に、ひらばりと云ふ天幕の如きものをうち張りて、其處に娘をつれ行きて居らせ、やがて男どもの許へ、人を遣して云ひけるやう、先きつ日より、數ならぬ我が子を、二つなくればして、あるは遠き

所より、或は此處ながらにいたみ玉ふ事、うれしうも、くるしうも、これも、かれも、いとはしく、いとかしこく、親も、子も、何れとも定めかね、思ひまどひ侍りぬ。今日は如何にもあれ、此の事を定めまつらんと思ふに、よき思ひのうかび侍ることあり。此の川に浮きて遊べる水鳥を射玉へ、そをまとに、天とも思ひて、あてたる方に、此の幼きものを奉らんと思ふは如何にと云ひやりしに、二人ともそはよき事なりとて、よろこび、己こそは射あてめ、我こそは志を貫かめと、急き來りて互に心をこめ、力をかぎりに、ひきはなつ矢、かくばかりに二人一心をつくす矢に、天の如何で分かたれん。またもやまさりもおとりもなく、一人は頭、一人は尾を射つらぬきしに、女はいよ〳〵思ひわづらひて、苦しさやる方なく、

住みわびぬ我が身なげてん津の國の
　生田の川は名のみなりけり

とうちよみて、うちなき、やがてひらばりの中より、すべり出でゝ、その川に身をなげぬ。母親おどろき、あわてまどひ、のゝしりさわぐ程に、かの二人の男も互におくれず、同じ處に落ち入りて、一人は少女の足をとらへ、ひとりは手をとらへて死にけりとなん。また或る書物には、うばら男と、ちぬ男と、二人互にさしちがへて死にき

ともあり。何れが誠にや、上古の事、今此處にわくよしもなし。親いみじうなげきかなしみ、なく／＼その少女を葬りぬとかや。男どもの親たちも來りて、此の女の塚の傍に又塚どもをつくりて、埋めしに、津の國に住めるうなゐ男の親、同じ國の男こそ同じ處には葬らめ、異國の人にいかで此の國の土をば貸すべきと云ひて、妨ぐる親心もをかしきに、和泉に住みけるちぬ男の親なりけるもまた、其處の國よりわざ／＼土を舟にて運びて、此處に持ち來りて、その傍に埋めけると云ふ。何れも子故に迷ふ親心のあはれさ。されば女の墓をば中にして、その左右に男の塚どもきづかれぬ。物かはり星うつりて、白骨もまた朽ちぬれども、纍たる三墳、ありし世のなごりをとゞめ、後この求女塚にて、新田義貞朝臣、足利尊氏と戰ひ、義貞の軍大にやぶれ、僅に五千騎ばかり丹波路をさして落ちんとするに、數万の敵、勝に乘じて是を追ふ事甚だ急なり。されどもいつもの習ひとて、義貞朝臣、味方の軍勢を落延びさせんため、後陣にひき下りて、返し合せ戰ひけるほどに、義貞ののられたる馬に、矢七筋までたち、こらへず小膝を折りて倒れたるに、義貞此の求女塚の上に下りたちて、乘りかへの馬を待ちけれども、味方之を知らざるにや、下りてのせんとする人もなかりけり。敵之を見てかこむ事いよ／＼急なれど、義貞が猛虎の勢、あたるべうも覺え

ず、辟易してみな引きさがり遠矢に射ける矢、雨よりも急に、あられよりもしげく、危さ云ふもかりなき折りから、小山田太郎高家、遙の山の上より是を見て、もろあぶみをあはせて馳せ參り、己が馬に義貞をのらせ、我が身はかちになりて、追ひかくる敵を防ぎ〳〵、遂に敵あまたにとりかこまれ討死せしとか。されど義貞、小山田のために、九死よりもあやうき命をたすけられし處なりとて、此の塚の名もいよ〳〵高くなりしとか。

此の葦屋處女の話し、いとなまめかしく、うきたるたはれ事のやうなれど、何れにもなびかず、まして、二人にあはんともせず、生田川の底のもくづときえはてたる心の深き。人情紙よりもうすき今の世に、かて丶西の國のあやしき風俗さへに加はりて、二人にあふ事をはづかしとも思はざる人々、この處女に對して如何なる思をかなす。問はまほしや。

佐介貞俊の妻

永石薫風

佐介貞俊か妻、その名と氏とは、ともに傳はらず。貞俊は北條氏に事ふ。元弘の亂に、軍に從ひて、金剛山を攻めき。この戰やみて後、貞俊とらはれとなれり。さて身ころ

さるべかりしかど、いかで形見のものをのこさむやとおもひて、僧にたのみて、着たりける衣と、とりはける太刀とを、妻のもとに遣りて、おのれは刑につきてけり。僧こ
のかたみのものを持ちて、行きてありつるさまをものがたるに、妻これを見て悲みなげくことかぎりなし。かくて歌を、

たれみよと形見を人のとゞめけん
たへてあるべき命ならぬに

とありけるものにかきつけて、刃にふして、身うせにきとなん。

みてもなほ
そてそぬれぬる
なきひとの
かたみさしのぶ
みつくきのあと

（萬代集）



家政

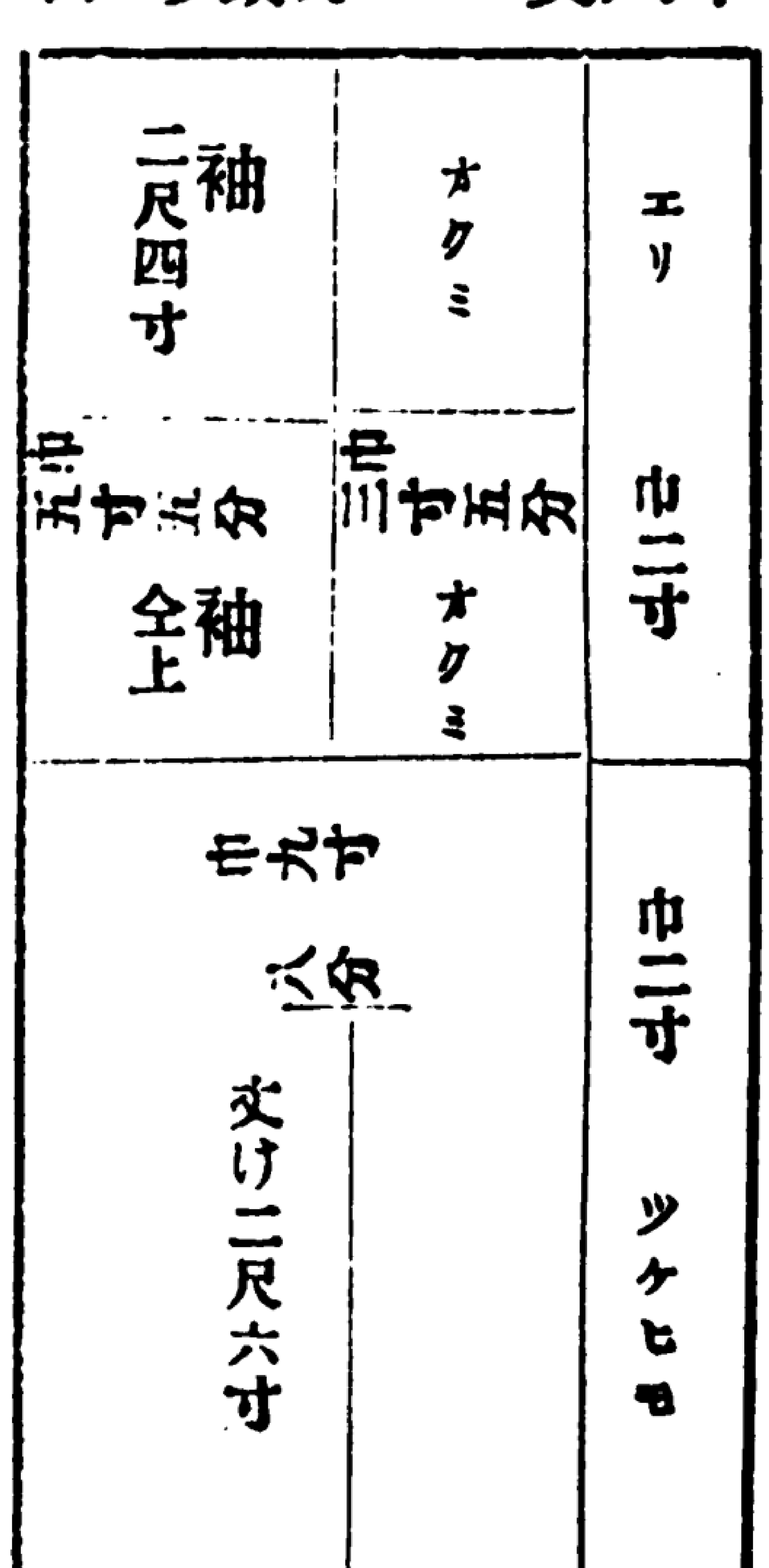
たちぬひ

西山たい子

(四十八)　本八丈一ッ身裁ち方

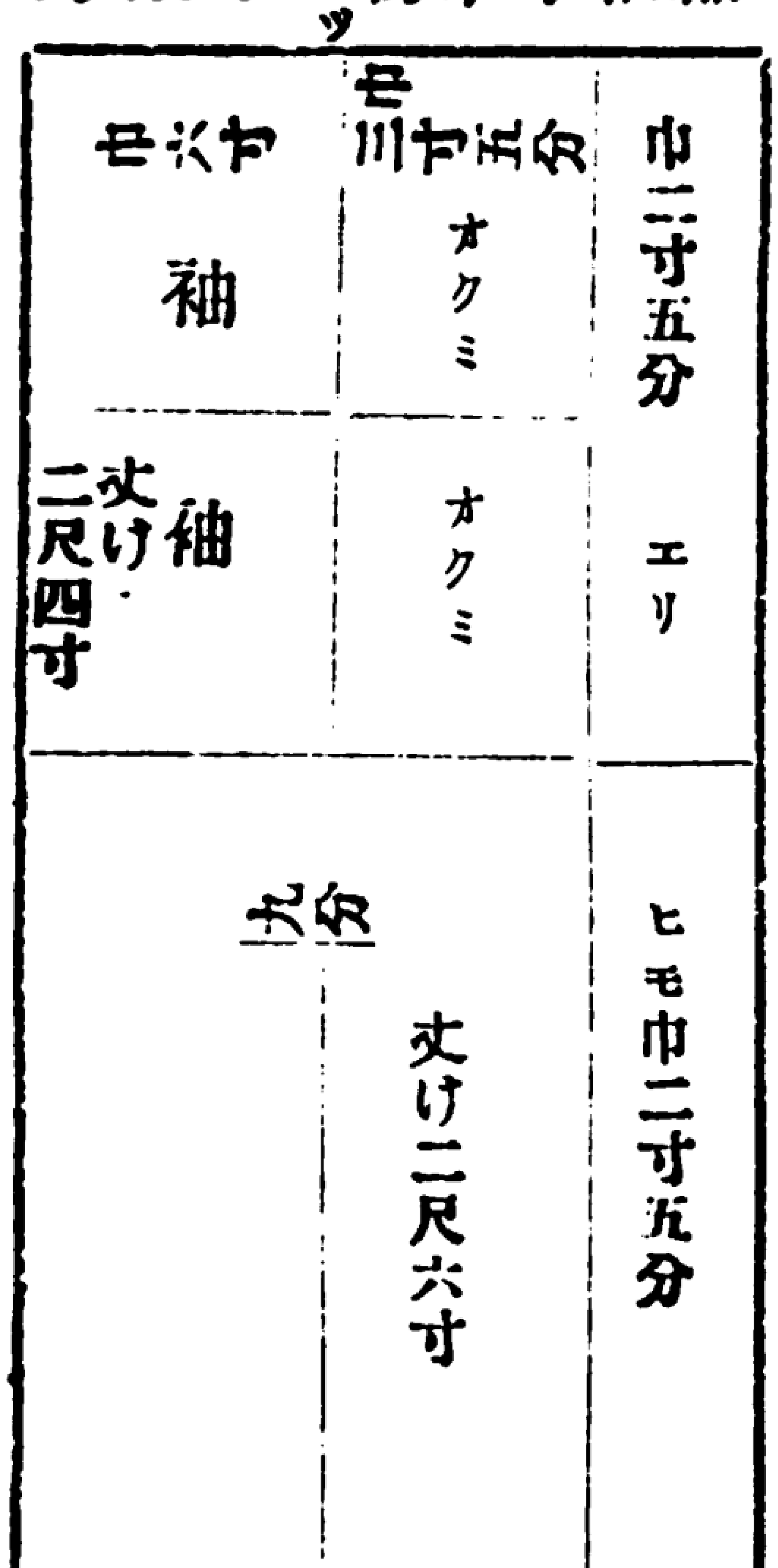
本八丈は巾一尺一寸あるものなり。まづ兩袖分の丈けをはかりたち、そのとりたるもの丶脇より襟と衽とをたち、それより殘りの切れのはし、二寸ばかりかきとりて、それを付ひもとなし、殘りを身衣とすべし。寸尺は圖にあれば見合すべし。

本八丈一ッ身裁ち方



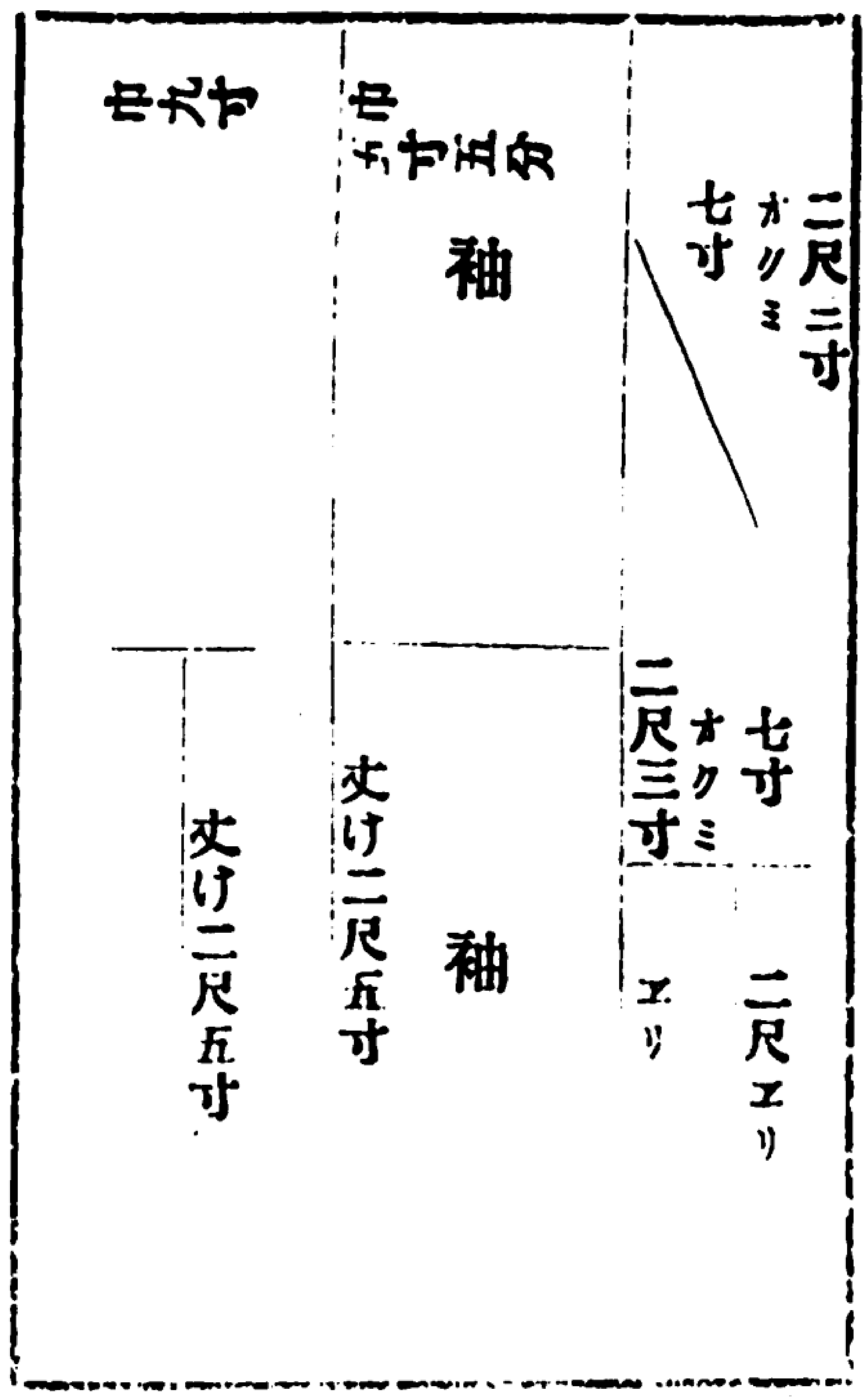
總計一丈

縮緬中巾物一ッ身裁方



縮緬中巾ものは巾は一尺二寸なり、たち方は本八丈と同じやうなれど別にとかず、よく圖を見合すべし。

縮緬大巾一ツ身の裁ち方



總計　五尺

大巾ものは巾一尺八寸あるなり、

まづ巾を縦に二つに裁ち、一方を身衣となし、一方より袖巾をまづはかりてきりとり、殘より衽と襟とをとるべし、但し衽は圖の如くかぎ衽にするなり襟は衽をとりたる殘りをたてに眞二つにたちて、眞中にてはぐなり、一度裁ちちがひては後再びもとに返らねど、よきものを裁つ時は返す〴〵も心を用ひて裁つべし。

袖はいつにてもまづ襟をはじより裁ち去りての後に兩袖となすべし、初めより横に裁つときは襟をはがねどならずなるべし。

造花

伏見藤三郎

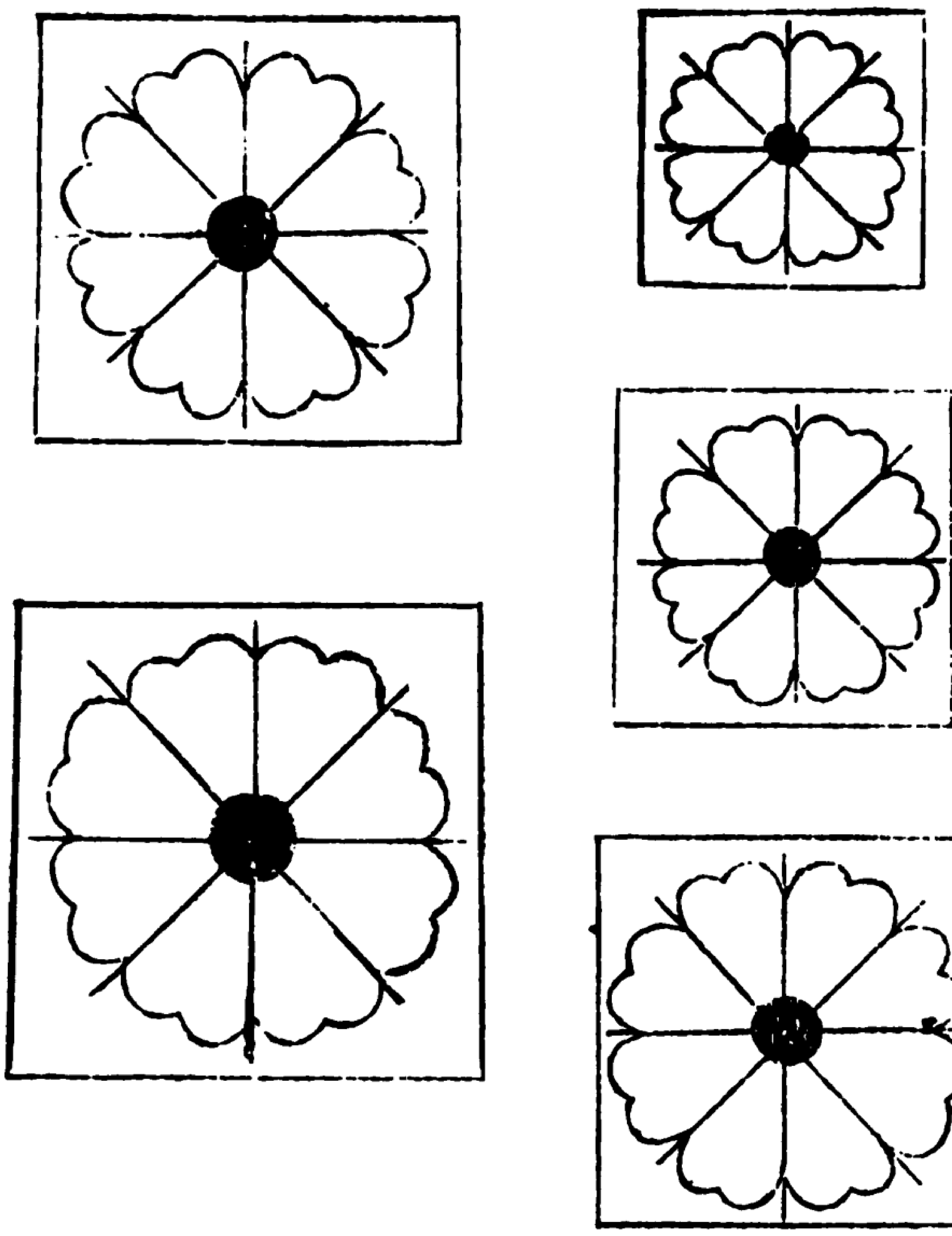
庚申薔薇

庚申薔薇は、何れの地にも産するものにて、四時ともに花開くなり。さほどむつかしからざるものなれど、先づこれを手初めに造りはしむべし。

さて庚申薔薇の滿開したるを採りて、熟々其の天然

の構造を観、然して后、花辦の内部より、漸々外部に、大小五枚をぬきとり、各寒冷紗（糊をぬきたるもの）又は吉野紙（二枚を重ねて一枚となす）に帳り付て、形の如くに断ち、一枚にて同じ花瓣、八個つゝ、五種を得ること、第十三圖の如し。

第十三圖



この一枚中の、同し大さの辨八個は、別々に斷ち離さすして、圖に示せる黒點の處にて、皆相連なる様にすべし。

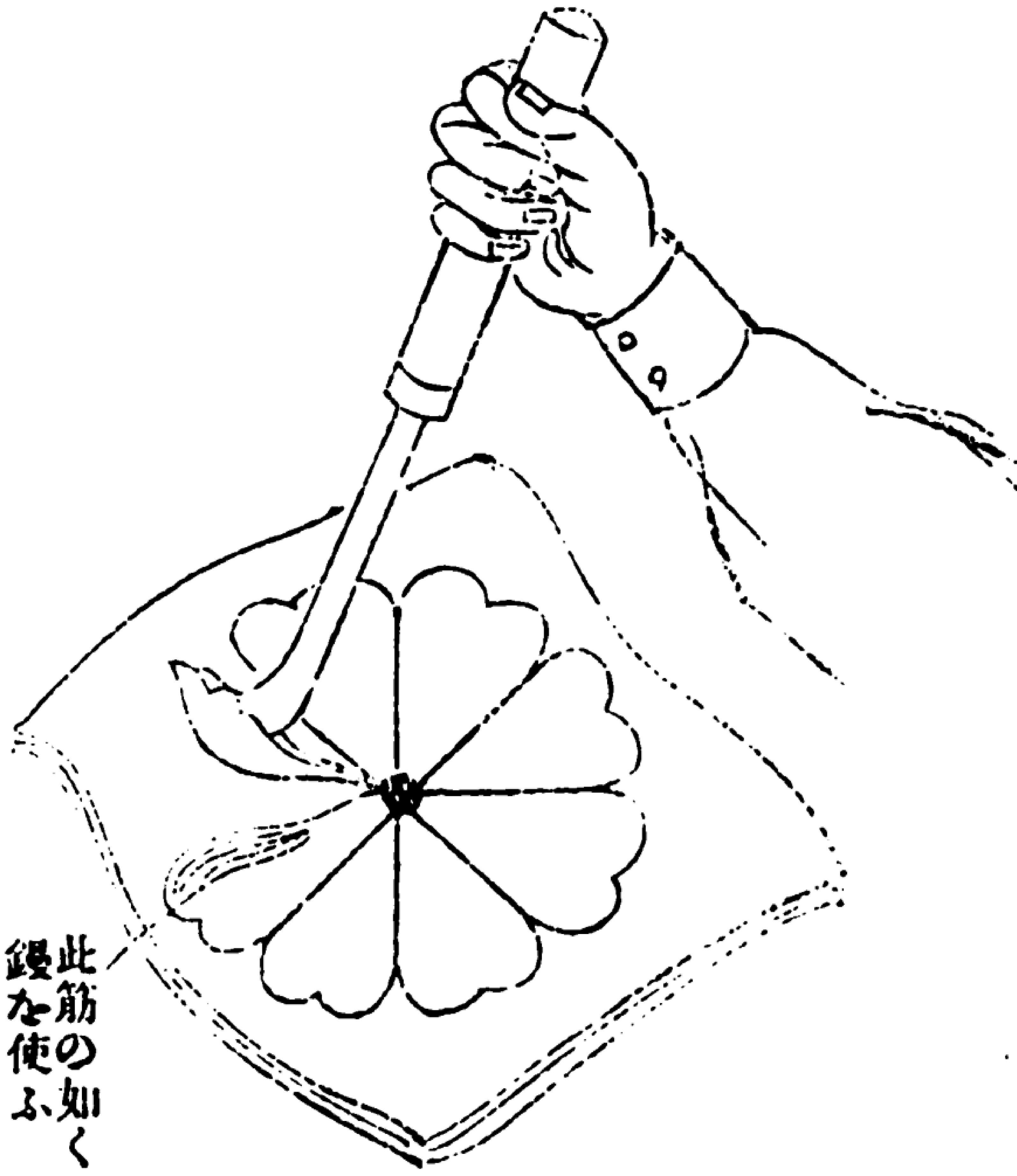
さて殘りし花は、之を目の前に備へ置きて、今造るへき花を、この實物に違はざる様務むべし。

次にはこの瓣を色染すべし。それは微温湯一合に、フロクシン極小量（米粒位）を入れて、能く溶かし、此の液にて花瓣の外部を染め、内部は種類によりて、白或は黄色とすべし。黄色は微温湯一合に、レモンエルローを、フロクシンノ半量ばかり入れて染むべし。

次に鏝を以て、花瓣を背反さすべし。先づ瓣をむ布切を疊みたる上に戴せ、少し熱したる筋鏝にて、背反させんと思ふ瓣の一端より、上下に鋸歯線状に使ひて、漸々内部に至るときは、瓣は自ら背り反るな

り、第十四圖を見るべし。

第十四圖

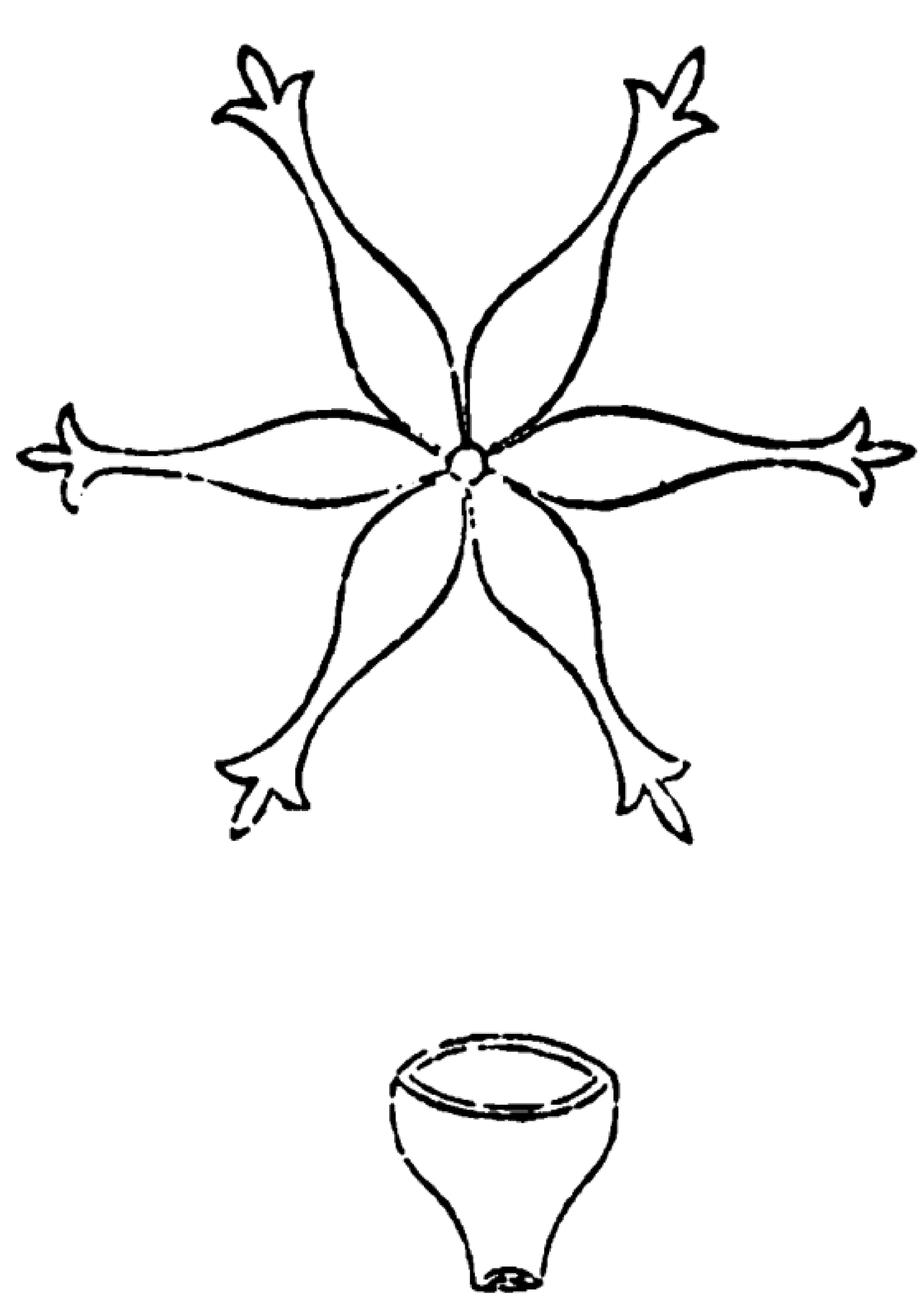


かくしてこゝに全く花瓣を造りをはる。

次に蘂を造りて、花瓣を纒むべし。蘂は絢糸に糊を引きて、稍固くなれるものを、適宜に截り、別に米の粉を湯にて煉り、前の糸の上端に付け、黄色に染めたる米の粉を散布して、花粉となすべし。この蘂は花の大小に應じて、適宜の大さなる針金の上端に、凡そ三十本ばかりを、糸にて絞り付け、前に造りたる花瓣の小なるものより、漸々に瓣の中心を針金に通し、糊にて之を固定し、萼を付くべし。萼は第十五圖に示せる甲乙二個にして、甲は總て蘂と同じきものにして、形の如く斷ちたるもの、乙は則ち玉護謨にして、紐護謨と共に、造花材料店にて販賣せり。（かゝるものは販賣するものいと少なければ、こゝに栞す。ごむ類は東京府下にて神田區龍閑町八番地上原八十次方なり。又すへての諸道具は同日本橋區横山町一丁目十二番地前川善三郎方にあり。）されどこれは米の粉を煉

第十五圖

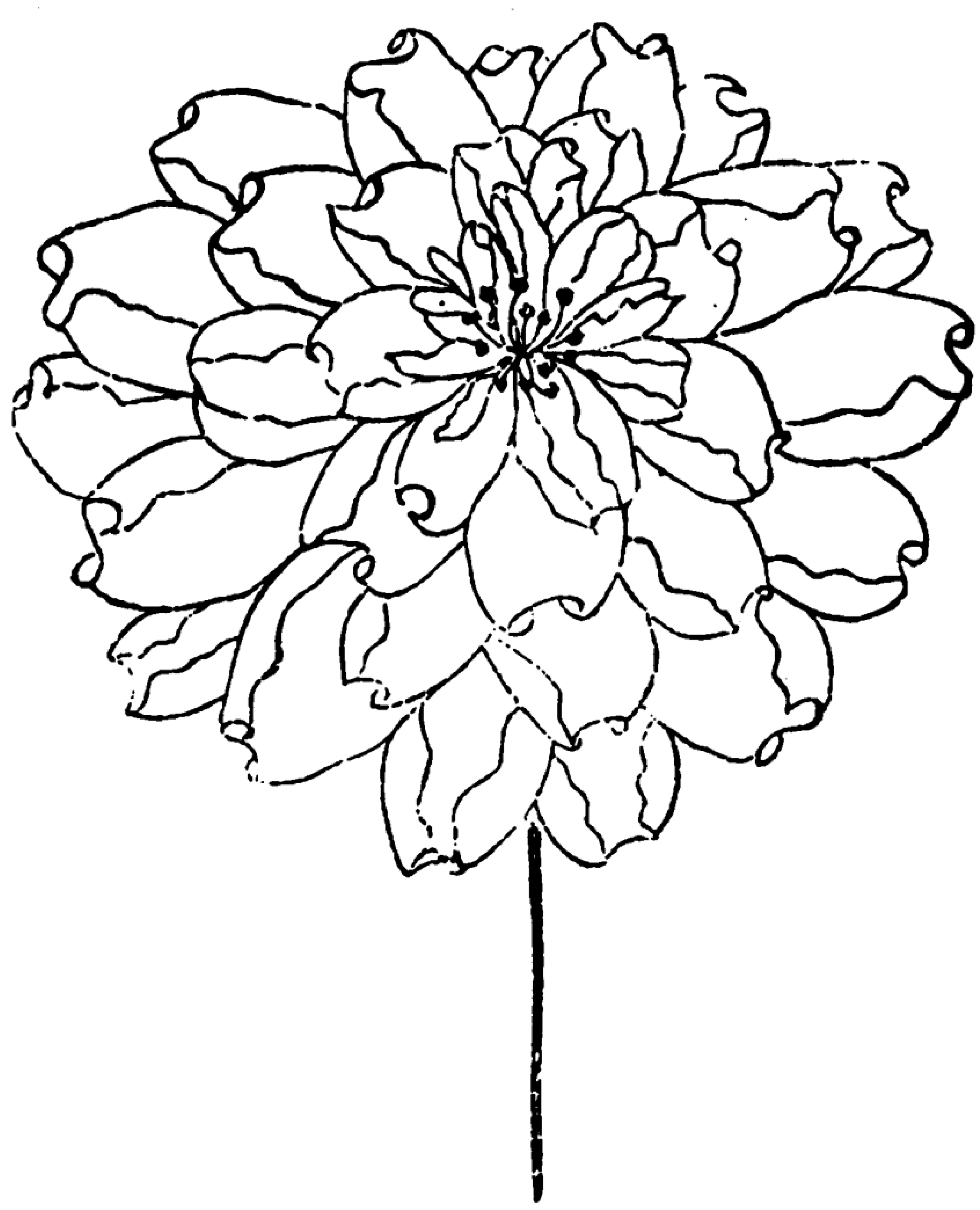
甲



乙

りて、自ら形の如く造るもよし。この萼を付け、つくりをへたる花は、恰も第十六圖の如くなるべし。

第十六圖



葉は寒冷紗(糊を抜きたるもの)又は書學用紙にて造る。これも辨と同じく、大小各種の葉を張りつけて、形をとり、次に之を染色すべし。オウラミ六分、グリン四分の割合にて、溶したる液に、葉を浸すなり。尚濃くせんと思はゞ、グリンを多く入るべし。染め上げたる葉は、能く乾かし、寒冷紗は之に薄糊を引き、筋鏝にて實物の如く筋を付け、小さき針金を以て、葉の莖となすべし。この針金は、葉と同色に染めたる紙を以て卷き、葉の裏に之を固定すべし。葉に光澤を出さんには、晒蠟に胡麻油少し許を入れて、少し熱したるもの丶内に浸し、直に取り出して、紙にて造りたる筒の如きもの丶中に差し入れ、莖を持ちて、葉を廻轉し、余りたる蠟を脱去すべし。かくして乾きたる后、これを莖の適宜なる處に付くべし。

だいどころ

ジヤミの製方

葡萄、無花果、其他何にても、「ジヤミ」を製せんに

は、果實の熟して新らしき物を擇み、能く洗ひ水氣を去り、莖を取て、其實を板の間にて壓潰し果物を其汁と共に鍋を投れ、之れに被る程水を投れ、始終攪動しつゝ一時間半程煮詰めたる頃、果物百目に付荒目砂糖五十目を加へ、文火になし、又動攪しながら更に一時間程煮詰めて、（焦付かざるやう注意すべし）液汁濃くならば指にて摘み、粘力出で飴の如くなりたらば出來上りたるなり。之れを鑵詰になし置には、其温氣全く冷めざる中に詰置は、永年貯ふるも變ることなし。

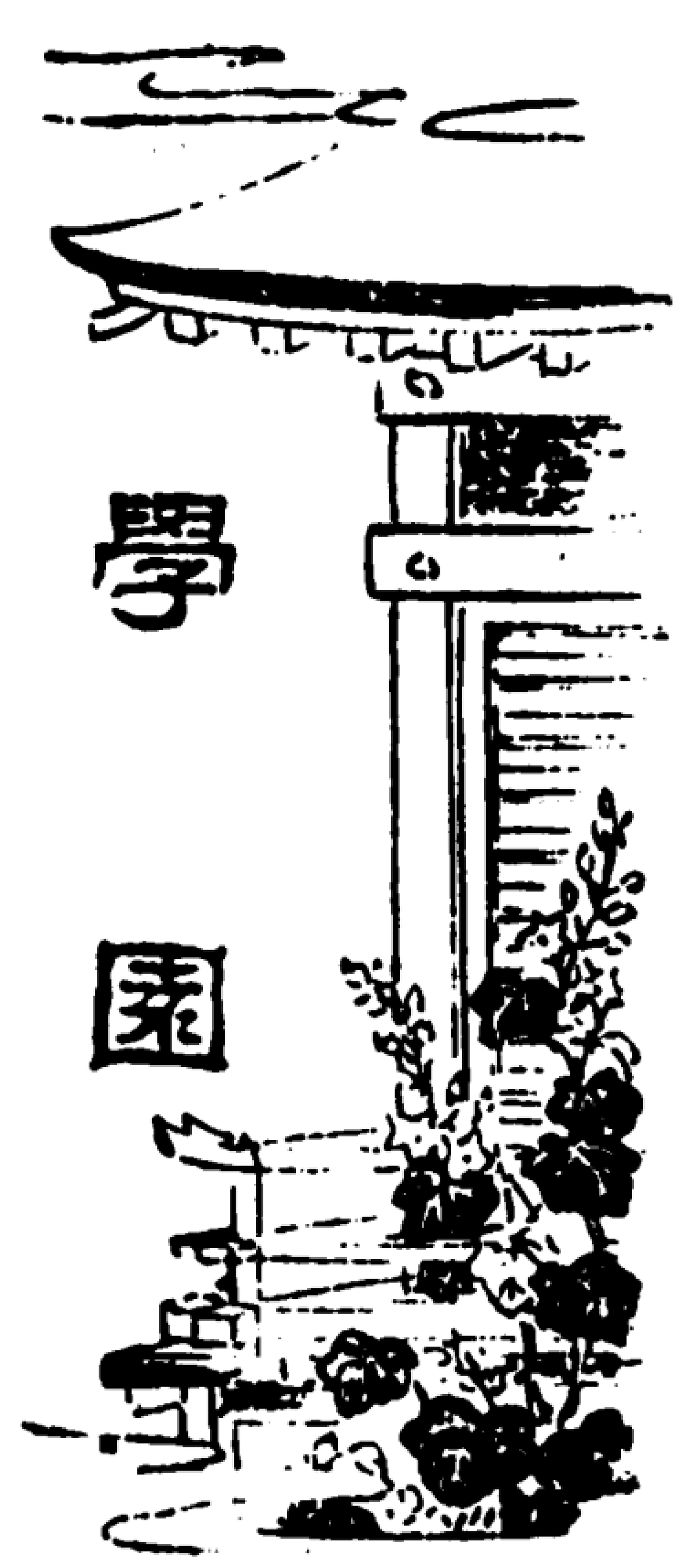
ゼリーの製方

「ゼリー」は、果製と肉製と二種あり、何れも羹凝樣の食物にて、肉製は料理に用ひ、果製を附添に用ゆ又菓子の代りに出し、病人の間食などにもよきものなれ共、其の製方面倒なれば、市中にて購ふ方、便なれ共、最も簡易なる製方の一二を左に記す。

「林檎ゼリー」不熟の汁多き林檎四五個の皮を去り仁をとり、之れを細く刻みて鍋に投れ、林檎の半浸る程水を注ぎ、確と蓋をして其軟かになるまで文火にて煮詰め、最初粗き水嚢にて漉し、其汁を鍋に投れ汁三合に荒目砂糖一斤と少量のレモン油を加へ、更に煮ること四五分の後、又其煮汁を麻布にて漉し、鍋に戻して、大匙二三杯の荒目砂糖と、一杯半の擦したる肉豆蔻を加へ、三十分間程蒸煮になすべし。然すれば、其冷ゑたる後煮凝狀の果餻となるなり。

「玉蜀黍ゼリー」、牛乳一合の中に、大匙一杯の玉蜀黍粉と、一杯半の白砂糖を加し、文火にて二十分間程攪動しながら煮たる後、能程の茶椀、又淺き洋杯の中にあけ、之れを冷水に浸し置き、其冷えるに隨ひ凝まるものなり、其固りたる時、器を皿に伏せ

て上にとれば、「ゼリー」は器の形のまゝ皿の中に殘るなり。夫より、時の果物梨子の類樣、皮を剝きて能程に切り、「セーリ」の周圍に列べ、食後菓子の代りに出すべし。



日本文典（十八）

鹽井正男

性質によりて、助動詞を區別する時は、次にあぐる如き幾多の種類あり。而して、また同じ性質なる助動詞の中にても、その語尾の變化、即ち、活動する樣を異にせるあり、また、それが續きて助けゆくべき詞を、それぐ\異にせるあり、さるわたりをも、あらく\說きゆかむ。

一、斷定助動詞

これは、事物或は動作形容を、これそれと云ひ定むる意を有せる助動詞にて、たとへば、

（勢伊物語）二條の后のまだ帝にもつかうまつり給はで、たゞ人におはしける時の事なり。

（枕草紙）何事するぞととへば、手結にて眞弓射るなり。

（更科日記）在吾中將のいざこととはむと詠みた

る渡なり。

などに見るなりの如きものなり。この類には、なり

たりといふ二語あり。

なり、これは動詞のやうに其の語尾を活動して、

將然	終止	連用	連體	已然
なら	なり	なり	なる	なれ

といふやうに變化す。さながら動詞の四段言の如し、唯動詞の四段言に、こは終止の格と、連体の格とは、同語なれども、此の助動詞は終止の格と連用の格と同一なるが異れるのみ。

此のなりは、名詞、或は副詞、或は形容詞、或は動詞或は他の助動詞の下に來りて、斷定の意をあらはすを得。例へば、富士の山より落ちたる水なり。(更科日記)

にしとみといふ所の山、畫よくかきたらん屛風を立てならべたらむやうなり(更科日記)

武き武士の心をも慰むるは、歌なり。(古今集の序)

そも〳〵歌のさまは六ッなり。(仝　上)

難波津の歌は、帝の御始めなり。(仝　上)

二條の后のまだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にてれはしける時のことなり。(伊勢物語)

のなりは、名詞につゞきたる例にて、副詞につゞきたらん例は、

獨り淋しくて待ちたまはむは、えぞしなり。

動詞につゞきたらむ例は、

われは書を好むなり。

つねに朝とく起くるなり。

母より敎へを受くるなり。

彼の子は、足をあげて球を蹴るなり。。
大かたの世の花見といふは、花ならで、人を見るなり。。

の如く、必ず動詞の連体の格よりつゞくなり。おなじく「なり」といふ助動詞なれど、動詞の終止の格につゞくこともあり。たとへば、

秋の野に人まつ虫の聲すなり
われかと行きていざとふらはむ

といへる歌の「すなり」といふを見よ。「す」は左行變格の詞にて終止の格なり。連体の格は「する」なり。故に「すなり」は終止の格に「なり」を續けたり。斯く終止の格に「なり」の續く時は、ものをいひ定むる外に感嘆の意を含むなり。故に、おなじ「なり」なれど、終止の詞につゝく時は感嘆助動詞となるなり。なほ感嘆助動詞といふべきものに就きては、後に更にいふべし。

形容詞につゞきて、これを慥にいひ据ゑむ例へは、

山里ゆゑに雪ふかきなり。。
草の屋なれど、露しげきなり。。

の如く、これも形容詞の連體の格につゞくるなり。「ふかき」も「しげき」も、共に連體の格の詞なるにて知るべし。

斷定助動詞の、他の助動詞につゞくは、例へば、

人は學ぶべきなり。。

などいふ如し。

たり、この斷定助動詞は、其の語尾の變化するさまは、動詞の如く、

將然	終止	連用	連體	然巳
たら	たり	たり	たる	たれ

といふやうに活動す。これは單に、名詞と代名詞と

或は漢語とにつゞきて、それを慥にいひ定むるを得るのみなり。例へば、

人は人たり。われはわれたり。
櫻花は爛熳たり。

二、否定助動詞

これは、動作形容すべてもの事を、さは無し、さはあらず、さはせずと、うち消すに用ふる助動詞にて、例へば、

ゆく水は、しばらくも留まらず。
昔は、ふたゝび歸り來ざるなり。
君が名もわが名もたてじなにはなるみつとも
いふなあひきともいはじ　（古今集）
此の世にはまたも見るまじ梅の花ちりぐ\な
らんことぞかなしき　（詞花集）

などいふ時の「ず」「ざる」「じ」「まじ」の如き類なり。

此の類に屬する助動詞は、四ッばかりあり。

ず、　これは、

將然	終止	連用	連体	已然
ず	ず	ず	ぬ	ね

といふやうに活用し、動詞につゞけて、それを否定せんには、その動詞の將然の格の下に續くるなり。

ちはやぶる神代もきかず立田川
からくれなゐに水くゝるとは　（伊勢物語）
白露は消なば消えなん消えずとて
玉にぬくべき人もあらじを　（仝　上）
よひごとにかはづのあまた鳴く田には
水こそまされ雨はふらねど　（仝　上）
駿河なるうつの山邊のうつゝにも

夢にも人の逢はぬなりけり

（仝　上）

人知れぬわが通路の關守は

よひ／＼毎にうちもねなゝむ

（仝　上）

昔武藏なる男、京なる女の許に、聞ゆれば恥かし、聞えねば苦しとかきて、表書に武藏鐙と書きて、おこせて後、音もせずになりにければ、京より女、武藏鐙さすがにかけてたのむには問はぬもつらしとふもうるさし。（仝上）

これ等の例にて知るべし。皆必ず將然の格の下に續きたり。また他の助動詞に續く事あるが、やはりその助動詞の將然の格の下に續くなり。たとへば、

くらべ來し振分髪も肩過ぎぬ

君ならずしてたれかあぐべき

（伊勢物語）

此の「君ならずして」の「なら」は、「なり」といふ助動詞の將然の格なり。されば、此の「ず」は「なり」といふ助動詞の將然の格につゞきて、而して、「君なり」といふことを否定したるなり。其の外にも、「君君たらずとも臣臣たれ」などいふにても、知るべし。

歌の栞（四）

鹽井正男

歌、殊に短歌は、いはむと思ふ心情を、表にうちつけにあらはさず、その詞の裏に、やがて、その詞の中に引きこめて、その情の籠りたるやうに詠むべしと申すことに就きて、さきに紀の貫之ぬしの歌と、在原の業平朝臣の歌とをかいあげて、あら／＼もの語りぬ。なほ一ッ世に名高き歌を取り出でゝ申さむ。

くるしくも降りくる雨か三輪が崎
　さぬのわたりに家もあらなくに

これは、萬葉集の三の卷に載れるにて、長忌寸麿と申す人のよめるなり。旅路にて雨にあひ、しましの雨やどりをと思へど、そのわたり、さぬの野原にて、たのむべき家とては、かけだに見えず、雨はいよいよ降りしきるに、そのくるしさ、そのわびしさ、いふばかりなし。やがて、そのくるしくわびしき心を詠み出でたるなり。ありのまゝをいへるにて、たくめる所なく、大やかなる歌のさまなりとて、古よりその道の人のいひはやせるものなり。されど、おのれは、苦しき心を、。。。。。くるしくもと、直にうちつけにあらはしたるが、此の歌の餘情乏しく風情少くなれるをおぼゆるなり。苦しくもとうちつけずして、いかにもくるしからむ心を、けしきに思はせむやうにしたたむには、はるかにあはれもまさりてんとおぼゆるなり。

されど、此の萬葉集なるさぬのわたりの雨の歌を、彼の新古今集に、藤原の定家がさぬのわたりの雪を詠みたるに引きあはせ見よ。そのけじめを知るにたよりよし。

その定家が歌は、

駒とめて袖うちはらふ蔭もなし
　さのゝわたりの雪の夕ぐれ

といへる歌なり。この定家がさのゝわたりの雪の歌は、彼の萬葉集なるさぬのわたりの雨の歌を本として、それにすがり、それまねびてよめるなり。やがて、それより脱化せる歌なり。即ち、雨を雪にふりかへ、家もあらぬを、駒とめて袖うちはらふ蔭もなしとふりかへたるのみ。故にまねびたる手振は、や

や面白からず。されど、さる手振のほどは、よそに聞きて、たゞに歌といふ口つきの上より、二首の歌を比較し見よ。定家が雪の方こそ、遙に長忌寸麿の雨の方よりは、風情もけしきも深くおぼゆるなれ。それは、定家が歌も、家もなく木陰もなくさぬの荒野の夕ぐれみち、ふりしきる雪のふゞきのわびしさをよめるなり。雨と雪とふりかはりたるのみにて、全く同じ心を種とせる言の葉の花なり。たゞ定家がくるしくもと表に詞にうちつげずして、そのけしきに自ら見せたるが、たくみにたちまさりて、あはれをおぼゆるなり。且つ、家もあらなくにとのみにては、一枝のもと、一樹のかげばかりも無しとまでは覺えず。されど、袖うちはらふ陰もなしといへる方、まことに荒野のけしきを見すること一きは切なり。しかも、定家は、なほ夕ぐれとさへいひて、心細けなるけしきを、一きは深く身にしみておぼえしむ。その口つきのたくみにあはれなる、よく〳〵學ばれよ、嬢たち。

土佐日記と紀の貫之

仝

土佐日記は、朱雀天皇の御代承平五年に、紀の貫之が、土佐の國守のつとめはてゝ、京へ歸へらむとして、途すがらのこと、聞ける見ける思へるまゝをかきとゞめたる紀行文にて、その筆の才筆なる、その文の輕妙なる、遂に、後の代の幾多の國文家の幾多の紀行文に見る能はざるめでたきものなり。當時は、漢文漢學いと盛りにて、よむものは漢學、かくものは漢文、それにあらず、それをなせねどさながら男にもあらざるが如く思へるばかりの時代な

りけり。さるに、貫之が、しかも、漢學もすぐれ漢文もたけたる貫之が、殊更に假字もて、女文字といふ假字もて、此の紀行文を書けるは、何故ならむ。意味ありげよとて、それやこれやと、女文字もて書ける下の心につきて、さま〴〵なる說をたて來れり。或は曰く、それは亡くなりにたる愛兒なげきて書けるにて、女々しきを恥ぢて、假字書に女子の手振めかしゝなりといふ。或は曰く、あさましき南海の荒磯に、くちをしき海士の子の守と成されて住みわびにたる恨みをいはむとて、おのれを憚り、あらぬ女子のはかなきすさびにことよせたるなりといふ。されどろれ皆よくあたらずとおぼゆ。

おのれが思ふは、これ、第一には、人の口つき世の手振りをまねびうつして、諷刺せんとしたる故に、うつしやすき國語を用ゐ、假字を用ゐ、さて、女文字ゆゑに、女子のすさびのやうに爲せしなり。

貫之は、もと質直なるまめやかなる人なりしなり。

而して、貫之が當時の世の中のさまは如何なりけむ。平安に都うつしありてよりも、既に世はこゝより數多に成りぬる太平の謠、人の心は、たゞさへにうかれゆき、世の態は、やうやくゆるまむずる時なるに、しかも、藤原氏は、末葉かきはびこりにはびこりゆきて、大內山の光りをもよろになし、天が下をむ、わがもの〳〵やうにふるまひ、華奢を以て、頻りに世を惑はし、名望を以て、巧みに人を誘へた、また、彼の豐崎の宮の朝庭より、いやしき吹きのみまさり來にたる唐風の文飾に、昨日今日全く吹き靡けられ、やまとやうの素朴なる氣風は、かれ〴〵になり、かつは、九重の雲の上なる天つみ位さへ、一度は危きまでに漲りてやまざる佛流のあだ浪に、しきしま

の岩はなせる氣節は、底ながら根ながら打ちくづされたる世の中の人心は、げに塵よりも輕く汚く、浮草よりもはかなくうつりやすく、吹けば散り、誘へば靡き、はかなく、頼みなく、輕薄風をなし、浮華俗を爲しぬ。

貫之のありけむ世の中のありさま人心は、かばかりに輕薄浮華を極めたり。而して、彼れはまめやかに正直なる直實なる人なりけれど、いかでか當年の世態人情を、おもしろしと思はむ。いたく世の輕薄浮華をにくみたり、恚りたり、泣きたり。古今集の序文の中にも、

今の世の中、いろにつき、人の心花になり

となげき、また或人が櫻ばかり疾くもろく散るものなしといひける、をきくや、

櫻花とく散りぬともおもほえず
人のこゝろぞ風も吹きあへぬ

なに、櫻がうつりやすかるべき。人の心は、誘はむ風も吹きあへぬに散るに非ずやといひて、これをなじれり。土佐日記を、女の手振りに假字書したるも實に、うつしやすき國語を以て、つとめて世の輕薄浮華をうつして、これを諷刺せんとしたるなり。

一度、土佐日記をうちよめば、人を刺すが如き毒筆、いやしげなる下すの口吻、輕薄なる才子の語調などの、こゝかしこにうち見らるゝに、或は、さる人がらにやと疑ひ思へるもあらむが、それは、いまだ、この日記よく讀まざる人なり。その輕薄なる口吻、そのいやしげなる語調、その刺すばかりの毒筆ぞ、やがて、貫之が巧に當年の輕薄なるいやしげなるにくむべき世態人情を寫し得たる所にて、而して、これを諷刺も嘆きも恚りも爲したるなり。なほ、これよ

り、その條々をかいあげて、貫之が土佐日記を書せる下の心より、貫之が人となりをもあげつらはむ。



漫録

汝が爺

故人　源信遍

天地のうちに在るもの、いづれ父なく母なき。氣化の昔も、其故はそなはるべし。たとへむ蠹魚といふもの丶書の中にも木の中にもなりいづるは、書と木とを父母とす。菌の土に生ひ、馬勃の石になれる、めをその氣をかぞいろとす。胎卵濕化皆然なり。されど非情なるは、萬にわいだめなし。有情のものといへど、心といふもの持たらぬが上は、父をも母をも知らぬめり。鳩の三枝を譲り、鴉の反哺せる孝の道自から備れるもあるが中に、人ばかり物のあはれを知りわくはなし。しかあるもの丶父にも母にも教を背き、いつくしみを忘れ、山路の猿よからぬ方に絆され、野原の駒の、あしきみちにのみかける、いとあさまし。家鷲といふものは、雌雄の交ありて、殻をなしぬれど、ぬくむることを知らず。庭つ鳥に與へぬれば能くあたゝめてかいこを破り雛をなす。おのれにもあらぬ子の生れぬれど、よくいとをしみ、我

雛とのみ思ひて均しくあはれみ、餌をかふもいとあはれになむ。抑古歌に鶯の殼の中の郭公しやが父に似てしやか父に似ず。此鳥名は事々しく世に轟きて卯花の陰に初音をしのぶより、花橘のかをる夕曙、雨にも月にも人に待たれ、敷島の道に聲のあやを織り、限なくめでたしとみるものから、雲井遙にのみ鳴渡り、おのが雛をも顧るに暇なくや。巣といふものをさへつくるにものうく、木かげ草むらにも、それとみるはなく、唯鶯の古巣のみを頼み、よひとなくいはり數多にとひありきて、うめるをさへとりもあげずやあらん。彼の花に鳴くが上は今一きは情知れる方や深くて、之をかひ立て、木つたひつれつゝ、虫やうのものをもかいもてゆく、れのが雛にひとし。人として人の子を養ひ、或は敎ふる道にれはしたてぬる、かくてそはありなめ、かれなむ悉多太子の御法はし聞置きて、啼音も法華と聞ゆめるは、いとたのもし。近頃本間氏が庭の篁に鶯の巣をくひて侍るが、夏闌けて大らかなる雛ころあれど、見る〳〵やがて郭公とぞなれる。手な觸れそ鼬もぞ窺ふ猫にや獲られん。兒などの取りもぞするなど、細やかに心つかひ加護し、籠に入れてやしなひぬ。この事よしやあしや、如何なる方にやと問はれて侍るまゝ、彼の竹取の翁がむかしをひきて、かくや姫得たりしも上なき幸なるべしといふに、其かたはしをかいつけてと聞ゆれど、事の次に、いでや人をして物の情を知り力を通はし、生めるが上を朝な夕な時の間も忘るまじくや、彼の簑虫は鬼の子なり。秋風吹けどちゝよとこふる、孝の心ざへあるにや。姿はすさましけれど、名のやさしくもあるかな。心あらんが上は優にやさしきを元とし、鶯だにもかゝれぞと、人

をあはれみ、物の理をわかぞ、天地の道にも背かず。父母の親のいつくしみに報い、家も榮え族もひろごり侍らんものをや。ゆゝしき幸にあらずやと、かいつけぬるついでに、

れもへ人林に巣くふ鳥すらも
よそのかいこをいとをしむなり

郭公かいこをすてゝ鶯の
古巣に聲のあやゝならはず

花に啼き雲井に名のる友とてや
してのたをさは鶯による

鶯はくきらか雛をかいたてつ
かくこそ人の子をも敎へめ

こをいでゝ雲に名のらむ郭公
なれても老が寐覺ことゝへ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

雨月物語（つゞき）

菊花の約　上田秋成

靑々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも秋の初風の吹に耐めや。輕薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども輕薄の人は絕て訪ふ日なし。播磨の國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。淸貧を憩ひて友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。老母あり。孟氏の操にゆづらず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其の季女なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗富さかえて、有けるが丈部母子の賢きを慕ひ娘子を娶りて親族となり屢事に托て、物を餉るといへども口腹の爲に人を累さんやとて、敢て承る

ことなし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひていにしへ今の物がたりして、興ある時に壁を隔て、人の痛楚聲いともあはれに聞ゑければ主に尋ぬるにあるじ答ふ。これより西の國の人と見ゆるが伴なひに後れしよしにて、一宿を求らるゝに其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬを、いとをしさに三日四日は過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出て、こゝち惑ひ侍りぬといふ。左門聞て、かなしき物がたりにこそ、あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はしるべなき旅の空に、此疾を憂ひ給ふは、わきて胸究しくれはすべし。其やうをも看むやといふを、あるじとゞめて、瘟病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしこに行しめず。立よりて身を害し給ふことなかれ。左門笑ていふ、死生命あり。何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗のことばにて、吾們はとらずとて、戸を推して入つも、其人を見るに、あるじがかたりしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見ゑて、面は黄、肌黒く瘦、古き衾のうへに悶へ臥す。人なつかしげに左門を見て、湯ひとつ惠み給へといふ。左門ちかくよりて、士憂へ給ふことなかれ。必救ひまゐらすべしとて、あるじと計りて、藥をゑらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつも、猶粥をすゝめて、病を看ること同胞のごとく、まことに捨がたきありさまなり。かの武士左門が愛憐の厚きに涙を流して、かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御心に報いたてまつらんといふ。左門諫て、ちからなきことはな聞ゑ給ひそ。凡疫は日數あり。其ほどを通ぬれば、壽命をあやまたず。吾日々に詣て、つかへまゐらすべしと、實やかに約りつゝも、心をもちゐて助

るに、病漸減じて、こゝち清しくおぼえけれど、あるじにも念比に詞をつくし、左門が陰德をたふとみて、其生業をもたづね、己が身の上もかたりていふ。故出雲の國松江の鄕に生長て。赤穴宗右衛門といふ者なるが、わづかに兵書の旨を察しによりて、富田の城主鹽冶掃部介。吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使にえらびれて、かの館にとゞまるうち、前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて、大三十日の夜不慮に城を乘とりしかど、掃部殿も死討ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護なれど、三澤三刀屋を助けて經久を亡ぼし給へとすゝむれども、氏綱は外勇にして、內怯たる愚將なれど果さず。かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居じと、巳か身ひとつを竊みて國に還る路に、此疾にかゝりて。思ひがけずも師を勞しむるは、身にあまりたる御恩にこそ。吾半世の命をもて、必報いたてまつらん。左門いふ、見る所を忍びざるは人たるもの丶心なるべけれど、厚き詞をさむるに故なし、猶逗まりていたはり給へと。實ある詞を使りにて、日比經るまゝに、物みな平生に邇くぞなりにける。此日比左門はよき友もとめたりとて、日夜交はりて、物がたりすに、赤穴も諸子百家の事いろ〳〵かたり出て、問わきまふる心愚ならず。兵機のことわりは、をさ〳〵しく聞えけれど、ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれど、伯氏たるべき禮義をおさめて。左門にむかひていふ。吾父母に離れまゐらせて、いとも久し。賢弟が老母は、即吾母れなど、あらたに拜みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさな

き心を受給はんや。左門歡びに堪ず。母なる者常に我孤獨を愛ふ。信ある言を告なむ齡も延なんにと、伴ひて家に歸る。老母よろこび迎へて、吾子不才にて學ぶ所時にあはず。青雲の便りを失なふ。ねがふは捨ずして伯氏たる敎を施し給へ。赤穴拜していふ。大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足ず、吾いま母公の慈愛をかうむり。賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過べきと、よろこびうれしみつゝ、又日來をとまりける、きのふけふ咲ぬると見し尾上の花も散りはてゝ涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴母子にむかひて、吾近江を遁來りしも、雲州の動靜を見んためなれば、一たび下向て、やがて歸來り、菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ。さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ月日は逝やすし。おそくとも此秋は過さじ。左門云。秋はいつの日を定て待べきや。ねがふは約し給へ。赤穴云。重陽の佳節をもて、歸來る日とすべし。左門いふ。兄長必此日をあやまり給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待たてまつらんと、互に情をつくして、赤穴は西に歸りけり。

井蛙小錄

井上頼文

草花園詞

藤井高尙

いへのひつじさる、ついひぢのうちのあらはたげなるところをすきかへして、春秋の花さく草をあまたうゝる事ありけり。さるは、年おいては書みるにもものうく、野山に出るも足たゆくこしいたく、友だちとものがたりして、つれ〴〵をまぎらはさんとする

にも、わかき人は、ふる人のとはずかたりきゝぐるしとてむつかるべく、とし經ぬるどちはむつびよけれども、あるは君につかふるわざのいとまなく、さらぬも、ことしげき家のなりを子にゆづらず、さかしらするかしこき人の世にはおほくて、おのれがやうにしれたるいとま人はまれなれど、心あへる友のすくなく、松もむかしのといひけん人の同じ心にて、いかゞはせん、木草の花こそ、しれ人をも老人をもいとはぬ物なれ。うゑて見つゝこゝろをやらんと思ひなりぬるに、うめ、さくらはおのづから庭にあまたたてれど、かく草の花園をつくるになんありける、つくるとて、くろ木あか木のよしあるませゆへるにもあらず、ものはかなげなる蘆を大垣にて、其の垣根の四方に、おそくとき花の心をわきてつぎつぎさき出るやうに、いろ〳〵をつくしうゑめぐらしつ。およびをりかきかぞふれど、十くさあまり三くさの花になん。その花まちのへだてへだてには、山ざとのいはがきめきて、まろき小石をならべたり。來て見はやす所には、もなかにちひさき、ざればみたるあばらやをたつ。板じきにしていとせばく、とふのすがこもふたひらしくばかりなり。よもにあしすだれをかけて、花見るかたをかゝげんとす。おろしてはあじろ屏風しろとなしたる心はへも、ことさらにことそぎたるしつらひになん。さくら草、ふた百もとばかりうゑたるまちぞ、春の花は、まづさくべきさくらのはなのこゝろみじかく、とくちりぬるがうらめしうおぼゆるころはひ、いとよう似てうつくしう咲出つれど、なにゝしのぶと思ひよそへられて、こひしさのこよなくなぐさむかたみなりかし。こゝはあばらやの北なるまちなり。さしつぎに

は藤、山吹の花、ふぢはかきほの松にかゝり咲みだれ、山ぶきはみなみのかきねに千もとかりうゑたれど、花ざかりはいとはなやかににぎはゝし。八重、一重、ふさのたはきなると、ちひさきとまじれり。まへに秋の野をつくり、へだてに岩つゝじをうゑなめたり。北のかきねには、花のいろ／＼かはれるばうたんをはたもとうゑつ。こはからめきたる花なれど、色も匂ひもふかみぐさといふ名ぞしるき。西のかきねには、卯の花、これはうつ木といひて草の花にはあらざめれど、さゝやかにてせどき垣つにつき／＼しけれど植つ。葉の青やかなるに、白きちひさきはなのさきたるがをかしきに、ほとゝぎすの來てかげにかくるときくもなつかし。ひんがしの垣ねには萩その前の町はなでしこ、さつまのたねをうゑたり。此の花は、やまとのよりからのはまさりたるよしに、いにしへより人のいふなるは、げにさる事にて、このうゑたるがめでたきも、さつまは日の本の西のはてなる國にて、からに近く、さるからに、かしこのよきたねのをり／＼にわたりくるゆゑなるべし。小屋の西に菊の町あり。此はなまちよ心いれてつくろふ人はひともとに花こゝのへと、數をさだめ、まへにうゑたるはひきく、しりへはたかきやうにとゝのふるを、れのれは世のしれものにて、しかうるはしくはものせざれど、見所なしと人はいはんかし。かくよもにうゑたてゝもなほあかずして、ことはならをはひのばらせたり。夏のあつき頃、朝すゞみの見るさはりとならぬやうに、垣ゆひて牽牛子のかつほどにきつゝ花見んとてなりけり。まことや、かのつくれる秋のゝは、たゝみ六ひらしくばかりのひろさにて、尾花、をみなへし、きちかう三くさをあま

たうゐませたり。此のきちからは、歌によまぬ花なりと世の人のいひなすめるはひがことぞ、萬葉集の歌に。秋の野のなゝくさにかぞへてめでし朝がほのはなは、これになんありける。かく折々の花絶えせねど、こゝをなきていづこにかは、老の心やり所をもとむべき。あなおもしろ、あなたのしのこの花ぞのや。

れきの玉藻（十三）

永石徳文

理によりて、人によらす

或人のいはく、虚に似たるまことをば、しりてもかたることなかれ。又まことに似たるうそもあるものなり。うそにてもそれをばかたるべし。又智者のいふ事にても、義にそむけるをば、用ゐることなかれ。愚者のいふことにても、理にあたれるをば、用ふべし。義によりて、人によるべからず。(子孫寶鑑)

げにさることなり。智者のいふことにてもみなゝがら、理にかなへりとはいふべからず。過ちは誰れにもあることなり。愚者なりとて一筋にすつべきにあらず。理にかなへることもいはずとも限らじ。よく心をとめて理非をわきまふることと肝要なるべし。

人にあひたる

人にあひたるときは、その人に用あること共を案じて、先にいひ、後につひゐなる物がたりをすべし。後に用をいはんとすれば、あるひはわすれ、或は又人來りて、いひにくき事もあるものなり。(同上)

いとちかき事なれど、ゐうなき事のやうなれども、

世事になれぬ人に見せんとてなり。

＊　＊　＊

わかき人のつゝしみ

年わかき人は、陽氣さかんにして、あと先の思案なく、いさみはこり、物に功なくして、一切の事あやふきに近し。夏の虫の火のあたりにて、飛ぶが如し。ことに若年にて、親におくれし人、多くは身上をそこなふものなり。先おそるゝ方なくして、わがまゝとなり、又人より惡事をすゝめたばかる事多きに、さとらずして、萬に損すること多し。したしき人異見いひても、惡事へはうつりやすくして、用ゐぬものなり。後はくゆること多しといへども、なげくにかひなし。しかもさやうの人、身持も異風にして、萬人並にあらず。花麗を好み、つひえなる事多し。女子わらんべは、いみじく思へども、心ある人はさげすみて、をかしく思ふなり。心たにかしこくは、にぶきものゝやうにしてゐたるは、あやまちなきものなり。(同上)

わかき時はたれもみな心せばくして、過多く、あさましきものなり。みづからは心つかずして、よきことのやうに思へども、年もとり、世にもなれたる人より見れば、うひ〳〵しく見ゆるなり。わが身のことはわが身にて、見がたきこと、わが眼にて、わが瞼の見えざるが如し。少し年をとりて、後ふりかへりて見れば、よく知られて、我が身ながら、あさましくおぼゆるものなり。今の身の上より、六七年こし方のことをかへり見よ。その當時こよなしと思ひしことも、今ははなはかくしつらんにはと思ふふしもあるべし。されど今目のあたりのことも、六七年を經て後、かへり見なば、今の

こし方を見るが如くなるべし。又おのれ少し書よみものかくことを知りたりとて、年かさなるものをあなどるものあり。大なるあやまりなり。龜の甲よりは、年の功といふこともあれど、ゆめ〳〵よく思ふべきことなり。ことにわかくて、親に別れたる人などは、ことによく心をとめて、よこさの道に迷はぬやう心すべきなり。女はしとやかにして、身持のかたきを以て第一とすべし。

獨を愼しむべし

萬のとがは、口よりいでくるものなり。人のうはさのよしあしをいふべからず。人の耳は壁につくと思ひ、人の眼は天にありと、深く遠慮をめぐらすべし。誰も知るまじと思ふひそかなるものがたりも、人知ることあるものなり。天に口なし、人をもていはしむとはこれなるべし。惡事をしては、たとへ人知らずとも、諸天の知り給はんは、はづかしき事なり。惣じて惡事には、四知をはづるといふことあり。天にも耻ぢ、地にも耻ぢ、相手にもはぢ、我が心にもなほはづべし。不義なる志おこりなど、此の四知を耻づべし。又後ぐらき心を持ちなど、行く末の運もあしかるべし。又へつらひまがる人は、人のうへ、われも惡しくいひ、人にもかたらせて、さて立ちかへりて、わがいひしことまでも、人のいひしやうにつくるやからもあるものなり。石もものいふ世の中と、心をくばるが肝要なり。(同上)

身はひきくとも、心はけだかくもつべし。心をたかくもちて、いよ〳〵言語擧動をやさしくして、人に讓るべし。女のさし出たるは見ぐるしきものなり。さて又人の目の前にて、はづべきことは、

人の見ぬところにても決してすまじきことなり。すべて後ぐらきことは、つゝしみてすまじきことなり。たとへ人知らずとも、わが心すでに知れり。いかほど人にかくしたりとも、いつしか、しらず／＼いひいづることもありて、遂にあらはるるなり。よく世の中を見よ。人の物を盗む人、誰かは、人に知られんことを願はんや。しかれども終にあらはる。又みそかなる事をするもの、はじめは人に知らさじとすれども、おのづから色にあらはれて、遂にあらはるゝに至るなり。人知れずことを行ふはおろかなり。なにごとにても後ぐらきことは、初よりつゝしみて、行はざるがよきなり。はじめは人の知らざれど、したり顔もすらめどもあらはれなど、身のおきどころもなかるべし。いやしき心はゆめ／＼もつまじきなり。かくれたるより、あらはるゝはなしといふたとへもあり。

◦　◦　◦　◦　◦

二位の尼のこと

諸源の西海にて、諸平を滅したる時、二位の尼、天皇を抱き奉り、傳國璽を帶びて入水せしは、女心と謂つべし。いかに女なれども、最拙き意なり今の女はかへりて、かゝる拙きことはすまじ。天皇と申し奉る至極のいはれをしれどなり。

（南畝叢書）

げにさなり。天皇は一天萬乘の君にましく／＼てわたくしにし奉ることどもそれぞれ多し。いと拙きてとなり。

◦　◦　◦　◦　◦

字音のこと

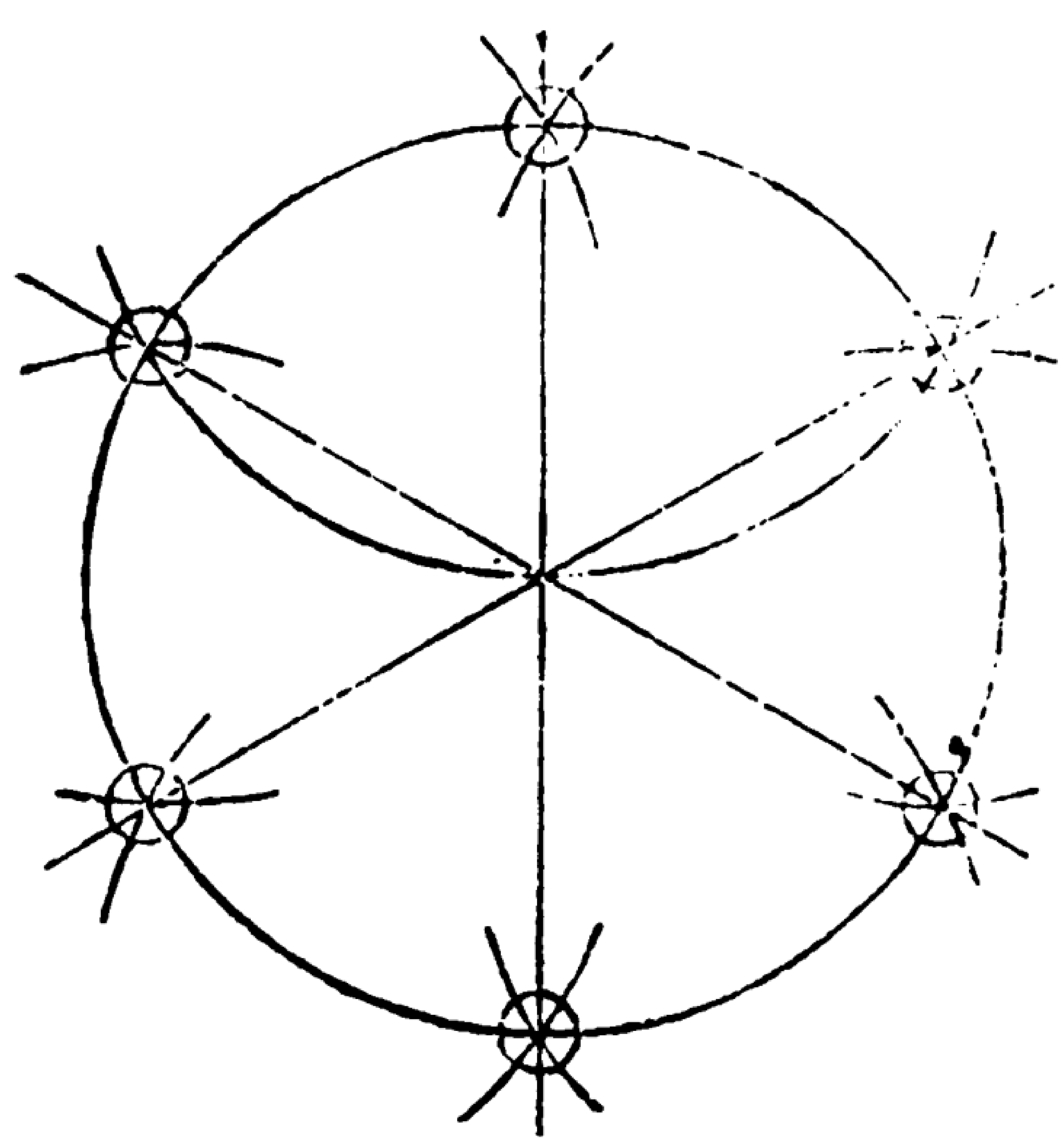
およそあらゆる文字よみは、此國のことなれど、

こゑはもろこしのこゑなり。されどもろこしのこゑに、似たるは、甚だすくなし。風氣の異るゆゑにや。たちばなは淮をわたりて、化して枳となるといへるを、ふしぎなりといひしに、此國にても、みッかんくねんぼなどいへるもの、其樹をうつして、出羽に植れど、みな枳殻となるといへり。ちかごろある和尚の物語に、さつまよりいづるべにみつかんといふもの、いろもうるはしく、あぢはひもすぐれたれど、そのたねをとりてうゑしに、ほどなくもおいでたれど、みな柚となれりと、かたりき。唐音もひとづたへ、ふたづたへすぎど、いつとなく、此國のこゑとなるべし。唐音唐話をまなぶ人は、いつとても、もろこし人にならふより外あるまじ、黄檗の課誦はみな／＼唐音なれど、何事ぞやと、唐僧はうたがへるといへり。これも數世の後には、此國のこゑとなるべし。（たはれぐさ）

紋帳圖式綱目（三）

井上頼文寄贈

三ッ物

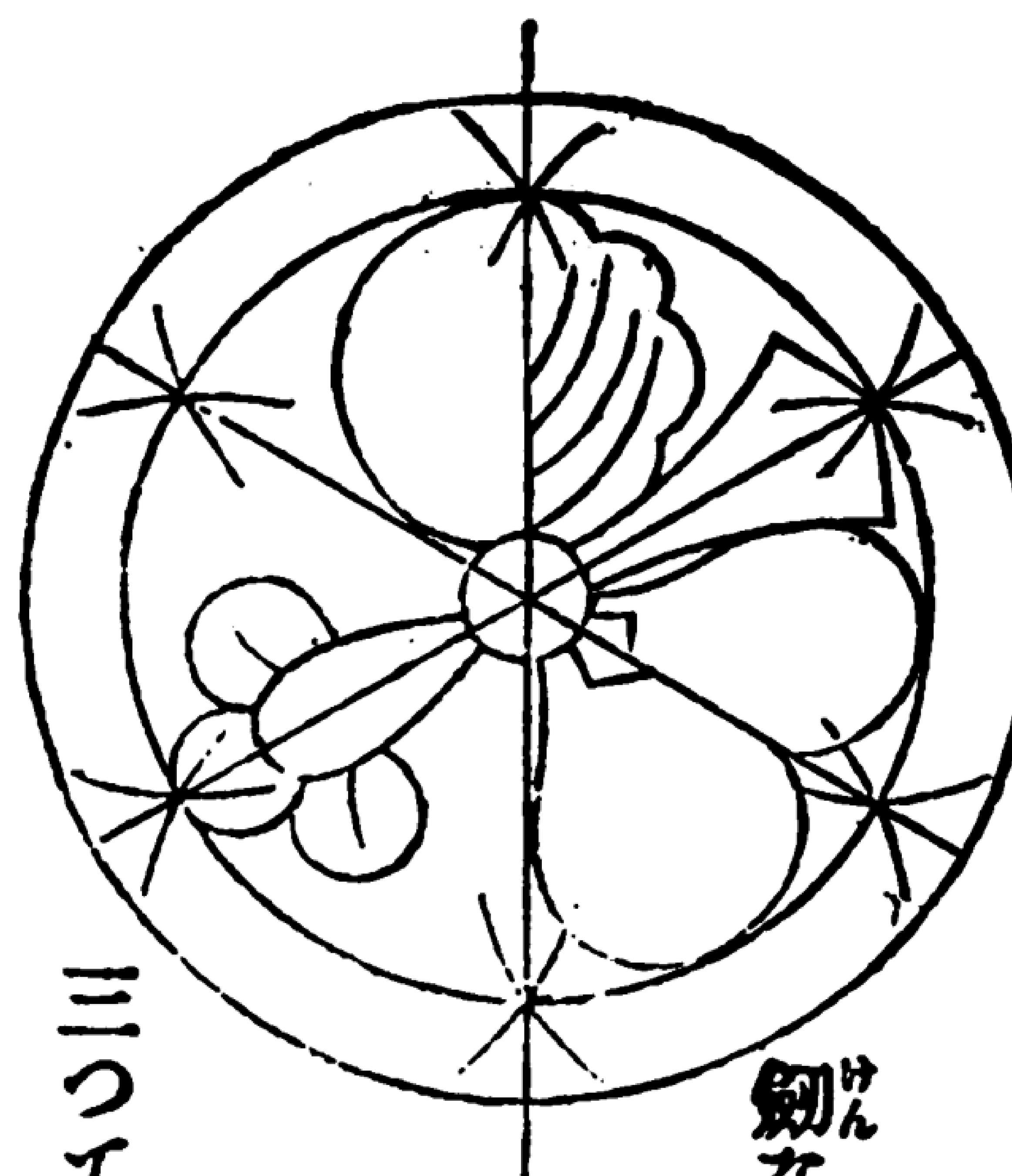


但六割

三ツ柏(かしは)

剱(けん)かたゝみ

剱(けん)なしかたゝみ

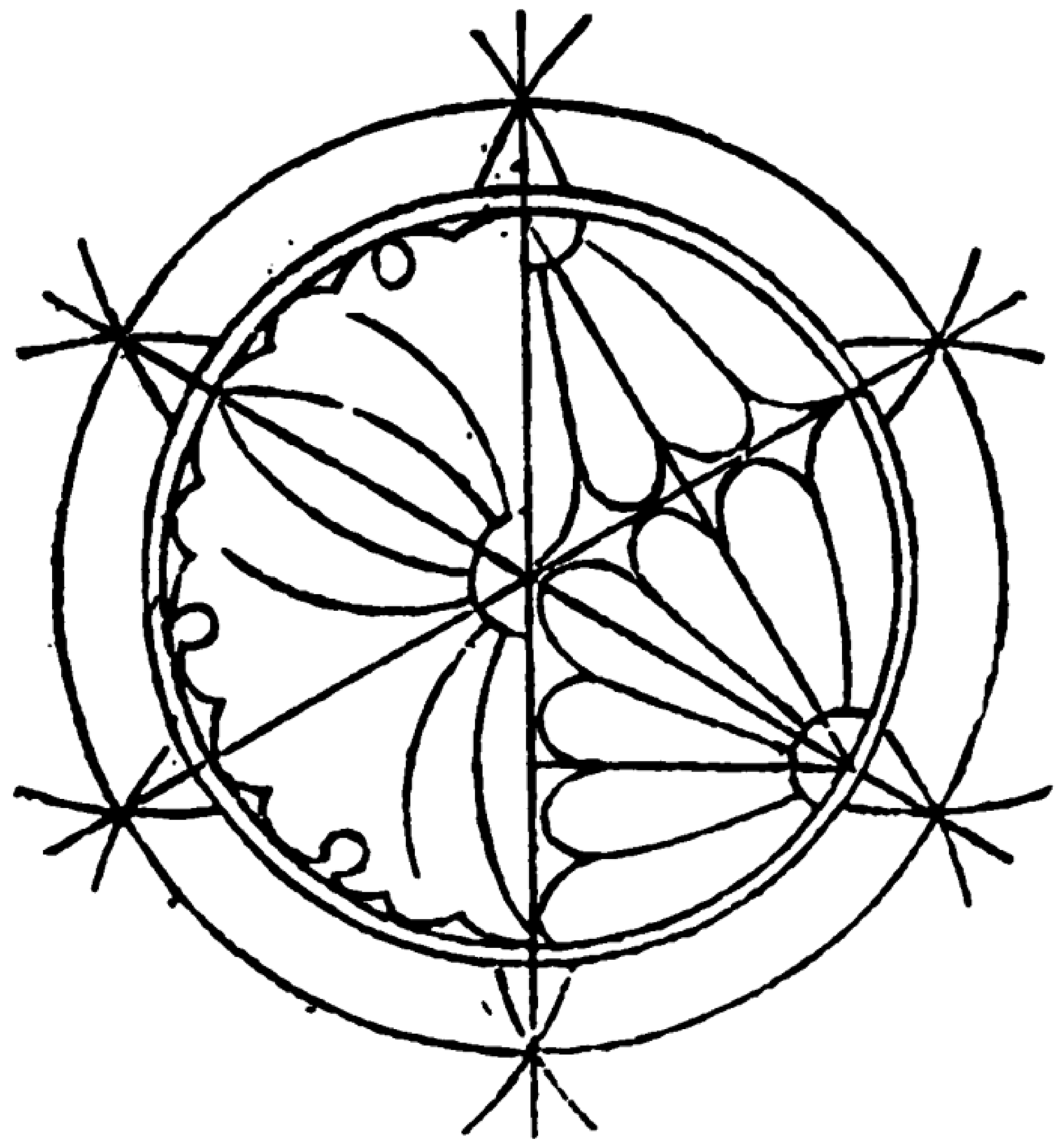


三つばし

三つてうじ

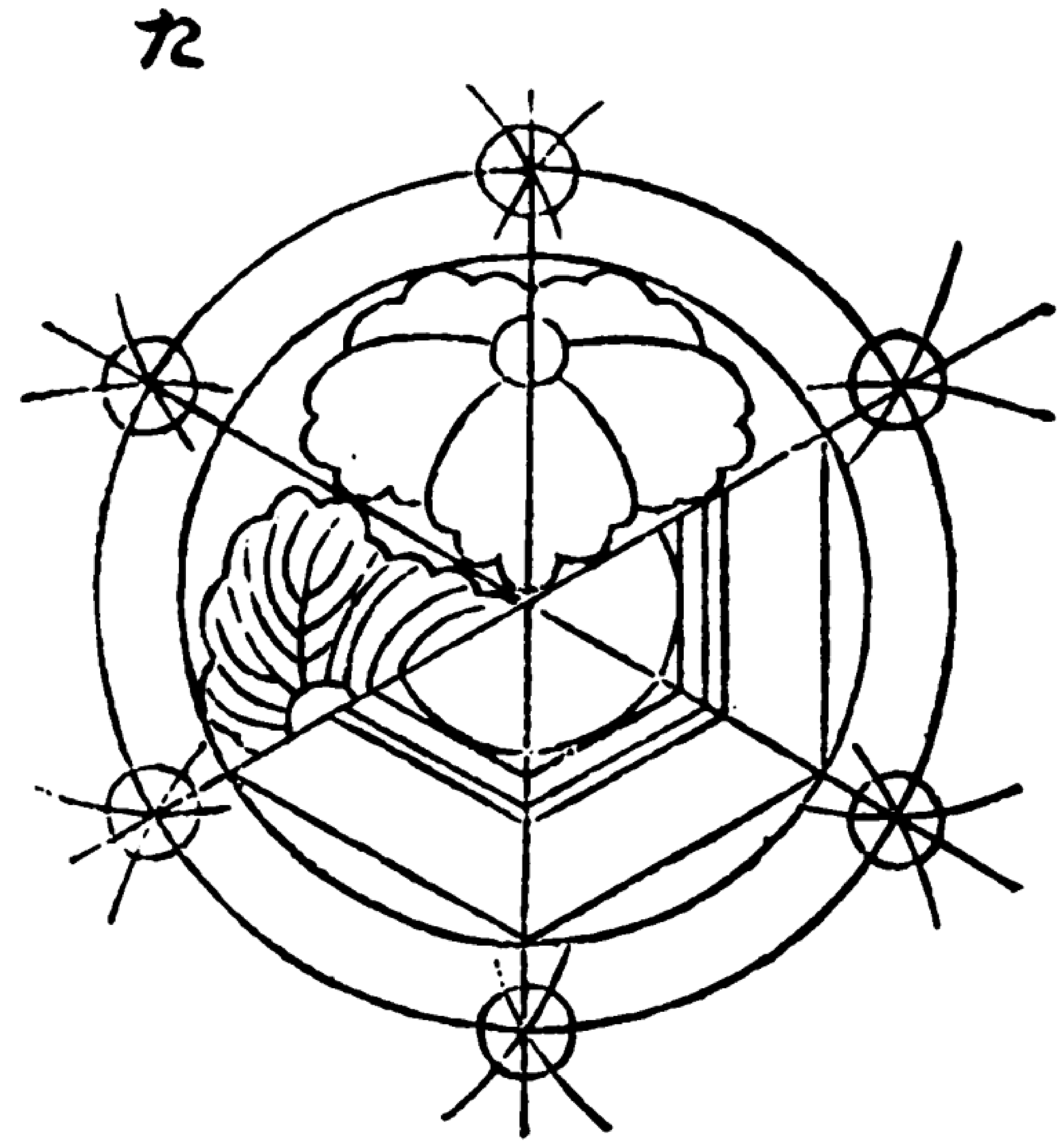
三つ牟(けん)きく

三ついてふ



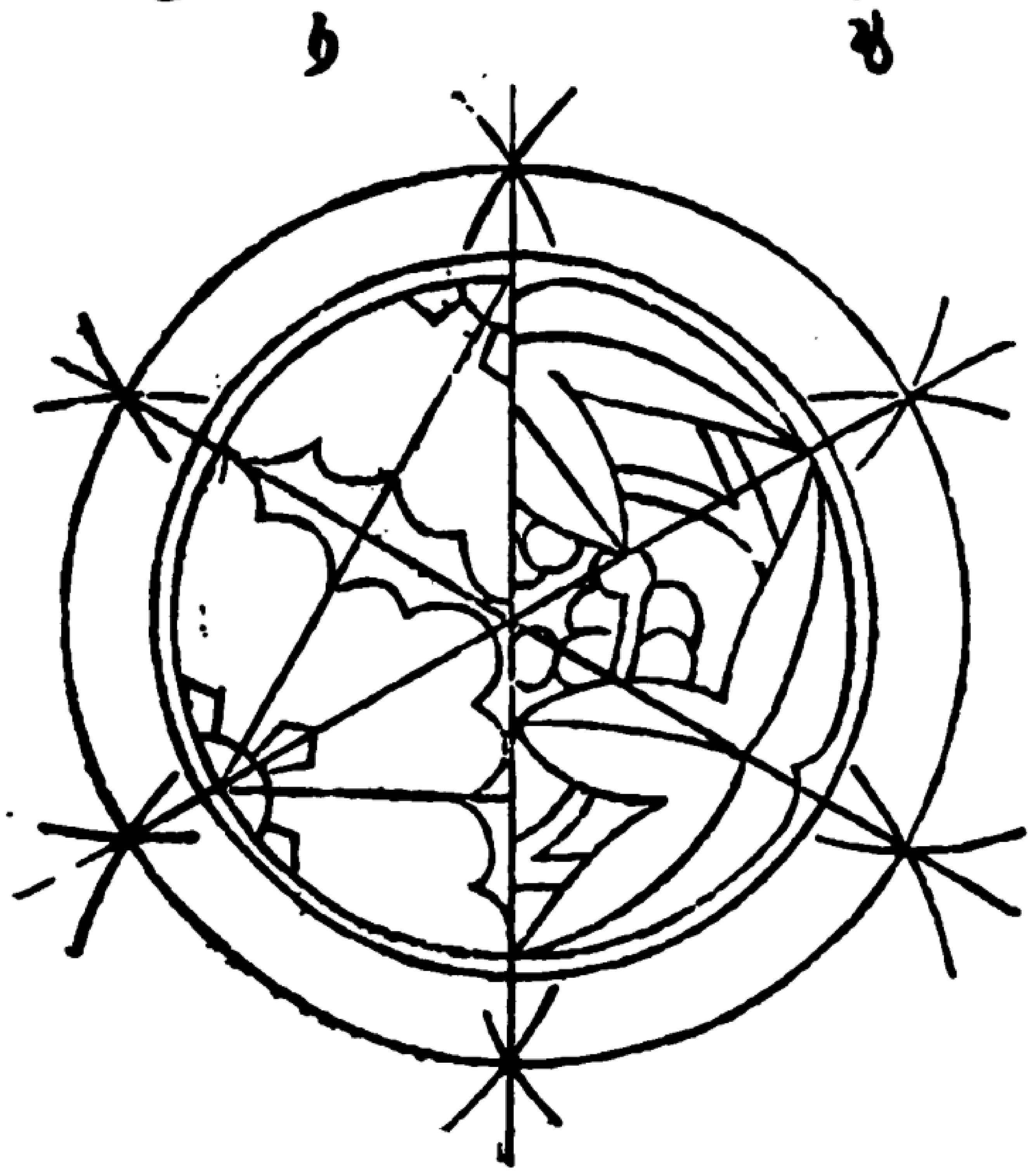
三ツづた

桔梗(きつかう)



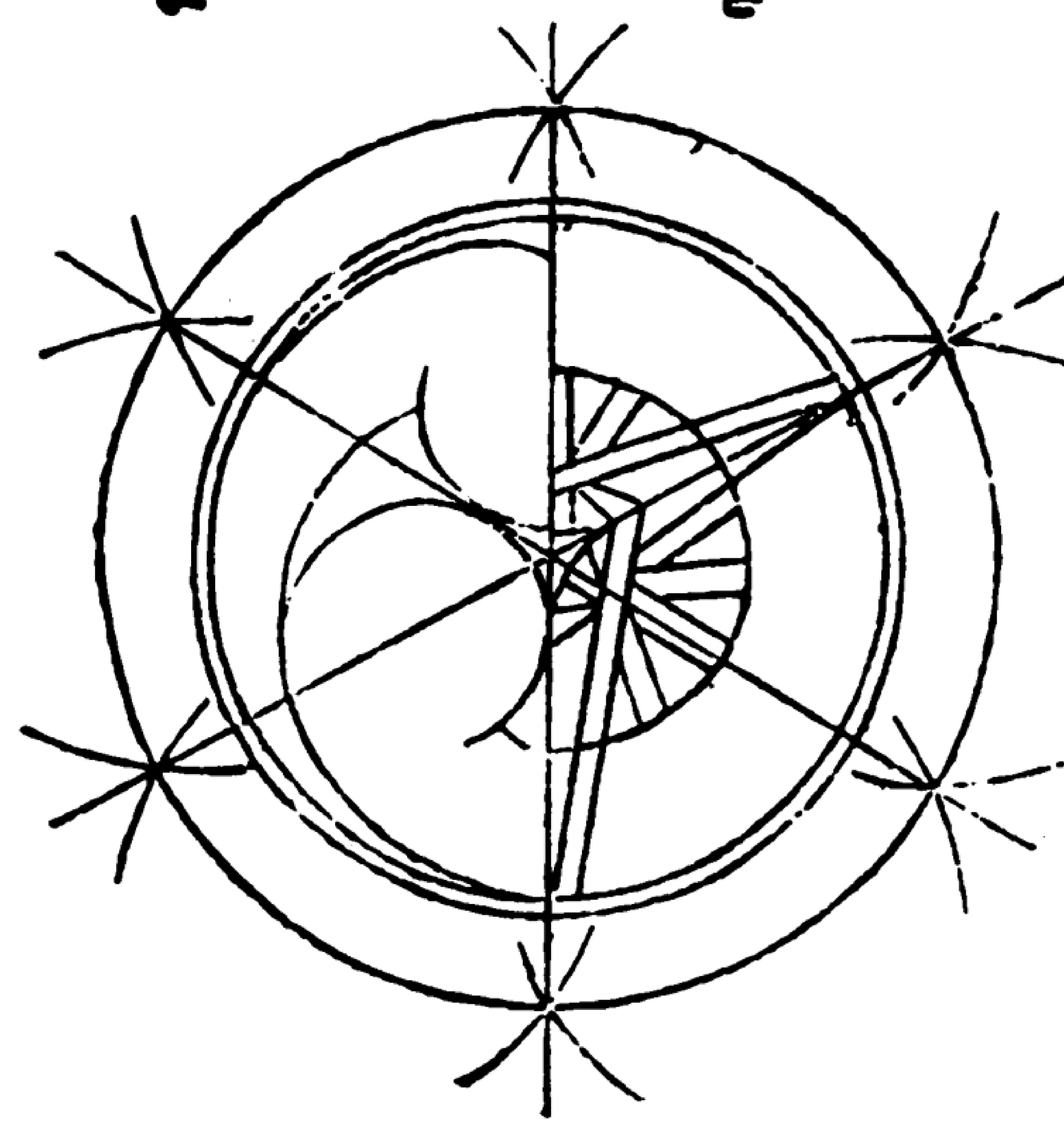
三ツれもだか

三ツわり花(はな)びし



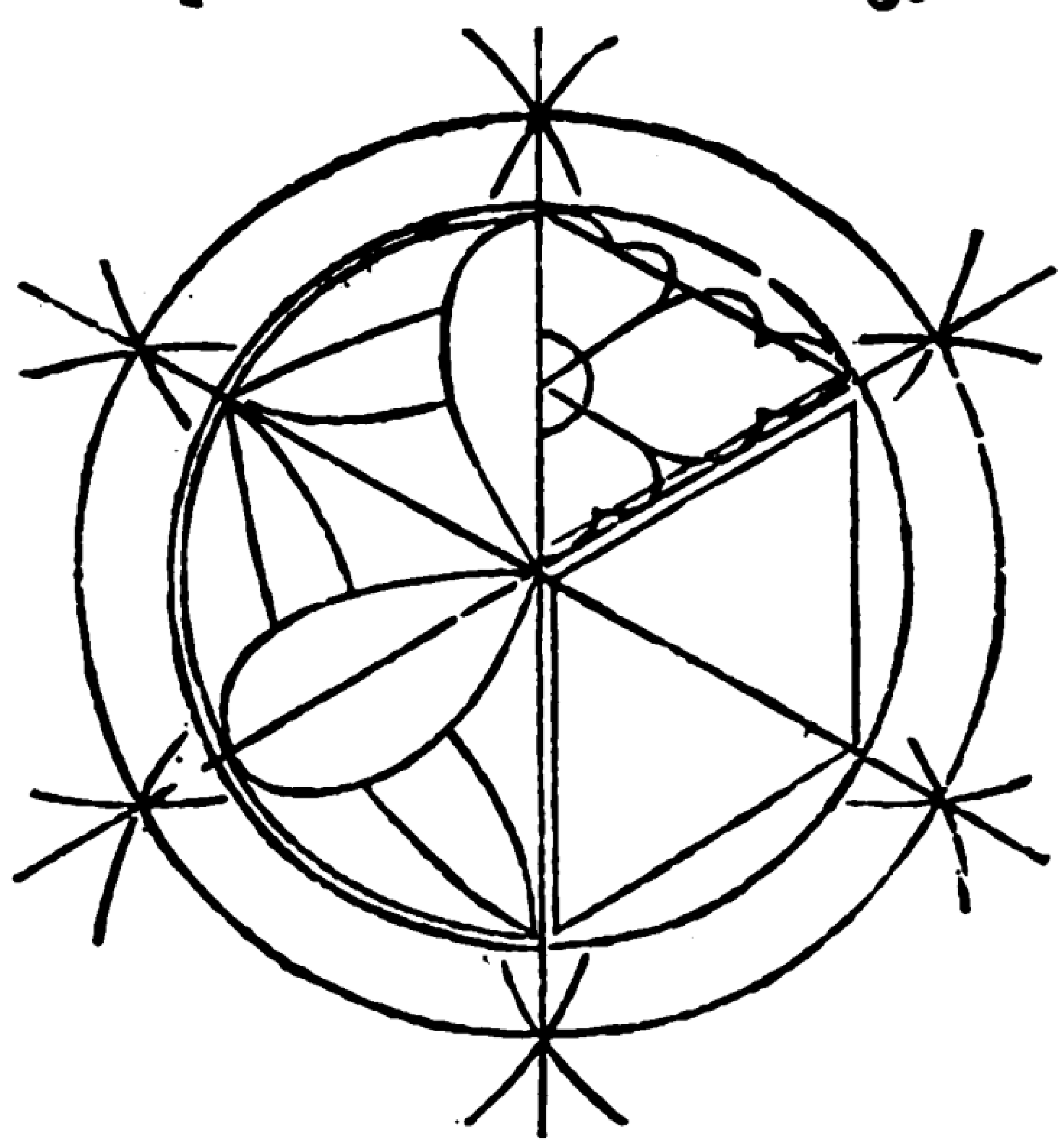
三ッあふぎ

三つ左ともゑ



三つ花ひし

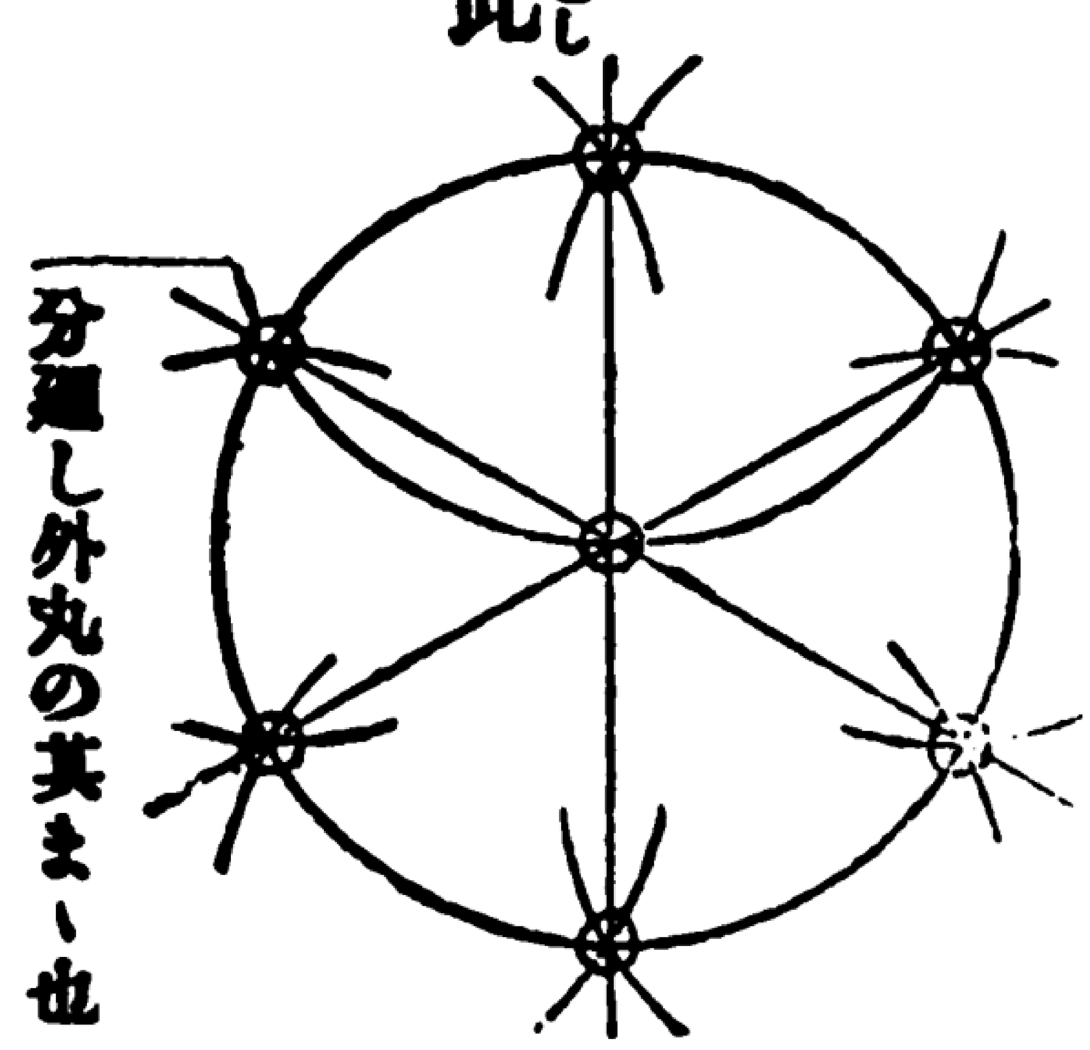
九枚ざゝ



三つびし

右の紋は六ッに割り、何れにても、卦引一ッはおひだに引と思ふべし。割方、廻せし分廻を其まゝにて上の所へもち行くべし。上より両方に如此あたり、右の方下へ○此印の所次第針たて段々にれくるべし。六つに割るなり。中すぢをまん中に引べし

但し割方如此



東京二十四景（七）

蓬生屋女史

目白臺

目黒、目白、目赤の三不動東京にいと名高し。その中にて、目赤不動は駒込にありて、何のながめもあらぬ處なり。目黒不動は丘により、瀧もありときけど、都をさかりたる遠き西南の方なれど、ものするに安からず。ひとり近くて、立ちよらまほしきは目白の不動なり、小石川區目白臺町にありて、俗に目白臺と呼ぶ。地高くして、眺望いとよし。丘下を流るゝ一帶の江戸川の流、耳を洗ふに足りぬべし。關口の堰より落つる水音高く聞え、水車の音もまじりて、都には珍らしき聲なり。見下す一面の水面、夏は青浪を翻し、秋のくれ、雁など



すだくもあはれなり。穴八幡の森より牛込の岡、小石川の岡にかけて、樹影瓦光、交錯して、いとをかしきに、江戸川の末、遠くひらけて、麹町區神田區の瓦鱗をさへながむるいとをかし。不動堂ものふりて傾きたる鐘楼に、今もなほ番人ありて時をつぐろなぞ、なほ古のさまなり。さて寺門の入口の石に

上みれぞ限りなき世と大空の
　　れ月さまさへ笠をめさるゝ

ときざめるも世の人のいましめの一つなるべし。

遊覧のついでに、なほ杖を曳くべきは、護國寺とて、目白臺よりは北七八丁の處に大なる寺あり。魂魄となりし後も、なほ國のいしずゑとならんとする名もやんごとなく、何となう木立さへ神さびたる心地するに、築山の姿、池水のさま、浮世の外のながめなるべし。更にまたほどもへだたらねど、雑子が谷にいたりて、鬼子母神の堂をとふも自から興あるべし。老木天にまじりて、幽蹊あはれなり。昔時此の鬼子母神と云ふは、己が子を數多ものして、いつくしみ撫る事一方ならず。されど人の子をあはれむ事つゆなく、いつもとりては食ひころしぬ。ある時己の子一人見ゑずなりしに、狂氣の如くにくるひまはりて、さやぎまどふに、弘法大師の申さるゝやう、汝が子を愛するも人の子をいつくしむも、皆同じなり。然るに汝は人の子をつゆ省ることなければ、汝の子をもとりぬ。もし今より人の子をもくはずは、其の子をかへし得させんと云はれけるに、鬼子母神いたうその言に感じて、それよりは人の子にもいたうやさしうなり此の神に願ひまつれど、如何なる子のそだたぬ家にても容易にそだち、此の母神に、ものして、其の子をたつかひめとして、十歳まで頭をすりてた

く時は、如何なるよわき子も、壮健に生ひたつなどと、掛茶屋の嫗の語るもあやし。

不死還（つゞく）

石榑千亦

吾はありし戰の詳しきことを書くことを得ざるを憾む。そは軍機にかゝはればなり。あらずわが軍指令官の敎に悖るによりてなり。されどたゞ一事の記すべきあり。そはわが身にとりては一大事なればなりあやまりなき我身に紀念の手おひし日なればなり。今は歸らぬものと思ひて、涙そゝぎし美濃部は、又もやこの世の人となり、本の如く吾と共に戰のことに從ひぬ。吾と彼とは、糧食をおくらむずる船の目付して、陸路より本隊の入りたゝむ前に、海路よりせよといふ命をうけて、嘉義にむかひぬ。今は本隊は必入りてぞあらむとおもひたのみつゝ、船をよせぬ見れど岸にはあまたの兵士むらがれり、されどわが本隊にあらず。われは驚きて瞬くひまに、判斷を下しぬ。船脚おそきこのジヤンクにては、逃ぐとも逃ぐべからず。我等はもとより本隊おしなべて餓うべけれど、糧食はわたすべからず。死はわが身の本分として、本隊にはしらさゞるべからずいでこゝぞわが骨の埋め處とわづかに少隊の兵を二つに分ち、銃を手にして、のぼりぬ。さて一は敵にあたりて、食糧を守りぬ。美濃部これにあたり。われは一を率ゐて本隊の來べき方へと志しぬ。敵の拒むを打はらひつ。逃げむとにはあらず逃げて、本隊に通せむとの念力は、敵を後になして、力の限すゝみぬ。後に虎狼あり、しかもこの前いかに、しらぬ路たどりつゝ進む。地圖は誠に吾等にとりては、唯一の杖

なり。柱なり。されどそをひらきて見てあらむひまなきをいかにせむ。遥か前面に走せくるは、いで本隊こそ進み來ぬれど、心の内に打喜びつゝ進ゆき、近よるまゝに觀れど、本隊にはあらざるが如しさては敵なりしかと思ひし刹那、一發空をぬいて走る彈丸あといふまもなく胸の上部を貫きぬ。あゝやられつと思ひしが、われは其後のことをしらざりき。しかも日の幾日時の幾時たちしといふ事もわかぬに、身は野戰病院の病室に横はれりき。あゝ今にして思へばまことに夢のごとし。程へて吾等は汽船にたくられて、東京豫備病院にわたされむとす。枕につけるは討れつるもの斬られつるもの、はた病みてやゝよくなりしもの、大かた全き體軀したるはなし。つれ／＼に首をあげて見れど美濃部も横たはれり。われは彼嘉義にてわかれしより

またかつてあひしこともなけれど、いかゞなりゆきけむと思ひゐしに、今ゆくりなくこゝにあるを見、日頃の心拭ふが如くきえさり、感慨の念胸にあふれて、目には涕の迸るをしらざりき。かれもまたしか思ひけむ、兩眼には玉なす涕わきておつめり。にじりよりてきけど、かの時敵はます／＼多くむらがりて、遂に抗するを得ず。逃げむとして、腰をうたれぬとおもひし時、遥に勇ましき喇叭の聲ひゞきわたれり。これわが本隊の入來りしなり。われは其聲をきゝて命を拾ひ、かれ敵兵はその聲をきゝて、足の踏處なうしなひけむ、みなちり／＼になりぬ。思へば其喇叭の聲なかりせば、われはふたゝび今日君と相見ることを得ざりしならむといふ聲いとあはれなり。われも語りぬ、わが出來事を。思ふに彼の吾を見る事、なほ吾の彼を見るが如くなりしならむ。思

ふに今日ともかり二人の打とけたること、生れてなかりしところならむ。

れくられて病室にあり、日ごとに名譽の手傷を撫でゝ、せめてものなぐさめとしつ。はる〴〵と國許なる父兄は來りて、わが身をいたはり、又彼をなぐさめつわが鄕里より二人いでゝ、二人ともいたでをおひ、名をあげ譽をなし。しかも二人ともに生命にさはりなし。何等の幸福ぞ。此上は金鵄勳章を佩びて、二人連だち、歸國せむ日を待つぞかし。吾はここに來てあひつれど、今は何の思ひもなけれど、母が心づかひのほどいかばかりぞ、それは〳〵氏神に詣でゝ御身の無事を祈り、寺院にゆきては、劒難除の御守をこひうけ、日にも夜にも陰膳をすゑて、とく歸るやうにと、いのらぬまとてはあらざりしぞかし。まして負傷のしらせありし時のさわぎ。見せたきほどなり。わが歸らむ案じぬやういひはすべけれど、猶見ねど心もとなきものを、歸らるべくもならむ、必早く歸れよとよろこび給ひしこともありき。二十八年といふ年も早四五日と殘少くなになり戰捷の餘波は、市にも及び、こゝもかしこも賑はしさ大方ならず。人はみな春まついそぎにのみ心せかるゝ頃なりき。近衛師團が敍勳の沙汰。わが病室をどよもさむばかりに傳はりぬ。そはみな我病室は其關係者なりければなり。こをきくわが心やいかに、疵をなでぬ。さすりぬ。寢臺をすべりおりぬ。立ちて見つ、又步きて見つ、試に小走りにかけても見つ又しづかにたちて、わが身體やいかにと、心は心に問ひぬ、心臟の鼓動いまだをさまらず。疵の痛みは漸々に波及しぬ。さてはまだか、まだなほらぬかとあまたたび打歎き、又寢臺にかへりて打伏しぬ。さ

れど伏してはゐられず。又すべり出でぬ。又前の如くくりかへしぬ。いたみはなは變りしこともなく、あらず中々にはげしくなりゆくが如し。されど今日は勳章與へむとて、われを呼出されやせむ。さるを吾こゝにあらむは口をしき限なり。彼ははやく去りぬもとより彼の傷はさばかりいみじからず。ことに臀のあたりなれど、平復も早かりしならむ。彼は逃げて傷をおひ、われは進みて疵をうけつ。武夫が覺悟の上におきて、實におくれぬ心地す。かつ彼は日頃將校の前に出入し。たゞ諛の辭もてあやなせり。われはいたくそを恥づ、これのみならず、軍人といふきはの恥かしからぬことかは、さてもわれ斗をかしきはあらじ。人の上のことなどとかく今いひ思ふべきにあらず。今日にも高木直男とよび出されむにあらずといひてはいかゞあらむと、寢臺の上に昇りつ降りつ、同じことくりかへしなしゝこと幾そたび遂に吾は決しぬ。よしいさゝかはあしき處ありとも、かまへて退院復隊せむと、其日軍醫のとゞむるをもきかずして、病院を出でぬ。

一日千秋とは今ぞはじめて思ひしりぬ。かの大連灣に命をまちしは、長かりきとおもひしは、まだ至らざりしなりけり。今日此頃の長さ、ことに勤務はいみじう忙はしく、歳暮の思ひはこゝにもまぬかれざりき。されどいと頼もしき聞えはありき。わが大隊長はともに東京を出で臺灣にわたられけれど、ありしほどは惡疫のために打なやみて病院にあり、一時はみまかりぬとの噂さへありしが、歸る折やう〳〵快うなりてともに歸られ、戰爭といふことには一たびだにもたづさはらず。しかも功四級の金鵄勳章賜はりつとか、思へど勳章條例に、四たび戰ひし

ものには授け給ふよししるし給へり。さるを其例にもれたりしにも給はりつ。大隊長と吾とは異れり。されどわれは大小十余戰。わすれても賜はらぬことかあるべきと、おもふ間に年はくれて、けふ一日といふ大晦日にはなりぬ。午後になりて、慰勞休暇の命は下りぬ、しかも勲章の沙汰なし、怏々として樂しからざりし。夕まぐれ、美濃部は訪ひ來ぬ、胸には功七級の金鵄勲章かゞやきわたれり。われは驚きしものから、わが此頃頻に待こがるゝを聞しりてたはむれするにか、いかでかさる僞をばうけひくべきと、心にわざ笑ひて、誰のを借りて來しぞといへば、咄失敬千萬なることないひそ、こを見よとさし出したるは、まぎれもなき勲章と年金下賜の辭令書。さてはと呆れて物もいはれずもしくぞ、吾猶病院にありと思ひて、そなたへ送りしにはあらじかいかでさる事かあらむと、千々の思ひにくもりゆく心の鏡、くだけて物をおもふとは、しりてかはたしらずてかいと喜ばしげに、われは明日たちて歸國せむと思ふいかにともにはたゞずや、いまだ立たずとならば、ことづてにもあれ、物にてもあれとゞけてよくばとゞくべきぞと、親しきことばも、われには嘲けらるるが如くきこゆるに、物もいはでありしかば、本意なげに彼の立さりしあとにて、傷の痛みはじめていみじきをさとりぬ。

あゝいかで歸らむ歸られむ。彼は榮譽のしるしをもちわれは一物だになし。さもて／＼望をかけしこの勲章も、また等級的となりにしか、媚び諂ひをささぐる人に與ふるか、さても吾と彼といづれか異なる。吾はわが功中々に彼の上にありと思へり。あゝおのがむさ／＼ながら、始終同じかりし境遇今や則ち

異りぬ。あはれ何の面目ありて、父兄にまみえてむ卿黨はた吾を何とかいはむ。さるにても彼が歸らむしるしらぬ人々打集りて、盛に歡迎會をや催さむ。其折わが父母兄弟の心やいかならむ。消えも入りたきみこゝちにて、歎かせ給はん面かげの、今目の前なる心地して、胸も破るゝが如し、さてもこは誰をか恨みむ。わが罪なりわが科なり。あゝいかで歸らむ歸られむ。たゞ歸るべき處はもとの土と水。あはれ〳〵さても母上にあひまつらざりしぞ、恨の上の恨なる。さても今はかひなしかくとしらせの文とゞかむ新玉の年の始の賀詞か。かへりてむしらせかと、急き封れしきり給はむ時。あゝ不孝これより甚しきはあらじ。さるにても昨日母上の文に、とく傷のなほるやう、勲章とやらを賜はりて、とく休暇に歸るやうと、かへす〳〵もかゝせ給へり。されむたゞ一目にてもあひ奉りての上にせむか、あゝ何ぞめゝしき、とても思はざりき。夷をきりし鮮血の痕に、今又わが銹を重ねむとは。さるにても人われを狂といはむか、狂にてもありぬべし。愚とよむむか、愚にてもありぬべし。世評はたゞ其人々の思ふまゝに任せむのみ。あはれ吾はかの傷れひし時、など助かりけむ。たゞ恨むらくはわれを救ひし人、あゝわれを救ひし人。

一月某夜風さむき碎窓に向ひて

高木直男記す

と、あはれこの紀行めきたる遺書。あはれこの遺書めきたるいひときき。あはれこのいひときめきたる消息。まきかへし、くりかへし、涙いたづらに水莖のあとをけがしぬ。しかも狂を笑ふ涕か、愚をそしる涕か、そも〳〵又何の涕か、われわが涕をしらずた

いしる人ぞしらむ。

朝露

柳子
櫻子

（其一）

さら〳〵と淸く流るゝはゝきがはに、咲き晩くれたる深山櫻の、散りうかぶもあはれなるに山吹のかげの映れる、更に黄金の流るゝが如くにて、いはんかたもなし。年ふりし一本柳のあなたは。一面の野原、末は空に打ち續きて、麥生の靑やかなる、なの花の黄金色なる、紫雲艸の紫の雲かたどりたるなど、さま〳〵に春の錦をよそほひ、西は遙のそら山幾重雲幾重。鳥は高く飛びて、芝生の床をはなれつゝ、雲井に上がる雲雀と高さをや、あらそふらむ。

妹「兄樣こちこゝに。いゝつくしんぼうが。あつてよ。こら。ネ。と目を丸くして妹のいへど。兄「ヤア、いゝんだなア、僕も僕も、今さういふのをさがしてみせるよ。愛ちやん、一所においでな。妹「アゝ。兄は面白さうに、靴もて蓮華草を、ふみにじりながらゆくに、妹は流石女子とて、心根もやさしう。妹「兄さん、かはいさうじやありませんか。そんなにふんで……「いゝやふんだつて、なせ。「なせでも……「なせエ……「そいだつて……と言ひ出す言葉もなくて止みぬ。妹「兄さんあのそら向のあすこねエ、あすこへいつて、おすわりして、遊びましよう、ネ、ろして　なんかこさいて、おみやにしませう。兄「アゝ。僕ははやいよかけるのが、愛ちやんかけてあとからおつかけておいでな。僕はこの靴でかけていつてみせるよ。

とさも自慢さう　一際蓮花草の茂れるところに、かけ行きぬ。妹もれひつきて共に芝の上にすわり、一心に蓮花草をつみ始めぬ。兄「愛ちやん昨日習つた唱歌うたはう。　妹「なんのうたを。　兄「霞か雲かさ　妹「アヽわれ。一緒に歌ひませう。　二人「霞か雲か、はた雪か、とむかり匂ふ其花盛、百鳥さへもうたふなり。　妹「愛ちやんまうれやつだろうからかへろうよ。　妹「アヽ。　兄「これもつていつて、僕が母様にれみやにするんだよ。　妹「兄さんそれもつていくの。わたしのつむなと、とりかへて頂戴な。いやカイ、　兄「僕アいやだ、僕はこれつんだんだから、これもつていくんだ。　妹「そいじやア、とりかへて、くれないの。　兄「いやだわ。

妹ははや目には涙の露を宿し。一村雨のふりしきたらんとするに、兄も哀とおもひて、　兄「そいじやア、二つ一所にしていから。

妹は返事なし。兄は妹の手よりうむひて、己のと一つにして、妹の手をとり、元來し道へかへり行きぬ。

（其　二）

母「オヤまア武雄はかへつたのかい。　武雄「ハイ。

母「さわ、れやつをれ上んなさい。歸つてきて、父様にれ辭儀をしましたか。　二人「マダ。　母「そんならしてきてから、れ頂きなさい。　二人「ハイ。

○　○　○　○　○

そも此の家の主人は、今は此の世に亡き人なり。名は芳野忠雄といひて、海軍の少佐をつとめしが、敵傍艦に乘込みて、我國に歸らんとせし途中にて船體行方不知成りしかむ、跡に留守もる夫人、清子の歎き一方ならず。もしも我夫、空しく海底の藻屑と沈みはて給ひしか、たゞ一人助かりて歸り給ふべき

御氣象にもれはさず。もしや舟の何處の無人島にか漂流もやしつらん。さるにても、いかにし給ひしかと、ひとりごつに、答ふるものは、たゞなみだなり。ことに憂が中にも、一月二月と光陰は人を待たず過行きて、畝傍艦は途中沈沒したりといふこと。疑ふべくもあらずときゝて、先づ胸つぶれ、われを忘れて、たゞ泪に袖をぞしぼりける。やゝありて我にかへりて、わがせの君の常々仰せられしにも、軍人の妻たるものは、例ひ夫、不意に討死したりとも、ゆめ〱なげくな。なげくは家の不名譽ぞと、仰せられしが、今その事のわが身に廻りきたりし悲しさ。綠の黑髮たちきりて。眞如涅槃の月を眺め、夫の後世を吊ひてん。さはあれ、忘れもせぬ。去年の御消息の中にも、武雄が成人したらんは、必我が志をつがせて軍人となし、御國の爲に盡させよ。愛子もよく敎育の道を誤まらずして、緣あらば軍人の妻とせよ。何處にありても、此のみ心掛りなるぞ。來年は本國に歸航すへければ、早う武雄を成人させて、我を喜ばせよと、のたまひしが、やがて御遺書なりしか。なつかしき本國へも歸り給はずして、はや幽明堺をことにし給ふ。アゝと、太き溜息したりしが。アゝ我ながら未練なり。武雄を立派に成人せしめ、天晴海軍軍人となして、この家の名を繼がせてと、思ひ立ちてさてのち。東京は萬づ人情の輕薄なれば、武雄の成人するまではとて、この里にいさゝか知邊人あるをたつきに、東京を引はらひて、此方に移りきたりしなり。武雄は生れ付き自ら雄々しげなり。愛子は未だ蕾の花ながら、自とよき相をもち、いと愛くるしき顏なり。兄は性質やゝ暴に過ぐる嫌あれども、母の敎育の法、宜しきを得て、先は中庸の小兒なり。

下女松「奥様、只今東京からこの方が。……といひて名刺を出せば、　清子「おや〳〵道子さんが御夫婦でいらしつた、こちらへお通し申せ。松「かしこまりした。

道子とは、海軍大尉松井忠高の妻にて、清子とは古の學校友達なり。

☆　☆　☆　☆　☆

清子「わたしも東京へいきたい〳〵と申して居りますが、サアこちらへ參つて見ますと、あちらへ參るのが、おつくうで。しかし兒供の智恵を増します事故何卒致して東京へ、連れて參つて、海軍に從事する志想を固めさせたいと思つて居り升。　忠高「私も何卒さうしたいと思ひ、道子も頻に頼みますし、是非お引受する積りで御坐います。忠雄君のお蔭で僕も至極好都合で斯樣に成りましたのゆゑ、もすこし牛込の家が廣いと御家族お引取をする事が出來ますがどうも實に…………　道子「それでは武雄さんだけれいやで無ければ、お引取申ましせう。家の信夫と丁度學校へ一處にお通ひ成さる事も出來ますし、アヽ兎にかく此處へいらしつたらどうでせう。

清子「どうも色々有難う御坐い升。さうして頂き升れば至極結搆で御坐い升。然し性質粗暴方で御坐いますから。御迷惑と存じまして。　忠高「いや御迷惑などゝは。妻が信夫の世話を致しますから不及ながらおせわを致しませう。それでは貴方の御都合が、およろしくあらば、今お連れ申しませう。私も舟に乘りますと、どういふ都合で、此地へ參る事が出來なく成るかも知れませんから、相成るべくは。

清子「どうも色々有難う御坐い升。それでは今日はまづ此家に御一泊遊して、明朝御出立になつたら宜しう御坐いませう。それではどうぞ御同道を願ひま

す。忠高「ハア慥に引受けました。」道子「私も不及ながら世話致して、悪い方にはお導き申さないやうに致しますから。」清子「誠になんとも申上られません實にお禮の言葉も御坐いません。忠雄も嘸地下で喜んで居りましせうでござります。

かくてこの夜は團居して、四方やもの物語して、伏床に入りぬ。

春の夜の夢短かに、はや夜も明はなれぬれど、朝食したゝめ、忠高は二番滊車にて歸る豫定なといふに、清子は獨り忙し氣に、それ何よかよと立働く。武雄は東京に出づるが嬉しくて堪まらず。且はおのれと同じ年頃の友もあるといふに嬉しさ限りなけれども、母と妹に別るゝ事流石に殘りをしけれど、少しはためらひげなり。母は今この子供の敎育の肝要なる時とおもへど、悲しさを少しも色には出さず。愛子は悲しさやらんかたなく、……愛子「兄さん東京へいつたら叔母さんに表書かいて頂いて、お手紙頂戴な。私もいろんな事を書いて上げるからネ。ア、この間學校で書いたあの端書へも、何か書いて上げましせう。」武雄「愛ちやん、あいじや屆かないよ。ありや遊ぶのにつかうんだもの。母樣にさういへど出して下さるよ。ほんたうのを。」愛子「さう兄樣お明日からあたし一人で學校へ行くのねへ。歸る時も一人ねへ。雨のふる時あの柳の植てあるあの木の下を通るのはこわいワ」はや眼には涙の露を置けり。

武雄「愛ちやん、東京へ行くと、僕はあの海軍の服を着けて、洋劍もつて寫眞うつすが、送つて上げやうね。」「アヽ」愛子「兄さんもう行くの。わたし悲くつて……」と中は泪に聲は埋もれぬ。折しも母の清子「武雄や何をしています、叔父樣はもうお出で

すよ。武雄「ハイ　母「東京へ行つたら皆さんのおつしやる事をよく聞んですよ。いやだなんかいつていふんじやありません。いふ事を聞ない者は、海軍の士官には成れません。よく學校をゞ勉强して、早く立派になつて軍艦に乘つて、日本のお國の爲、戰をしなけりやいけませんよ。わかりましか。

武雄はうつむきて只頸を下ぐるのみ。

母「愛子や兄さんにおじぎをなさい。　愛子「兄さんはやく歸つてきて……　母「武雄や父さまのお寫眞にお辭儀をしましたか。武雄「もうしたの。母「さう。お寫眞をもう一枚革鞆に入れておいたから朝晚と外へ出たり歸つたりする時に、お辭儀をするんですよ。」

母の心中には無量の感慨溢れ出でぬ。あゝ夫の此世に在さば、父君に從ひて、勉强を爲さしめんに。とおもへば胸は張裂計なり。滊車にや晚くるゝならんと急ぎ立てゝ、愛子を引つれ、程遠からぬ。停車塲まで見送りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一心に編物を爲しゐたる愛子は、「母樣にいさんはもう東京へいつたかしらん。「マアそんなに早く行かれるもんですか。お時計を御覽なさい。まだ今やつと滊車が出掛けた位ですよ。「母樣滊車はけふは晚い事ねへ。

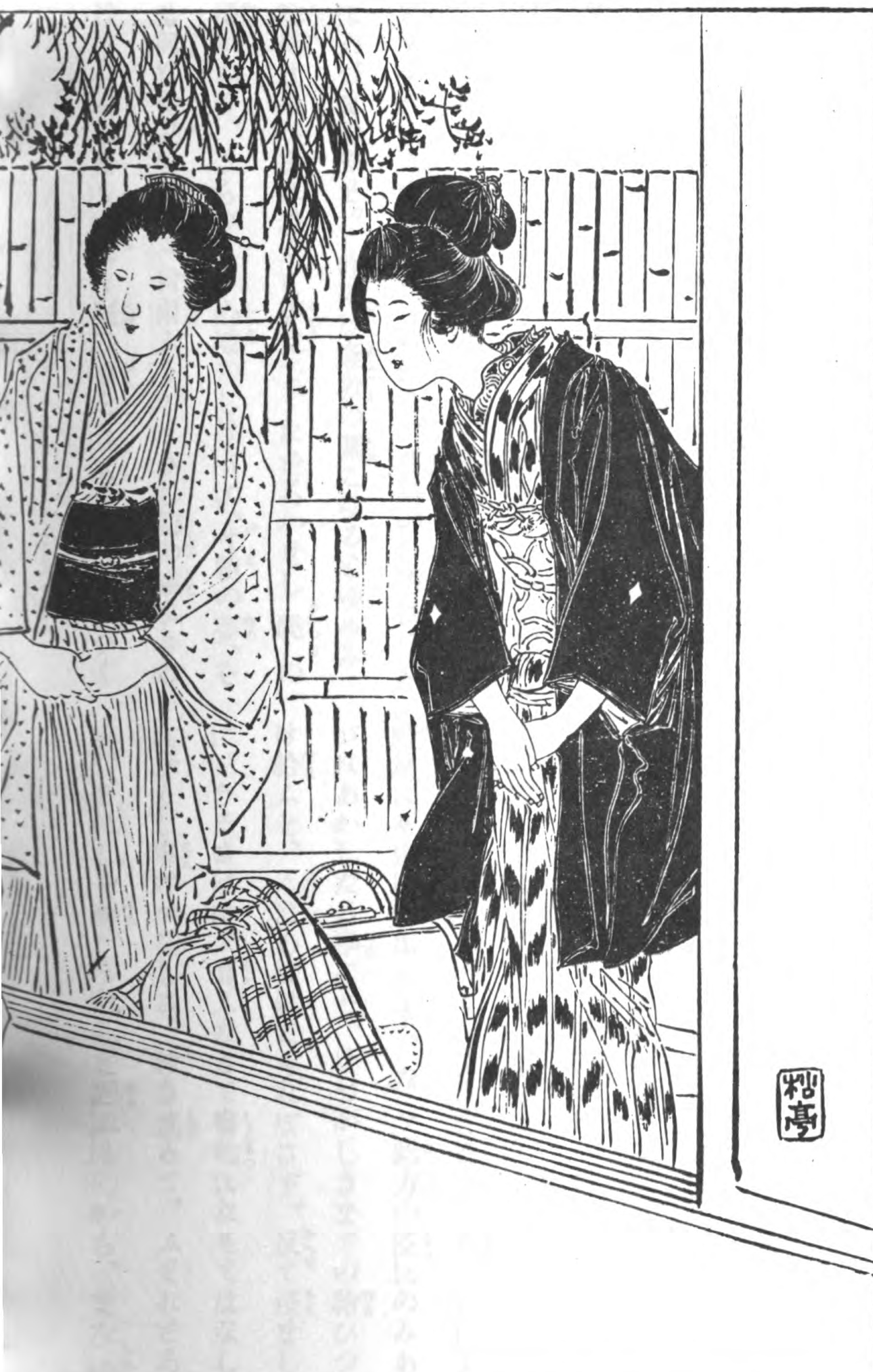
（未完）

朴平（五）

白魚女史

年の緖長く思ひむすばゝれにたる、まつの心のくるしさを、一夜の月にことよせて、かきならしたる百代がつま琴の音や、如何に高かりけん。はからずも都よりの便り。その君よりおこせしにはあらねど、

とにかくに忠僕のまめなる心にまかせて、ちか〳〵に旅立たん、心がまへ疾うせよ。いよ〳〵万づとゝのひたる曉には、父上にも聞え上げて、日をもとりきめんに、早きもおそきも汝が心がけ一つぞと、まだ幼子をさとす如きの母親の言の葉。百代ははづかしうもうれしうも覺えて、今日此の頃は、何となう魂魄も身にそはず。遠く都の空をのみかけ亘りて、はるかに見もせぬ家居のさま、庭のおもて、いろ〳〵に心にうつるもなづかしく、起きては、現にも、ともすれど人の面かげ。ぬれど、夢路の行方はつねにあづまのやど。　昨夜は逢坂の關こゆるとゆめみ、昨夜はあづまに着くと夢見て、おどろかせし曉の雁がねの、うらめしき心地のしけるに、今朝の夢、そも何とや見けむ。一村雨ふりかゝりし朝の窓ひきあけて、そのまゝ力なく庭の面をうちまもり、つく〳〵と袖に露をおく姿のしをれたる百代。あはれ夢、曉の夢、あかつきの夢、あかつきの夢は多く眞のトとなるものと聞くに、今朝の夢を、思へど、如何にせん。母樣につれられ、はる〳〵と我が君の家につき、我が君に逢ひ奉りしに、人はつれなくて、來たかと一目かへり見もせられず。無事でかと一言のお言葉もかけ給はず。母樣が何くれとをかしき昔のことなど語り出でられ。はては、己れが別れ奉りてより、死ぬるばかりに泣きまどひし君、それより野邊にも山にも出でず、たゞ此方の空にのみあこがれあかしたる事など、はづかしきまでの給ひつゞけ給ふを、人はあはれともおぼさず、反て淺ましげに、うるさげに、耳ふたぎて書物におもてはなし給はざりし事のかなしさ。泣き沈みて、ふとおどろけど、うれしや夢、うれしと思ふものから、また曉


松亭



の夢、世に云ふ如くまことの卜ならば、如何にかせんと、袖もしとゞにぬれまどひしが、あなおろかや、夢はわが思ひねに見るまぼろし。朴平のみの云ふ事とあまりに思ひうたがひし故に、あのやうの夢、見しにやあらむ。母様につれられて行くに、何にたがふ事のあるべき。まして、文雄様。文雄様が、如何に都馴れたまふとも、母様をあさましなど見給ふべきと、やうやくに思ひかへし、夜のものをもとりをさめ、朝清めなどすまして、つねのならひなれば、朝のよろこび聞えんと訪づるゝ父の居間。近づけど、つねになき父母の高聲、何となうおだやかならず、何事かいひ争ひ玉ふ如き聲の聞ゆるに、入りもえかねて、そのまゝたゝずめど、都へつれん、いなつれそどの争ひ、我殿はいつもさやうの事のみ仰せらるれど、いつまで年は待ちははべらず。定まりをりて定まらぬ我が子の身の上、まちがひのなからむ内に早う結びをさめではと母ののたまふを、父は用捨もなくうちけし、あな何を云ふ。とかくに女の心のせまきには困る。年は幾歳になるとも結びてある事は文雄もかねて知る處、知りて呼ばざるは、よく〱遂げまほしき事あればならむ。如何に忠なりとて、義ありとて、いやしき僕れの云ふ事などにはだされ容易く行きて深からぬ心の底な見られそ。愚や、馬鹿めがと、何がをかしきか、はてはから〱と高笑ひ。さはのたまへど彼の子は幼きより知り玉ふやうなる強勉家。都へのぼられてよりの、母御の御便りに、いつも必ずその事を案じては云ひこし玉ひき。あまりにこもりてのみなれど、もし身體などにさはるやうのことあらむには、何のせんなき事。朴平の云ふ所は、よくわかりて居るに侍らずや。せめて百代の傍

にあらねど、母親がおしかへす言葉、なほうちけして、何をおろかな、親さへがうつらせ難きほどのかたき文雄の心、何の百代如き幼きもの丶行きしとて引かるべき文雄の心かは。さる事ならぬ今少し女らしう敎へたて丶後につれ行けと、にが〳〵しげに父親の笑ふ聲、幼きものとの玉へど、もはや十八歲、馴るれど、おろかにも侍らねど、まして、此度の旅立の用意も、皆ひとりにてと丶のへしほどに、いさみ居るなれど、思ひの外ようかしづくやも知らずなど、なほさま〳〵と母のくどきたまふさまに、百代ははづかしく、なほ更に入りも入りかね、されどて、いつまで立ち聞かんもあるべきならず。そのまま我が部屋にもどりて、獨り恥かしさ、ゆ丶しさにうつぶしたるが、つく〴〵と思ひめぐらせど、母上の御心もうれしう、父の仰せも道理に、はては、已が身のおぼつかなさ、今朝の夢の如きやなど、さま〴〵に思ひつゞくる窓のほとり、またもやはら〳〵とふりかゝる村時雨、定めなき空のいとゞ身にしみて、返す〴〵も、袖をしぼりぬ。

百代は如何にしつる。何をかなしをる。明後日は都へ上らんに、父上のやう〳〵の御承知、まづかりにはおれど、知人にもいとまごひをなしおかずばならず。いつそ早うはき〳〵せよと、笑ましげに入り來る母親。あな此の子は事もなきに、何を泣きてぞ。やがては妻と呼ばるべき身、事もなく泣くやうにては、おぼつかなし。よく〳〵心をつけて、大人しう人にかしづかでは、都につれゆかんもはづかし。もし文雄主にもどかしく思はる丶やうにては、父君に對しまつりて、母がすまず。今よりはよく〳〵心をかしかう、万づ心せよと誡むるも、さとすも、げに

我子よかれと親の心一圖、百代は逢はんもうれしけれど、思へど、またゆゝしうも覺えて、行かまほしくも、行かまくもなき心のわりなさ。

やがて、門出の日にもなれば、父は心すゝまぬなれど、母がたつてのたのみにゆるししなれど、もし女子の道ふみたがへて、ふたゝび歸るやうの事ありては、なほさらに容るゝ處はなきぞと父親のきびしきたまものゝ言葉に、いよ〳〵心細う、まして、年久しう住みつきし軒、ふみなれし庭、すみすつるかなしさに、あやめもわかず、とかくに故郷の空のみ省られて、道のほどもおぼつかなき思ひに、あくる日の夕つかた、やう〳〵都につき、ある人の許を尋ぬるに、折りしも車のとまりし音に、ともし火かゝげて急ぎ立ち出でたる老僕朴平、これはとばかりにまろびかゝりて、ぬかづきしが、はや何の涙にくるゝか、老眼を袖もて幾度かぬぐひつゝ、今日はあやにく旦那樣の他出せられ、めづらしくひまどらせ玉へど、やがては歸らせ玉はん。まづ〳〵奥へ通らせ玉ひて、ゆる〳〵くつろぎ遊ばせと、いろ〳〵と迎ふる忠僕のまめやかさに、二人ははやく馴れぬ宿りも心やすく落ち着くならむ。

あつめては
くにのひかりさ
なりやせん
わかまさてらす
よはのほたるは

（新樂集）



文林

朝秋風　近衛忠熙

萩のはにおどろきそめしあさ風も
なれて身にしむ秋となりぬる

夜虫　久我建通

秋のよのふけしづまりて聞ゆなり
よひにはなちし鈴むしのこゑ

庭上月　毛利元徳

わが庭は木だちをしげみ三山にて
見るこゝちする秋の夜のつき

秋眺望　鍋島直大

谷みづのすめるがごとき青ぞらを
なきゆく雁のこゑのさやけさ

水上月　前田利嗣

水底もすきとほるまでさやかなる
つきこそやどれやま川のせに

秋旅行　長谷信成

旅ごろもけさとく立てこねくれた
あさぎりふかし佐夜の中やま

白鷺　諏訪忠元

里川のあしまにあさるしらさぎは
夕べもしらず立ちくらすらむ

折にふれたる　宮地厳夫

何か世にたのしきものと人とはゞ
　たまあへる友とものかたるなり

朝雀　植松有經

村すゞめ子らよりさきに起いでゝ
　のきの竹にちゝとなくなり

車　大口鯛二

たゞゑむしのりし車ものりこゝち
　よきにあへるは嬉しかりけり

庭上月　鎌田正夫

大ぞらの月にむかへむわがやどの
　にはもせむしと思はざりけり

月前雁　三輪義方

久かたの月のさかりといをねゝば
　かりなきわたるよひよひ毎に

月出山　柴田靜榮

篠すだれまきあぐるまに山のはの
　つきはこずゑをはなれける哉

三陸海嘯の慘狀をきゝて　松本操

むかしより聞きしこともなき高津浪
　いくその人をさそひ去にけん

二見浦　宇井正夫

岩が根にくだくる浪をはなとのみ
　まがふ二見のうらのあけぼの

筑波ねのふもとにて　安齋篤敬

二並のすがたかはらぬつくばねの
　ふもとをたどる今日ぞ嬉しき

海路日暮　木庭芳香

行く舟のとまり定めぬ波のうへに
　こゝろつくしの日は暮れに鳬

立秋　石原均

打つけに秋の來ぬると知らるゝは
草のたもとにむすぶしらつゆ

懷舊友　龜谷行

世のうさは身に添ひ來れど打解て
かたり合ふべき友ぞまれなる

野草帶露　鍋島榮子

夕月のかげをふみつゝきて見れば
はな野は露もさかりなりけり

夕鳩　前田朗子

打むれてねぐらにいまぞ歸るらん
のきさわがしきいへ鳩のこゑ

故郷草花　柳原愛子

秋ぐさの花野となりてなか〳〵に
とふひと多しふるさとのには

故郷薄　千種任子

故郷はすゝきがはらとなりはてゝ
にはもまがきもわかれさり鬼

和氣公　税所敦子

國のため磨くこゝろのかゞみには
かみのみかげもうつりまし劔

閑居水聲　松平儀子

わが庵のかきねをめぐる水れとに
こゝろのちりも洗ひてぞすむ

秋草　日野西廣子

暮ゆかむ虫の音いかにしげからん
さきみだれたり野べの八千草

暮ゆく空に月出たり　北島以登子

村どりのねぐらあらそふこゑ絶て
しづかにのぼる月のかげかな



●おほみめぐみ　天皇　后宮　兩陛下には、去月の二十六日、北海道函館に火災ありしことを、かしこくもきこしめさせられ、あはれとおぼし給ひて、金二千三百圓を賜ひて、めぐませ給へり。

●東宮殿下の御事　このほどは日光山におはします。御學問のおんいとま、御なぐさみの御すさびには、常に納約養正の御事ならざるはなし。御心薩摩琵琶をこのませたまひて、この道に名高き西幸吉といふを召させ給ひては、忠臣義士の曲を聞し召させ給ふ。妙處に至れば、御感のおんあまりに、エイーと、切聲をさへかけさせ給ふに、御附の將校までも、面もえあげず、袖をうるほすこともありとなん。去し卅一日は、御誕辰に當らせらるゝに、肥前の人にて、筆道にきこえ高き岡吉胤氏日光にありしを、鍋島侯をして、召させ給ひ、御前にてものかゝせしめ給ひて、おんつれ〴〵をなぐさめ給ひしとなん。かけんもかしこきことにこそ。

●兩宮殿下還御　函根離宮におはしゝ、昌子内親王、房子内親王、兩殿下には、去し七日還御あらせられたり。

●忠臣兒島高徳の後裔　兒島高徳はきこえたる南朝の忠臣なり。さるを重野博士はさきにかゝる人は

なかりきといへる論をなしたりしことありしが、今越中國、上新川郡、西水橋町に住める兒島眞人（舊島屋次右衛門）といへる人は、まさしくその後裔なりといふ。このごろ家まづしくなりて、むかしのやうにもあらず。山口縣に増野眞二といふ親戚あれど、それを手着に、そなたに引うつらんとする折、同郡滑川町の人、岩田雅正といふ人、いたく其の家のありさまをなげきて、古より傳へたる秘藏の舊記によりて、兒島家を再興してはといふに、ことし六七月のころ、秘藏の家記藏品などを檢するに、數十百種の兵書兵器其の他記錄等ありて、中には好材料あまたあるを見いだしたり。さて兒島氏は浮田中納言秀家の嫡流にして、眞人氏にいたるまで、十三代連綿持續し、且秀家は備後の三郎十二代の嫡孫たることをも知りえて、證となるべき書類、參考品をも添へて、富山縣知事の副署を請ひ得て、宮内大臣へ、高德後裔、現存承認のことを、出願せしに、宮内大臣よりは、自ら數語をその系譜の卷首に書き記し、且大臣の寫眞一葉を添へて、ゆくさきは、さるべきやうに斗らふべしとありしといふ。忠臣の後裔今に存す。いとありがたきことなり。

兒島氏家系は、後鳥羽天皇より出、南朝の時に當て、高德君を出し、豐臣氏に事へては、秀家君を出す。如此名門にして、或は忠臣を出し、或は英將を出す。眞に可貴也。自今以後子孫或は祖先の功業を欽慕し、忠孝純全の名士となり。奮發興起家名を三興することあらん乎。

子爵　土方久元

●日本は遂に世界に冠たるべし　今更にものあたらしげにいふべきにもあらず。こははやく天地のは

せめより定まれるなり。　皇統一系連綿たるは申すもかしこし。建國の体といひ、人の魂といひ、何れも外國のよく立ち及ぶべきにもあらず。なほいよいよみがき鍛へて、國光をかゞやかすべきなり。さきつころ世界漫遊の途のついでに、我が國にも立ち寄りし人にて、前英國海軍大臣スペンサー伯、このごろノーザムプトン學校の褒賞授與式にて、演說すらく、日、佛、獨の小學校にて、外國語を授くるは、よきことなれど、わが英國にても、之に倣ふべし。且中等敎育の制度のよくとゝのへるは、日本と加奈多とにて、遠く英國にまされりといひ、又英國のエンジニーアリングといへる雜誌に記せる大略にいはく、日本の製造工業の進歩せしは、たぐひなき例にして、その影響の我が英國の商工業に及び來れるを見て、いたく狼狽するものあれども、慮ふかき人ははやく二十五年以前より、日本にては敎育の制度をあらため、商工業の大國とならんとして、力をつくしゝを知れど、今更には、驚かず。孟買の大守ゆー卿かつていはく、日本の進歩今日の勢にて進まんには、終には我が英國より、委員をも特派して、其の敎育制度などを、視察せしめざるべからざるに至るべし。といへりしに、當時世の人みなかりそめの戲談なりと聞きすてたりしが、今に至りて、はじめて、其の豫言のよく適中せしを悟れり。されど日本の進歩は世の人の嘲けりしが如く、僥倖の世の勢に乘じたりしにはあらずして、其みなもと遠く且深かりしを知るべし。といへり。よくいへる語なり。なほよきことあまたあれども、彼の國の人は、よくはお知らぬなり。かゝかりいへども、なほほこるには足らず。いよ〳〵つとめて大成を期すべきなり。

●福羽美靜翁の近詠　二三首

日蝕の日よめる

天つ日をかすめて渡る今日のみは
月を月ともいふ人はなし

游泳

およぎつゝ身を浮はせて行くなりは
せむるも浪よたすくるも浪

某學生の富士登山するを送りて

のぼり立つ富士の山路におもへかし
人の世をゆくみちもかくぞと

●實業教育補助　山梨縣、南都留郡なる郡立南都留染織學校へは、補助費として、開校の日よりゆくさき五年の間、毎年に金千二百圓交附せらるゝといふ。

●天災　いかなれど、かくかり天災のつゝくことよ、三陸の海嘯の後、いくばくもあらぬに、宮城、岩手、秋田の三縣に大地震あり。つゞきて、暴風洪水の災ほとんど國中にあまねし。鐵道やぶれて、汽車不通となり。電柱倒れて、東西の安否しるによしなし。地さけ家たふれて、人畜の死傷おびたゞしく洪水氾濫して、田園荒廢す。何時の日か天候舊に復して、亦枕を高うするを得ん。

●忘るまじき日　去し十日は、陰曆にて八月四日に當る日なり。今より三十三年以前、元治元年甲子八月、英、佛、米、蘭の諸國軍艦十餘隻をれゑして長州下の關にわたせし日なり。忘るまじき日なり。

●言語のあやまり　世界に國はおほかれども、その言語は各ことなり。一國の内にてすら、一郡一鄉亦各方言あり。外國のは今さらくだきていはず。せめては我國内のにても、知りてあるべきこと、要

なきことにもあらざるべし。鹿兒島の人と、奥州の人とあひて、如何なるよしなりけん、争をおこして、いたくいひあらそへども、互にその方言をきゝしるべくもあらざりしかど、何時果つべしとも見えざりしに、外國の宣教師居合せて、二人のなかに立ちて、通辯してければ、ことはじめてなぎたりしといふこともあり。發音假名遣のあやまりも亦少なからず今こゝに坊間にありふれたるもの三四をあげんに、

誤	正
いしい（石或は為）	いしゐ
湯の中でぬゞい（或はゐ）（手拭）無用	てぬぐひ
ふねわたしあり（船渡）	ふなわたし
ことふく（古道具）	こだうぐ
なを（女の名） （人の名はおほくは物によりたるが常なれば直の義なるべし）	なほ

發音のあやまり

誤	正
うちくしく、うちせたうちるがげみえてなどか心のうちらざるらん（歌） （こは奥州の人のこゑの違ひなり、ツとチとを反對にいふなり。）	うつくしく（美）うつせば（映）うつるかげみえてなどか心のうつらざるらん
つりもうちる云々（塵も映る）	ちりもうつる
（これも）	
しす（鮓）	すし
（奥州にてはスとシもあやまるなり。）	
シエカエキシヤ	スヰガイキヤシヤ

アカヌ（水害瀛車不通）　ユカヌ

アシノバンチク（明晩着）　アスノバンツク

（こは仙臺の人の電報によれり）

いゐん（委員）（奥州）　ゐゝん

し丶（媒）（同）　す丶

す丶（獅子）（同）　し丶

しもの（干物）（東京）　ひもの

ヒヨウガナイ（仕樣ガ無イ）（東京）シヤウガナイ

ことばのうらうへなるもの

奥州　昨日御賴み申すますだ縫物はでますたか。

東京　昨日御賴み申しました縫物はできましたか。

奥州　娘は今そこへでき（他出）ますた

東京　娘は今そこまで出（他出）ました

筑前　明日御在宅ならばあそびに來るよ

東京　明日御在宅ならばあそびに行くよ

（つゞく）

●天賞文庫　故江澤金五郎といへる人は、千葉縣夷隅郡大多喜町出身の人なるが、世にしありしころわが郷里に文庫をたてゝ、教育の一助とせばやと志してありしが、果さずして、みまかれりき。されど遺族の人とも、その遺志をつぎて、こたびその設立基本金として、金千有餘圓を寄贈せり。さて大多喜町長鋤柄良司氏、及小學校長等はさるべくはかりて、設立にとりかゝれりといふ。江澤氏家號を天賞堂といふにちなみて、天賞文庫といふなりとぞ。美

雄と稱すべきなり。

●傳染病のいましめ　内務省の衛生局にて、數年の間のありさまによりて、かんがへたりといふを聞くに、わが國にては、コレラ、腸チブス、赤痢、ジフテリア、發疹チブス、などの傳染病は、他の職業の人にくらぶれど、多く農業をするものにおほしといふ。このごろしきりに流行する赤痢病も百が内八十までは、農業をするものにありといふ。こはおほかた生水生物を飲食するよりなるべく、ことに赤痢流行は、井水を用ゐずして、溪流をそのまゝに用ゐるが、近き因なるべしといふ。心すべきなり。

●勇夫　千葉縣印幡郡碓氷町の、木原敬次郎といへる人は、征清の役に、軍夫となりて、かの國に渡り、平壌にたむろせし折、清兵にとりかこまれしが、利心をふりおこして、立ちどころに敵六人を斬りたふせり。この時傷をうけて後、遂にはかなくなれりけれど、去し八日遺族のものに、弔祭の料にとて、金三百五十圓を賜ひて、めぐみ給へりといふ。身はひきゝ軍夫ながら、心けだかき人といふべし。

●孝婦　家富み身榮ゐて、不足を知らぬものゝなは、道にそむきて、孝ならず、忠ならざるものも、世にはなしとせず。心にはそれと知りながらも、われと我が心を欺きてのわざなるべし。よからぬことをなして、自ら快と思ふものあらんや。されど常におのれの恣なるに克ちゐて、正道を行ふべきわざなりかし。蓋し不言不語の間に自ら忠孝の心深かるは古來我神州の風儀なり。ことさらに苦しみて、行ふが如きは末しきものにて、日本心の人といひがたかるべし。こゝに廣島縣高田郡井原村に住める巡査佐藤剛明が妻に、とめ女といふものあり。廣島市

白島久西逸藏が妹なり。年二十一のときに、今の佐藤氏に嫁きて後男二人をうめり。舅はことし七十八歳の高齢にて、十二年前より中風症にかゝりて、起居自由ならず。姑も亦三年以前に同じ病を煩ひて、手足きかず。家もと富りとにもあらず。夫は公務にいそがはしけれど、とめ女は二人の兒をはぐゝみながら、舅姑につかへ、その隙には、近隣の子女を集へて、裁縫など敎へつゝ、人にたのまれては、衣服の仕立などして、家計をたすけ、裕ならぬすぎはひの内にも、暑さ寒さに從ひて、衣食をほどよくし、日々藥をすゝめ、手をさすり、兒をもみ和らげなど孝養怠ることなく、もし近鄕に賑ひことある折、或は說法會などのある折は、必ず自ら背負ひて行き、めづらかなるものなどある折には、必ずまづ舅姑にすゝむ。さるに姑は病おもりて、六十七歳にて遂にみまかれりけれど、なげき悲みながら懇にあとどぶらへり。嫁ぎてより、こゝに九年の年月あたかも一日の如し。近鄕傳へて、譽め感ざるはなし。璧玉終に埋れ果てず、こと公にきこえて、ことし六月ものを賜はりて褒賞せられたり。これ女のよき鏡なり。世にはおのが身のもとたり、おのが身に洪恩ある親をないがしろにし、あるはおのれひとり育てりといふやうなる面して、行をつゝしまず、身を修めずして、人にも笑はれ、親の心をもなやましむるもの、あるは、そも如何なる心ぞや。

廣島縣安藝國高田郡井原村
佐藤剛明妻
久西トメ

資性温良舅姑に孝、夫に貞、能く家事を整理し、殊に中風の症に罹り、身體自由を失へる舅姑に事へ、晝夜倦怠の色なく、按摩藥餌の勞より、着衣

洗滌、身體の沐浴に至るまで、看護周到九年の久さしき志操一日の如し、洵に奇特とす、仍て爲其賞木杯一ヶ下賜候事

明治二十九年六月十八日

廣島縣知事從四位勳三等　折田平内印

廣島縣安藝國高田郡井原村

佐藤剛明妻

久西トメ

資性温良、舅姑に孝、夫に貞、能く家事を整理し、殊に疾患の舅姑に事へ、更に倦怠の色なく、看護懇到九年間一日の如し、洵に奇特の至りに付、爲紀念珠數一聯贈與候事

明治二十九年六月二十七日

高田郡長正七位勳六等　池田秀一

●節婦　こも亦鑑とすべき談なり。横濱市戸部町二丁目卅一番地に住める笠松又三郎が妻、まさ女は、安政五年相州三浦郡鴨居村の農家に生る。明治七年十七歳にて、今の笠松氏に嫁せり、夫又三郎は刀劍を研くを職として、世のうき瀬をも知らず暮しけるが、その翌八年頃より脊髓病といふを煩ひて、手足思ふにまかせず。ほと／＼廢疾となり、年をへて十六七年頃になりては、足腰全くきかず。職業をもつとめかねて古物商に轉業したれども、資産も裕かならず、加ふるに病体なれど、思ふまゝにもならず。日々に家も衰へゆきて、細き烟だに立てかねるまでになれり。長男に祐吉とて今年二十一になれるがあれども、おのが職とする裁縫をもつとめず、放蕩に身を持ち崩して、家へはよりもつかず。庶子のます女といふは常に病身にして、すぎはひを助くべきほどのものにもあらず。今年一月病みてみうせたり。親戚とてはまさ女が生家むかりにて、これとても裕ならねど、援を求むる道なし。さるをとめ女は人の

爲に衣服の洗濯わらひ張りなどして、わづかの代を得て、辛くも一家をさゝへながら、懇に病夫を看護し、庶子のまさ女を教養し、祐吉の行常ならぬを痛むなど、一方ならぬ憂き世のなかにも、固く婦道を守りて、志操を變せず。ひたすら骨碎け、身粉になるまで、力をつくすこと、こゝに二十餘年一日もかはることなし。されど、この月二日神奈川縣知事賞狀に金五圓を添へ賜ひて、其の貞節を賞めたりといふ。貧富によりて、節操をかふるもの〻あめる世に、いともありだきことならずや。

横濱市戸部町二丁目三十一番地
笠松又三郎妻　まさ

資性温良、夫に事へて貞順、夫病に罹り、家計益々困難に陥ると雖も、毫も屈撓せず。看護療養怠りなく、其志行を變せざる事、茲に二十餘年、洵に奇特とす、仍て其賞として、金五圓下賜候事

神奈川縣知事　中野健明

●埋木　千葉縣夷隅郡總野村の磯野なにがしといふ人、わが家の前をながるゝ川底を掘りしに、まはり一丈五六尺ばかりの檜の巨材ありて、幾千年を經たりとも知らず。さながら石の如くなりといふ。考古學のよき材料なり。

●大鰻　このほど大雨しきりにふるに、函根の湯本なる早川といふも、水がさ大に増しゝか、六七日のころとか、この川にてとりたる鰻は長さ六尺ばかり、まはり二尺おもさ五貫ばかりありしといふ。大なるものもあればあるなり。

●をろち　きくがまゝを記さんに、山形縣南村山郡堀田村の上野といふところの人、奥田なにがしといふが、去し三日といふ日、藥草をとらんとて、そ

の邊なる蛇殼といふ處にゆきて、きよき溪川の流あるに、あたりに腰打居ゑて、わりごひらきて、晝食せんする折しも、醒き風のさつと吹き來るに、あやしと思ひて見れど、たゞ繁れる熊笹をわけつゝ、大なる蛇の來るなりけり。こはと打ち驚きて、せんすべも知らず。たゞ地に打ち伏してありけるに、をろちはその溪川をかなたに渡りゆくけはひなるに、たづくゝ首をもたげて見れど、長は二丈ばかりもありて、青黑赭の文ありて、太さは五升樽ばかりもあり。さてその文の日かげに映じていとすさまじかりしといふ。かくて矢を射るが如くに溪をわたりて向ひの山の崖に登り、いづくともなくかげ失せたり。さて我と心づきて、ひた走りに我が家に歸りて後は、今に、熱に犯されてふしどにありといふ。おそろしき事なり。このわたり古より大蛇ありといひ傳ふといふ。

●秋の千草　七草のみかは、千草八千草時しりがほにさきにほひて、今まさかりなるべし。都ならぬ人は、野中のおのづからなるけはひを愛でたまふべく、都人は向島のはなやしき、芝の苔香園、其他なほあまたあるべし。

●つきぐしからぬもの　かはかたちは女にして、言語ふるまひの女ならざる。万夫をさしおきて、妻のさし出でたる。學問藝術を修めたる女の、かへりて女めきて見ねざる。身は日本にうまれながら、魂は外國のをいれたる。うらわかき乙女の文机に、なまめきたる小說本などおきたる。わかき女の道ゆくに卷たばこなどくゆらしたる。親子のゆくに子の先だちたる。わかきもの丶晝寢したる。女文學者といふもの丶かきたるもの丶中に、人の聞きたるところ

にては、聲をあげては、ね讀み難きものある。なほあるべし。

●末松文學博士の講話　こは、文學博士末松謙澄氏が、女子高等師範學校にてせられたるものなりとて、同校よりおこされつるものなり。

婦人の務

校長並に來衆諸君、本日は校長の御依賴に依りまして、何ぞ諸君の爲に一片の演說を致せといふことでござります。御承知の通り、自分に於きましては、格別に人に秀でたる學識經驗のあるといふのでもござりませぬ、併し折角の御依賴でもござりましたし、又私も敎育上、其他の事に付ては、多少平生心掛けて居る樣なる次第でござりますから、一應述べますでござります。

承はりますれど、今日の聽衆の御方々は、主として高等師範學校の女子師範生徒でござります、次は高等女學校の生徒の御方で御座るといふことでござります。付ては平生の貴孃方の御學びになることも、其間に於ては多少の違ひもありませうし又た將來の御從事なさることに於きましても、一生と申すではありませぬが、暫くの間は自つから違ふ所もある樣に存じます、

（未完）

●大倭心　こは女學雜誌なり。こゝに女學の爲に一友を得たり。自女子問題を極むと稱す、而してその第一號は、さまぐ\の材料をとりあつめて、いとおもしろかれども、これ女學雜誌とせんよりも、むしろ一種の文學雜誌と見ん方穩當なるが如し。

（第一號九月十日發行女敎社）



教の庭

九月廿日兼題　汽車

天

肥後熊本東寺原町九十五番地　田代　綾子（十年五ヶ月）

夢の間に千里をかけるくるまこそ
　進み行く世のためしなるらめ

地

日本橋區濱町一丁目廿四番地　諸井くら子

空かけるたつにもにたり時の間に
　野山ゆすりてすぐるくるまは

人

松山市鐵砲町十八番戸　野中あさ子

三空とふ鳥をはやしとたれもひしは
　此のくるまをはみぬ世なり鳬

秀逸（十五首）

烟のみあとにのこしてあつさゆみ　住山　幾子
　いるより速くゆくくるまかな

まかねちを走るくるまのみち速み　山根　久子
　ち里の遠もとなりとそれもふ

大空にけふりのこしてみるか中に　磯部都屋子
　ねこし山こしゆくくるまかな

雲をはらひのほる龍かと思ふまて　田代　艶子
　烟り立てつゝ行くくるまかな

ひと筋のけふり殘してまかね路を　奥原ふく子
　はしるくるまの勇ましきかな

河をこえやま路を走りつかのまに　香川　穎子
　千里のみちをゆくくるまかな

千里をもまたゝくひまに往き通ふ　近森　延子
　湯げの車のくしくもあるかな

十月兼題

五日
- 歌……深夜擣衣
- 文……故郷の母におくる文

廿日
- 歌……閑庭菊
- 文……時雨

つかの間に千さとゆきかふ車こそ　三谷起美子
　思へだみよのめぐみなりけれ

濱邊ゆき山路のはりつひと日にも　柳田さと子
　千里をかけて行くくるまかな

黒けふり風になひけてやま路とも　舘脇ます子
　野路ともいはて行くくるま哉

ひらけゆく御代の光とときの間に　池谷　富子
　千里をかけてゆくくるまかな

笛の音に煙立ちそひゆるき出て丶　小曾根志う子
　見るめもはやく行くくるま哉

時の間に千里をはしるくるまこそ　公羽　壽子
　開けゆく世の志るしなりけれ

けむりをは名殘に見せて八重山を　小西ちやう子
　はしるくるまのいさましき哉

山川のさはりもなくてまかねちを　田津木久子
　すゝむくるまのこゝちよき哉

（以下原稿到着順）

さゝがにの糸によろへて黒がねの　佳山せの子
　みちをもしきさし君か御代かな

大御代のたからなり黒くろかねの　佳山　靜子
　みちをも走るゆげのくるまは

いつの間にささの車はゆきにけん　甲斐莊ゆふ子
　野べとみしまに山がくれせり

進み行く世は幸れはしみちにすら　徳永萬壽子
　眞金をしきてはしる火くるま

横雲をあとにみなしてときのまに　萩原　章子
　みやこの空にゆくくるまかな

ひらけゆく世の例なりまかね路を　土肥　仙子
　やまの奥まではしるくるまは

まかね路をかける車はゐなからに　岡田よね子
　雁のいくむれ越ゑてすくらん

けぶりのみ空に殘してはしりゆく　淺見　孝子
　くるまの影の見ゑずもある哉

かく迄に進むべしとは知らざりき　星野　式子
　くるまの煙りあとにのこして

年月を矢にたとへしはむかしにて　星野　仁子
　それに彌ますくるまはけしき

一すちのけふりを空にのこしつゝ　牧野　貞子
　くるまは見ゑす成りにける哉

すゝみゆく世のひかりころ得けれ　山田ふみ子

ちさとをゆめに走ると思へは

くろかねのみちのひらけて沖繩も　名取正代子
千島のはてもとなりとろなる

眞金路や走るくるまのゆきかひに　奥原とく子
いやひらけゆく君か御代かな

くろかねの道もひらけて西ひかし　永井さい子
はしるくるまの賑はしきかな

水の上やまのあなをも走りゆく　小野田のふ子
ゆのけくるまの早くもある哉

見るか内にくるまは遠くなりに鳬　仁井田とみ子
けふりひと筋あとにのこりて

敷島の我がゆくみちはくろかねの　長洲よの子
くるまのひゝき跡もたゑせし

秋風のふくといひけんあつまちも　日高かず子
束のまにこそ行きかへるなれ

黑けふりあとにのこしてくろ金の　瀬戸　榮子
みちゆくくるま神のわさかも

黑けふりたてつゝ進むくるまこそ　畠山千代子
ひらけゆく世に後れさるらめ

飛ぶとりのつばさよりけに鋭きは　佐々有鄰子
眞金路はしるくるまなりけり

石炭のけふりをはきてときの間に　醍井ふみ子
千さとの道をゆくくるまかな

筑紫よりみちのく迄もくろかねの　醍井ふさ子
道をはしれるくるまはやしも

野も山も眞金路かよふくるまこそ　白倉　柳子
開け行く世のしるしなりけれ

ゆめのまに千里の道もかよふなり　志貴一枝子
開けゆく代にならふくるまは

眞金路にのりて千里もやすらけく　小町谷里江子
ゆきかふ御代となりにける哉

つゝら折のぼる坂路もまかねしき　小町谷園子
ゆきかひ易き御代となりけり

小車はかけたも見ゑすなりにけり　及川ちひろ子
殘れるけふりきゑ果てぬ間に

わしよわき我が身も千里遁ひ見ん　河野　文子
煙りくるまをたのみにはして

ま金しく滊車のかよひ路開けきて　佐藤かめを子
ひなもみやこに近くなりけり

開けゆく御代のしるしと夢のまに　高橋てる子

千里をかけてゆくくるまかな

なる笛のひゞきとともに眞金路を　後藤　信子
はしるくるまのおもしろき哉

ひらけゆく世は車にもたつけふり　羽田三緒子
豊かにみえて絶ゆるまそなき

すゝみ行く御代をしらする車かな　石川　留子
ち里もゆめのうちにこえつゝ

山川をこえゆくたびのうさもなく　石川きむ子
ゆけのくるまに畏こかりける

見るか中に百里千さとはしりゆく　石川田鶴子
くるまにのるも御代の賜もの

世につれて物そかしこきくろ金を　横田須磨子
大路となして行くくるまかな

みつと火の力くるまをたのみにて　吾妻ちか子
千里のほかもゆきめくりてむ

遙けしと思ひすてたるゆきかひも　杉浦　糸子
嬉しきものはくるまなりけ利

幾千里見る間にかけるくるまこそ　大谷津こと子
開くる御代のためしなりけれ

我國に汽車てふものゝ出來しより　植木とよ子
千里のをちもとなりとぞ思ふ

黒烟り立てゝ見る間にはしり出て　石川すけ子
野山もあとにゆくくるまかな

空にたつけむりも未たきえぬまに　青木　春子
くるまの影はみえすなりにき

やまめくるゆけのくるまは丈夫か　水津すけ子
いとめし虫とみえまかふなり

山川をくるまながらにわたるかな　久松勢伊子
まかねの道のひらけたるより

送りつゝむかへもしつゝ時のまに　野中ゆき子
やまち廻りてゆくくるまかな

ひとすぢの雲をおこしてゆく龍は　松山かね子
まかねの道のくるまなりけり

いかはかり險しき山もし平らかに　重松たか子
眞金のうへをゆくくるまかな

開けゆく御代もろともにいと早く　越井　道子
すゝむくるまやくろかねの道

空かよふ鳥のつはさもおよふまし　越井屋壽子
煙りたてつゝはしるくるまに

一むらのけふりにつれて天かけり　北川はな子

きしるくるまのみる隙のなき

千里ゆく駒もれよはしくろかねの　今藤　仲子
道もとゝろとはしるくるまに

けむりのみ殘して走る火くるまは　細川　治子
けに大みよのひかりなるら舞

走り行くくるまの影はとくうせて　小西　琴子
れとのみ雲のうちにきこゆる

居ながらに千里の旅もしむしにて　續木かめ子
まがね路とくも行くくるま哉

けふりのみ後になひきてま金路の　眞鍋　直子
くるまは早くみゐすなりにき

里の名をとふ暇もなくけむりのみ　廣瀬さく子
あとにのこしてゆくくるま哉

時のまにくるまは見ゐすなりに鳧　山崎津喜子
立つるけふりを後にのこして

ひらけゆく御代のめくみのゆけ車　山崎しつ子
遠きたびぢもときのまにして

人しらぬ深山のれくもひくるまの　林　久子
かよふ御よとも成りにける哉

時の間に千里ゆきかひ眞かね路を　北條　桂子
はしるくるまの音ぞゆかしき

ときの間にひなと都をゆきかひて　河田いし子
はしるくるまのにきはしき哉

つかのまに國よふなさゝへかはる哉　井出すゞの子
ゆけのくるまにのれる旅には

眞金路を通ふくるまはときのまに　西元やす子
千里のはてにゆくへかりけり

わきわかるゆけのちからに黑金の　三原　孝子
みちの上ゆくうまし火くるま

時の間にちさとの國のはてまても　岡部不二子
まかねち走る湯氣のをくるま

飛ふ鳥もいかて及はむときのまに　岡部　龍子
ちさとを通ふ湯氣のをくるま

遠方のくもとみゐしはかなちゆく　北村てい子
ゆけのくるまのけむりなり鳧

九月廿日兼題　月を見る　（天地人の外は原稿到着者順なり）

天　播摩龍野　眞鍋　直子

八月十日あまりの月、いと花やかにさしのぼりて、

庭の千草の露にやどりたるさまの、いと〳〵をかしきに、かゝるあれたる宿をも、月の光のみはへたてざりけりと、いとうれしくて、かうやうなる夜は、思ふどち語りかはして、わろびたらましかはと思へども、誰もおとづるゝ人なきぞ、いとろう〳〵しう口をしき物から、猶此まゝいねんもいとほいなくて、獨おきゐてながめをれど、更け行くまゝに、清くすみまさる月の、さやけさいはん方なくあはれなるに、そゞろにこしかた行く末の事、はた世の中のはかなき有りさまなど、さま〳〵うかび出でゝ、哀に悲しくのみなりゆくにも、月見れど千々にといひけんも、かゝる折にやいと、又みしう身にしみて、例のとゞめあへぬ物は袖のなみだになん。

地

大坂江戸堀北三　守山比古子

ひとむらさめのすぎつるなごり、おもひすてがたくて、はしたなく見わたす折から、さしいでたる月影いと花やかに、あさぢが露にやどりてうちゆらぎたる、けにおもひすてがたくおぼゆ。やう〳〵遠くすゝみのぼり行くまゝに、きりわたりたるそらのけしき、なきしきるむしの聲など、いはむかたなし。さるはいむことぞといひし、古の人のいさめをわするとにはあらねど、こよひしもねてあかさむもさすがにて、とかうするうち、夜いたくふけて、風もひや〳〵と身にしむに、さらにこし方行く末をおもひつゞけて、袖の露おきあまりたるも、すゞろにはづかしや。

人

筑前嘉穂郡飯塚町　林　久子

山さとにすまひせしより、萬たらはぬがちなるにもにす、春は花、秋は紅葉のあはれつきせぬ中に、とりわきをかしきは、月夜にこそあなれ。こよひは望のよにて、月見のまとゐせまほしうおもふをりから、へだてなき友二三人とふらひきたれど、いとうれしく、はし近くいざりいでゝ、空のみ打ちあふぎつつ、待つ程もなく、山のはに月いと清うさしのぼり、庭の千草の花のさきみだれたる上に、ところせきまで置き渡したる露ごとに、影をやどしたるさまの、面白さにうかれけるにや、いつよりもをかしう鳴きすさふ虫の聲々に、人もきやうにいり、おのがじゝうたよみ文書きすさひなどするうち、いづこより風のさそひくるにかあらむ、いとなつかしき琴の音の、庭の松風にかよひきてきこゆるは、おなじ月見

のすさびにやあらむ、いでやおもしろき琴のねを聞きつゝ腰折くちすさまはやと、おのれも筆をとりて、

松かせにかよふもをかし秋のよの
　つきにしらふるつまことのこゑ

ひとりして見るにはをしき望の夜の
　月にとひくるともぞうれしき

人

陸前國登米郡登米町　及川　ちひろ子

楽しとも又悲しとも見る人の心の秋の夜の月、かへりみればはや一年となりぬ、世に杖とも柱ともたのみきこえつる我が夫の、大みことを畏みて遠きもろこしの軍のにはに旅立ち給ひしをり、かねて期したる事とはいへ、逢ふせも知らぬ別の悲しさ堪へ難く、まいて只ならぬ身にさへありければ、心細さ言はん方なきまゝに、思ひまきるゝよすがにもと、さし入る月のいとあかきにひとり閨の戸おしてながめ出せば、あやにくに、その人の面影のつと身にそひて、かこち顔なる我が涙に、くまなき影も、くもり果てたる心地せられしは、去年の今霄になんありける。かくてあくる年の春、安らかに男子をまうけて、少しなぐさむ方の出で來つるに、程へて、夫も、つゝがなく凱旋し、あまつさへすぐれしいさをゝ立て給ひて、金鵄の勲章をさへ賜はり、故郷に錦をかざり給ひしかば、嬉しさ、喜しさ言はん方なく、今霄はふたり相むかひて、まな子を中に、すぎにしうさを語り合ひつゝながむれば、月の面もほゝ咲む心地せられて、山の端逃げて入れずもあらなんとも言はまほしく、げに心々の秋の夜の月にぞありける。

香川　頴子

春すぎ夏も暮れぬと思ふまに、いつしか秋の最中となりぬ、例ならば思ふどちまとゐして、めであかすべき今霄の月を、獨り淋しき窓にながむるに、折ふしかゝる雲もなく、ぬぐひあげたらんやうなる空の、殊更あはれにすみ渡りて、例へん方もなく清らかなるに、匂ひなき言の葉そへんよしもなく、たゞ徒に上のみ仰がるゝ物から、心付きて前栽の方を見やれば、草葉に結ぶ白露の光、えもいひしらずめでたきに、葎の宿も、今霄ばかりは、玉しきの宮にも劣るまじうおぼえてをかしさに、さう〳〵しかりつる心もなくさみぬ、かくて夜のふけ行くまゝに、月の光はい

よゝさやかに照りまさりてすごく、打むかひをるにも何となう物淋しく、草村の虫の音もいと心細けれど、そゞろに秋の哀も思ひしられて、つくづく我身を省るに、心はづかしき事のみ多く、昔よみ物かく道はさらなり、裁縫のわざさへおくれにおくれたるを、此行末はいかになるらんと、さすがにかなしく、涙さへさしぐまるゝに、月のおもはんこともやさしく、こもみな我心よりぞ、いで今よりはと思ひかへしてうちむかへど、千々のかなしみおもひまさりて、我身一つのといはれにけん、古人の言の葉も、今更ふかく感じてなむ、

佐藤かめを子

今年もはや秋のもなかになりけれど、いかで名におふ今宵の月を見んものと、虫にあらねども、たそがれ時よりまちつゝをるに、ほどもなく東の空赤くなり行きて、玉の兎は山の端にをどり出でぬ、いとうれしさに、思はず庭にはしり出で、そゝろ歩きしながら仰ぎみれど、月高く空にかゞやき、又見下せばなみ静かなる池水に、空行く月のかげうつりつつ、雲の上も池の底も、同じ如くになんありける、軒にすをはるさゝかにの、糸に貫く白露は、玉の簾とまがふまで美くしく、夕露にぬれたる草の花、吹く秋風に打ちなびくなど、いとをしげなり、千草の花をあやなして、月の明におるならん、はたおり蟲の聲たかし、哀れ同じ空なる月ながら、春は朧にみえつゝ、今宵は又かくまでさえざえて照りまさりたることの、いとをかしく、思ひつゝくれど、五年六年さいつ頃なりけり、同じ學びの友どちと共に手をたづさへつ、古里にありて、今宵に似たる月みしも、それよりいくとせの秋をへて、今は獨り友にはなれてかゝるところに月見るかと思へど、何となう又物哀れに思はれて、いとわびしさに

みるまゝに昔の友の慕はれて
哀れつゆけき秋の夜の月

名取正代子

四の時かはるものにもあらなくに、月としいへど、昔より葉月のもちの夜の月を、こよなうめでたゝへつるならひ、今の世もかはらざりけり、こよひはすなはち秋の最中にしあれど、さやけき月をめでましものと、晝の程よりれむしまわたりさむしろしきの

とへつゝ、暮るゝをまちわびゐたるに、やゝありて、ひんがしの山の端きらめきわたりて、やがて立のぼる月かげ、ゑもいはれず、こゝろくまなきうからだち打つどひて、あな面白し、あな樂しなどをのをのもうたひさゝめきつゝながむる程に、月のやうやうのぼるに從ひ、いよゝすみまさりて、ひろき大み空に、一點のさはらんものなきに、心の底までもいよゝすみわたりて、をのれもくもゐにすむ心地ぞせらる、げに月雪花とめづるが中にも、かくばかり心ゆくながめは、月をおきて何かあらむと、かくいひのゝしるうち、はやくも月影のかたぶきそめて、今や西山の端に入らむとするに、かの山の端にげてとのたまひし、昔の月もかゝりけんなど、しのばるるまゝに。

山の端に入るまで見れど見れど猶
　かげ惜まるゝ秋の夜の月
いましばしとをもふこゝろにまかせねは
　月もこの世にならふなるらん

などひとりごちつゝふしどに入りぬ。

梨　本　信　子

いつはあれどいづれはあれど、今宵の月こそと、兼ては人々といひくらしつれば、朝まだきより、家のたかどのかき拂はせて、何くれと用意などしけり、日影夕づく頃より、同じ心の友ども三人四人打つどひきて、風やふき出でん、雨もやふらんなど、空打まもりて待ちくらすさま、靜心なし、蜑が鹽やく烟さへ、雲かとばかり見あやまちてはいとはれしに心づくしの甲斐もなく、夕すぐる程より空かきくもりぬ、歌人ならなしかば、雲ふきはらへなどいはましをと、口惜かるに、折からさと音づるる松の嵐に、名殘なく晴れ渡り、漁火の影かと見ゆるばかり、波間より月さし出てにけり、かくてこそ本意かなひたれとて、嬉しさに「今宵のながさいはよつぎてこそと、古歌ども口ずさむに、「月よみ男の賂には何をか捧ぐるぞと、ある人のゝしり笑ふもをかし、更け行くにつれて、海には冬の來ぬらん、白きは浪か雪かと驚かるゝに「立かへり月をあらへど色は變らずと、いひけんも、哀なれど、いざや諸共に玉敷の眞砂路ふまむと、をりたち、打擧げられて寄來るものなど拾ひつゝありくに、遙に笛の音ぞすなる、泣くか

悲しむか哀に床しくて、聲をしるべに足音低くたどれど、思ひきや、磯邊の松が根に、腰打よせて、虎狼も何ならずと、雄たけびすべき武士の、太刀はき衣も汚れたるが、此處に人ありとも知らで、心こめて吹きさびたるなりけり、あな優し、容儀にも似ぬ風流士もありけるよと、平氏の昔も覺えて哀なれど、妨げせじと思ひつゝ、元こし路へ立歸らんとせしに、其けはひをや思ひ知りけん、靜に笛をさし置きて見返りたり。

あなや御妨し侍りぬと、會釋しつゝ、打ち過ぎたりしかど、皆諸共に引違へて行く、夜半ばかり宿に歸りて、面白かりき、彼武士なかりせど、あたら夜のともいはましをなど、語らふに、留守せりし人出で來て、げにかの人こそ、誠に心ある人なれといふを聞けど、去年の秋なりけん、唐土の醜草平げんとて、軍めされし時、かの人もそがはらからとも思ふ友と共に、御軍に從ひしが、何とかやいひし處の戰に、明日はつとめて敵おとし入れんと、こよひの如き月に露宿せし夕、故鄕のこと、行末の蹟など語り合ひしが、其翌日にや有りけむ、雨とふる玉に、友はあへなく消え行きて、かの人は、同じ日にまれなる功顯はしきとかや、今は家に歸りて君が御惠のもとに、豐かに日夜を送れど、月毎の十五日には、必ず出陣のまゝの裝束して、一人かしこに形見の笛ふくなりとぞ、さるにても優しき人ならずやと、涙おとしつゝいふ、人々あなゆかし、さらば尋ねてくさぐさの事きくべかりしをなど、語らふ程に、いつしか笛の音もやみて、明方近き月影に、遠く近く聞ゆるは、哀にも夜すがらたえぬ砧の音なりけり、あなこれも誰が宿に殘りし妻にかあらん、なげゝとて月は物を思はせねど、見る人の心々に、嬉しとも悲しともさまざまならんを、思ふことなきまどゐに、かくしも心やすく詠めあかすも深き大君の御惠によるなりかし。

北島喜代子

月見れどちゞにものこそ悲しけれ、吾身獨りの秋にはあらねど」と、大江千里のものしたるもいと道理なりや、ある夜書を讀む業にも倦みけれど、庭などそゞろ歩みしけるに、光りいと爽けき月の、小松の蔭より登り出で、庭の池にうつりたる樣、何にた

どへんものもなく、夜の更け行くも知らでありけるに、草むらに鳴く蟲の音も、微かにあはれに聞えて、軒端の荻の風、あるは軒近き吳竹の下風など、ざわさわと吹き渉りて、さびしう思ふ折柄、かりがねの聲絶え〳〵に鳴きて、聞く人の心にやひときは哀れを添へてけれど、獨り光陰に關守なきをかこち、あるは浮世のはかなきを歎きて。

ま丶ならぬ浮世と兼て知りながら
かくまでとしも思はざりけり

かく詠み出で百の感千々の悔湧きて、いと抑へ難うなりぬ、夜もいたくふけぬれど、庭の草木にか丶りし露のいとはかなけに宿りて、冴え渡る月にきらめき、いつとなく袖にこぼれか丶れり、さても世にはうき事のあまたあれど、又嬉しきふしに遇ひ、樂しき事にも逢ふ時のあるを、なとてかく歎くならんと、われながら可笑しうてなん。

佐々有鄰子

くもりがちなりし此ごろの空も、今よひはことさらうちはれて、庭のむしのねいとさやかに、草の葉末の露のしら玉、とりどり光うるはしく、秋になびく風のおとしも、松にしらぶるつま琴のねにかよひ、一しほおもしろきは、月の桂の花うるはしき秋の最中のながめになん、ありける、あなめでたの影なるかなと、母人と、床几をならべて、都の方をうちみやれど、學友のもとより、雁の玉章ならで、電信文にて、コヨヒノツキイカニとありけれど、返電信文にはツキヒルノゴトシと三百里にちかき東京のかたにこたへけるも、大御代のたまものにこそ。

奧原ふく子

名殘の雲もはれゆきて、拭へるか如き大空に、輝き渡る星の三つ二つ、こ丶にかしこにさ丶やける折しも、まつ宵の月は、東の山の端をはなれて、尾の上の松か枝にか丶りぬ、夕風に心をすまさんと、門近く立ちいつれは、さや〳〵と流る丶小川の音す丶しく、月の光りをうかへつ丶、稻葉をわたる秋風は身にしみて、はら〳〵と散る露の白玉は、肌をうるほし、賤か伏屋の燈火かすかに、門守る犬の聲はのかに聞ゆ、げにこの靜なるけしきに對し、誰かあはれを催さ丶るへき、我を忘れてなかめけるうちに、いつしか夜も更けぬらん、月は高く中天にのほりて、

千里の外もあきらかに、心もいよ〳〵すみまさりぬ、あはれみ空をわたるかりかねよ、このあはれなる山里のけしきを、都の空ふるやいかに。

長洲餘野子

げに山のあなたもなごりや惜みけん、やう〳〵のぼりし居待ちの月を、妻戸おしあけさし入れて、大空高く見さくれど、すゞろに古の人の忍ばれて、いつか我袖にも月は宿れり、我故郷の父母は、このながめをいかで見はるかし給ふらむ、我故郷のはらからは、此月を如何にながむらん、おもへど思へど、みな我涙の種ならぬはなし、など思ひ出づれど、そよ風もいたう身にしみ、頭もおのづとうなだれ來て、只夢の心地のみぞする、此月此ながめ、たのしく見る人もあるらんを、我のみかく悲しきにか、と氣とり直してあふぎ見れど、あなにくや月はむら雲がくれ、あなた樣にてり渡りておぼろげなり、いと興さめて、しばし見るうちに、月はむら雲をはなれぬ、あならればし、友もがなと思ふ折から、ふとおどろかす人あり、いと嬉しくて、こしをれどもいひ交はして、打ち興じたのしみしに、夜ふけたれど、今はいりねといふに、心なの人やとつぶやきている、「いまはとて戸ざすもうたてる月を我ぬるのちも雲なかくしそ。

杉浦芳子

蟬なき渡る日の影も、いつしか消えて、夕月夜松吹風の身にぞしむ、契り置きし我か友どちは、いかでとひこぬ、此月を見すて、いねむもいと惜しきものをと、かこつうち、心隔てぬ友どちの、いざ月見にとよび玉ふこゑの嬉しくて、諸共に手を取りて、こし方行く末を語りあふ心も、すみ渡る月かげに照らされて、其たのしさたとへむにものなし、古き歌など思ひいでて。

照り渡る月にうかれて諸共に
おもはずたどる敷島のみち

など口ずさみ、夜のふけ行くも知らでありしに、雲間にひゞく鐘の音に打驚き、あすのつとめあるを思ひ出で別るゝとて、今より共にかく照る月を、おのが心の鏡とし、此月のごと、御國の光を、外國までも輝やかさばやと、打語らひをしき影を空にのこして、

曇りなき月のかゞみを仰ぎつゝ
おのが心のくまをみがゝむ

花山保江子

春の花、秋の月と、ほめ稱ふれども、田舍に生ひ育ちし妾には、吉野隅川堤の花の盛りを見る便もなけれど、たゞ年毎におもひ待たれぬるは、秋風の袂むらを吹き渡る夜中に、鈴蟲の鳴きすたく聲を聞きつゝ、廣庭に打ちいでゝ、いとも澄める中空にかゝれる月を仰ぎてながむる心地こそ、實にもうき世のくさ〳〵の憂を打ち忘れたるごと、心も空と共にすみわたり、こよなく嬉れしき事になんおぼへける、然れど、いつもの年も、中秋の月見る事をのみ樂しみにおもひ待たれけり、都にすめる姫たちよ、雲か霞かと咲き匂ふ花の盛りの樂しみを知らずして、月の淸きをのみほめたゝへたる妾が心を、笑ひさけすみたまふをゆるしてよ。

土肥仙子

秋は月にまさるはなしと、むかしより世々の人のめで來つるものから、ことに今宵はもちの夜なれど友だち三たり四たりをともなひすみだの川に舟をうかべて、せうえうせんと、夕つかたより掉さし出でしに、やがて山の端をはなれて、そらには一點のちりもなく、いとさやかにすみわたる月のみふねに、われものれる心地して、をちこちのころくまなく、こぎよせさしよせ尋ね見れは、あなたの岸には、秋草やさしう咲きそめて、靑葉きら〳〵と光りみち、こなたの岸には、かへでの葉の一は二はおちちるかげの、いとゆかしく、あるは又やかたのうちに、月の名におふ月琴といふものゝ音に、笛竹ふきあはするもありて「とり〳〵なるけしきありさまを、舟中に居ながら見きゝつゝあるも、いひしらず興ありて、いと樂しうもをかしうも、日頃のうさわすらるゝ心地して、時のうつるもおぼえず語りあひけるが、いつまで見るも限りなけれど、こゝろをのこして、いざかへらんと、舟よりおりて、とやかくするうちに、月もはやかたふきてけれど、そよふく風の身にしみて、そゞろものさびしうなりて「山の端にいでゝかたぶく月みれどさびしさまさる秋のよはかな」と、口すさみつゝ、なごりをしみて、わかれかへりぬ。

牧野貞子

月をめづるに、いつとはなけれど、秋の夜どかりをかしきはあらじ、村雨の空はれて、夕露の雲なこりなうはれし夕まぐれ、千草にすだく蟲の音もいろが

はしげなるに、今宵はまたことにやあらんと、家のおのれの／＼打集ひ待ち渡るに、やがて彼方の空あかうなりぬと見る間に、月はさして出てぬ、軒にかゝくる燈火も、今はむやくになりぬ、とくそむけんなど打さわぐに、やう／＼木蔭はなるゝまゝ、あたりいとさやかにて、そこゝに咲く萩の花の、枝もたわむばかり白露のおきわたしたる、あし垣のかたへに花すゝきの打招けるも哀にて、今をさかりの白菊に、光のそひて、我は顔に見ゆるもをかしく、庭のさまも何となく常に變りて、今宵ばかりはなつかしき心地しつ、好める道とて、みな／＼筆とりて、直におとらじと、品定めなどして打興するに、夜ふくるまゝ、いと物靜にて、風のまに／＼、いつくよりともなく、糸竹の音きこゆるも、同じ月にあくがるゝにかとゆかし、今更のやうに高うなりたる蟲の聲に、いよ／＼月のくまなくわたりたるに、めづらしく初かりの鳴きすぐるも、またなく哀におぼえぬ。

鷹野節子

春の月のおぼろなる、夏の月の清水にやどりて影すゝやかなる、冬の月の雪の上に冴えて其影の清らかなる、何れめでたからぬはなし、されどたぐひなく秀でたるは、秋の夜の月にこそあれ、空一点の雲だになく、星の影のまばらに、くまなき月のみ月の桂に棹さし、天の川を渡り、草葉の露にやどる影の、眞玉白玉と見えつる夜、むつましき友とかたらひつゝ、物の哀は秋こそまされと云ふことわざもよそにて、衣の袖の露けき迄、詠めふかしゝ夜の樂み限りなくて、かくなん、

宵よりも更け行くまゝに照りまさる
月に衣をしめしつるかな

降田まき子

いざ諸共に月を賞でんと、むつたまあへる友のそゝのかすまゝに、母のゆるしを得て、後ろの小山にのぼりぬ、頃しも秋の半にて、ちりばかりも曇りなき大空に、さしのぼりたる月かげ、いとおもしろく、あたりはさながら晝の如し、ふして麓を望めば、田毎に月をやどし、稲葉の露の玉と見ゆるもをかし、仰いで空を見れば、月はいよ／＼澄み渡りて、只一つの大鏡をかけおらんが如く、むらぎもの心も自らとはれ渡りて、浮世の外に入りし心地ぞする、げに月は

秋こそ見るべかりけれ、さはいへ、見る人の心によりて、或はかなしとも、あるはあはれとも、おのおの思ひはことごとならんなど語らひ、古人の歌など口ずさみつゝ、我にもあらで、ながめ居けるが、余りに遅くなりてはと心づき、いと惜しけれど、心をあとにのこして歸りけり、道すがら虫の聲々いとしげし、なれもまたこよひの月に浮かれ出てやすたぐなるらん、あはれ〳〵。

水津すけ子

ゆゑありてある山寺にものしけるに、けふは陰暦八月の十五夜なりければ、月見はやさむと、出てくる人々、みなこゝにものしぬ、大かたは、うた人俳諧師などいふたぐひなるへし、この寺は、小高き岡の上にありて、見わたすわたりは、みな水田なれは、穂波うつ稲葉の風も、いとこゝちよし、己れ等のやどれる間は、眞東にむかひたれは、冴けき影は、家のなかばまでさしいりし、きよさいはむかたなし、山の端を出づるころは、あやにくに黒雲の立ちふさがりて、おのかしゝなげきゐたりしが、少時ありて、いさゝかの曇りだになくなりしかば、清き水の上に、さながら玉などのうかひたるがごとくなるに、かはりやすきはなどいふ諺も、今はなか〳〵にうれしく、時のふるをもしらざりしが、やう〳〵に空たかく登りたれは、いまゝでのゝしりし人の聲も絶えて、向ひの森のかげより、笛の音の、そよふく風にをり〳〵きこゆるも、なほあくかるゝは吾のみにはあらざりけりと、いとなつかし、鈴虫まつ虫の、音かたみに鳴きしきりたる、あるは岡より落つる水の、かすかに聞えたるなど、折につけていとあはれなり、むかし何某の、月見る月はといひけむは、實にもとおもひ合せられてなむ。

長谷川はる子

秋はいつしか最中となりぬ、けふは朝より空いたう霧ふたかりて、雨さへをり〳〵こぼれしかば、あはれ今宵の望月も、あたら暗くてのみ打過ぎなんか、嗚呼口惜のかぎりやと、打かこちてのみありしが、晝過ぐる頃より、雲のたえまやうやう見えそめくるままに、かたへは晴れ渡りたれば、失せにし玉のふたたび得らるべうなる心地のせられて、いといたう嬉しく、やをらはし近う打出でて、月の出つるを待

ち詫び居たるに、東の空に棚引き殘れる村雲の間より、いといと大きやかにて、次第に光を放ち、見る間に空高う昇りて、いと清く、四方に澄み渡れるさま、ゑんに美しく、譬へんやうもなし、庭の草むらにおく露の、きらめきて玉の如く見ゆる、そが中にて、ふりしきりたる鈴虫の聲、遠く聞ゆる笛の音にましりて、又一きはのあはれを添へたり、あまりのをかしさに、我を忘れて、徒に空をのみ打まもり居たるに、れひ／＼夜も深くなるまゝに、笛の音もいつしか消ゑ失せ、草むらになく虫の音もよわりゆき、人々寢しづまりて、すごく心細けれど、あたら光をと獨言ちつゝ閨に入りぬ、

今藤仲子

今宵こそ、待ちに待ちつる八月十五夜にしあれど、我里のならはしとて、夕つかたより、とり／＼に、くさ／＼の備物などなし母君はじめ、はらからたちと、椽さきにまとゐして、月見せんといふほど、やがて打わたす岡邊の松をはなれて、やう／＼に光り涼しく立ちのぼるさま、ゑもいはれず、何もなき荒庭も、今宵のみは、玉をつらね、黄金をしきたらんやうなるぞ、いとも嬉しきや、心なき草木も、蟲も、今宵の月のうれしきか、まがきのすゝきはにいでゝ招けど、こなたの糸萩もゑましげなり、くさむらになくきり／＼す、いつよりは聲もすみて、ふりたてなくも今一入にをかしかりけり、夕つかたものしたる團子、さゝ栗など、とりいでゝ、たのも／＼打食ふ程に、空はいよ／＼澄み渡り、影ます／＼さやかなるに、我身もそゞろに心すみわたり、みそらにかける心地す、折柄秋ふく風の音身にしむばかりになりけれど、人々にうながされて枕にはつきぬれど心は猶もひとりたどりて、月の桂を手折らんとやすらん。

小西琴子

入相の鐘かすかにひゞきて、夕日の影は山の端にかくろひたるも、にほひはいまだ空にさかゑ、殘れる頃、ゆあみし終りて、心すが／＼しきまゝ、すのこのはし近うすゝみて、涼しき風に吹かれなどするこちに、またく暮れしづまりて、庭の面のやり水に、さやけくうつるその光は、今夜の月とぞ知られける、見上ぐれど、さえ渡りたる空に、すゞしくかゝる影清く、萩の葉末に置く露も、玉と見まがふばか

りなり、あな哀れ、こよなき月の光かなと、獨りながむる其中に、母上妹つどひ來て、共に眺むる樂しさは、えもいひしらぬほどにぞある、飲まんとて手にとる茶碗の底にさへ、清くうつれる影、うらはづかしきまで奥床しく、見るも哀れなり、時移りて、月影小さくなるまゝに、吹くとしもあらぬ風に、袂のくだり涼しうなりゆくは、林の露を拂ひて來るにやあらん、ふと身にしみて覺ゆるほどに、父上の此世にいましたらんにはなど、思ひ出でられて、すぎこしかたこひしく哀れいはんかたなし、月てふものは、かけてもみつるものなるに、人にかくぞあるならむと、母上の宣へるは、過し昔の忍ばれて、思ひ餘りし末の御言ぞときけば、また一入哀れの催して、夜はいたく更けたりけん、あたり靜かになるにつれ、蟲の聲のみいと高し。

續木かめ子

宵なから出つる月影圓かにて、浮雲もなき空に、澄み登る光いとさやかに、千里くまなく照らすらん、山里の賤が家の數さへ見へて、晝にもまがふばかりなる今よひぞ、實に秋の最中にしあれた、名にあふ月を眺めむと、門田の稻葉おとづれて來る人もなき我宿の、あれたる庭の小萩が中に、まつ虫の聲小止なく鳴きすだくさへをかしきに、千草の露に月さして、夜は玉敷く庭とも見えて、面白さ限りなきに、不斗おりたてば、露の白玉はら〳〵とこぼるゝ音にや驚きけむ、虫の音いつしかとだえ、あたりもいたく靜まり果てし折しも、誰がすさみにや、笛竹のひゞきかすかに聞ゆるに、大空の月と共に、心も清くうち仰げば、何處にかよふか、雁がねの一行、鳴渡るさへ、いとゞゆかしく、虫の音も又遠ちこちにおこりて言はんかたもなきながめに、我も琴とり出でて、引板にさへおとる調べも、今は小夜更けて、聞く人もあらじと思へば後ろ安くて、心ゆく限りかきならし、猶あかぬ月のながめをゝしみて、明けゆく空をうらみぬ。

田津木久子

夜もやう〳〵更け行くまゝに、人ははやうしづまり、空は清うすみて、はれ渡りたる月の光りは、けにいつはあれど、こよひの月の色にはにるへくもあらず、前栽の花の、いろ〳〵咲きみだれたるにさまざまの虫の、聲をきほひて聞きかはしたる、一しほの

けしきもまさりて、いとなつかしうもかなしうも、物おもはるゝ折しも、さやけき月にやうかれにけん、をかしう吹きすましたる笛竹の音の、いと物すごう、遠く絶々に聞ゆるなど、あはれさの身にしみて、かぎりなきは、かゝる月の夜半になん。

田巻　ひでよ子

秋の夕の物わびしさに、たへかねて、やどを立出て、そゞろありきするに、さやけき月かげは、かなたの山の端よりのぼりぬ、空はぬぐひたらむやうにきよく、ちりもくもらぬ影の、水にうつらふさま、げにえもいひしらず、心のくまもすみわたりて、いとすが〳〵しうなむ。

ひらけゆく御代の光にたくひつゝ
　月かげきよくすみわたるなり
秋といへどいとすみわたる月かげも
　わきてこよひはさやけかりけり

北村　孝子

秋もはや、中ははすぎて、風冷やかに萩の下葉も、いつしか色づき、蟲の音いとゞ哀なり、こよひは十五夜とて月もいとすみわれり古人も今宵の月をめてゝは三日月の頃より待ちし今宵かなどまでうたはれし、などひとりごちつゝ見るに、心も空と共にすみわたりて、うき世のこともわすれたりつるに、雁の一つら月をかすめて鳴き渡るにいとゞ哀れ覺えて、ふく風もいたく身にしみてなん。

得田　なか子

ひぐらしのこゑもたえて、こうろぎのなく音すゞしき月影に、ひとり打ち眺むれど、月といふ月の中にも此月とむかしより今にたゝへきつる、今宵の月ぞめでたしや、千里が我身ひとつの秋にはあらねどとなげきしも、此月、ふかやふが雲のいづこに月やどるらん、とをしみしも、又此月なり、嗚呼此月、くしき月よ、如何なる神のわざにかあらん、實におもしろき今宵の月、されどこのたのしさも、をくらの山になく鹿の、こゑのうちにや秋のくるゝと思へど、又悲しくて、打ち守れど、天つ風ふきもやらぬに、月のかつらのちりしきて、にはのやり水によどむは、かの國の流れの末にぞあるらん、いともかしこくて、

久かたの雲井のかつらたをれとや
　なかれにうかふ秋の夜の月

富士谷御杖大人著

土佐日記燈

菊判　大和綴　美本

近刊

富士谷御杖の翁の、斯の道の學に至り深かりしは、今更にいはず、そのものせられし著書れはかるが中に、燈といふもの、古事記燈、萬葉集燈は、翁か在世のころに、ゑり卷となりて世に廣ごりしも、この土佐日記燈は、はやく文化の末つかたに成れるものなるが、さる由ありて時の粟田の宮の請はせらるゝに、稿本のまゝに奉られりしを、後いくばくもなくて、翁ははかなくみまかられにしかば、さながらに埋もりて、流布せずなりにき、世の學者、みまほしうすれども、さるよしもなくて、空しく年經ぬること、こゝに數十年、さるを翁の男元廣ぬしが、さるべき筋より辛うじて、寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたび我が社にて、摺り卷にものして、廣く世に流布せしめてんとす、そもそもこの燈は、世にありふれたる注釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしは、かりそめのすさびにあらず、土佐の守に任されしをふかく憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになして、深き心はその言葉のうちにふくめたり、といふをもとゝして言詞は、更なり、文意をもいと委しくときなしながら、いと廣く考證をも引き出でられたり、この書今より世にひろごりなば、學者を益すること尠からざるべく、はた、翁の靈も天翔り國翔りて、うれしとよろこび給はん、やよやの斯道の學に志あらんものはいちはやく繙きてよかし、

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
（電話番號一九四六）
發行所　國光社

女鑑第百拾六號目錄

〔明治二十四年八月八日內務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**銀座**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定		價	廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年九月十九日印刷
同　年九月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)